

魔導士ルーファス4

秋月あきら

第一六話 伝説のドラゴンスレイヤー

《一》

一〇月の守護神は鍛冶の神であるゾギア。

そして、一〇月一〇日の今日は鍛冶の日である。

王都アステアでは今日の日になんで、武術大会が行われる。古くからある大会で、軟派なアステア王国には珍しい血なまぐさい大会だ。

「こういう大会苦手なんだけど……もう吐きそう」

ぼやいたルーファス。

五万人を収容できるコロシウムは熱気で溢れている。多くは野郎客だが、女性の客も多くいる。とは言っても、万人に受けるような場所ではない。

なぜこんな場所にルーファスが来ているかというところ――。

カーシャがめんどくさそうに、生徒たちの前に立った。

「これから一時間は自由行動だ。今になって大会にエントリーしたい者はこの間に済ませておくように、ほかの者は試合がはじまる前に席に戻ってこい。以上、解散」

クラウス魔導学院の社会科学見学で来たのだ。

「ねえ、ルーちゃんは出場しないの？」

と、ビビがなんの疑問もない表情でたずねてきた。

「するわけないじゃないか！ これがもし魔導大会でも絶対にしらないよ（痛いのイヤだし）」

「だったらアタシ出ちゃおうかなあ」

「危ないよ絶対！」

「だいじょぶだよ、アタシどっちかっていうと魔導より武術のほうが得意だし、武器はなんでもいいんでしょ？」

「剣術、槍術、弓術、棒術、魔法を唱えたりはダメだけど、魔導技術の使われてる武器と防具とかはオツケーだったかな」

「んじゃ、アタシのはオツケーだね！」

いきなりビビは亜空間から大鎌を取り出した。

ビュン！

ルーファスの眼前で刃が風を切った。

「うわっ！ ひとの多いとこで危ないから！」

「あ、ごめん」

すぐにビビは大鎌を亜空間にしまった。

たしかにビビは大鎌使いではあるが、観客の収容規模からもわかるように、とつても大きな大会である。獅子の群れの中に子猫を放つようなもの。取って食われる程度で済めばいいほうだろう。

二人が話していると、クラウドがやって来た。

「ビビちゃんも参加するのかな？」

「やっほークラウド。楽しそうだし、危険はないんでしょ？」

「最高峰の防御結界と、防御魔法が出場者にはかけられてるとはいえ、強い攻撃を受ければ衝撃と反動は計り知れないな。僕

の代になってからは死亡者は出ていないけれど、それでも毎回重傷者は多数出ているし、ビビちゃんみたいなかわいい子には進められないね」

「えっ、そんな怖い大会だったの!? 会場の外に屋台もいっぱいあったし、お祭り感覚だと思った」

お祭り感覚であることには違いないが、盆踊り大会の雰囲気ではない。

ルーファスは心配そうな顔をクラウドに向けた。

「今回も出るの?」

「ああ、もちろん。王としてではなく、ひとりの剣士として。

去年は一回戦からまさかヴェガ將軍と当たるなんて、しかもボロ負けで大けがまで……（あのお陰で前の大会での八百長疑惑は晴らされたけど、王としての威厳は下がったな）」

ひとりの剣士として出場したくても、そこにはどうしても王という肩書きが付きまってしまうのだ。

周りにいた人々の動きと声が止まった。

燦然と輝く白銀の鎧。太陽のように輝くブロンドヘアの女騎士。人々の視線からも今大会の注目度がわかる。

「第一予選の準備と開会宣言の準備がありますので、お戻りください」

その女騎士が仕えるのはクラウド。魔導騎士エルザ、クラウドの側近中の側近であり、クラウド魔導学院の卒業生でもある。つまりルーファスたちの先輩だ。

エルザが話しかけたことによって、クラウドも注目されはじ

めた。

「不味いな、バレたかな。それでは僕は失礼するよ。ビビちゃん、僕の応援頼むよ」

足早にクラウスがエルザと共に去っていく。

「任せといて♪」

ビビはクラウスの背に投げかけた。

《あと三〇分で当日参加の受け付けを終了します》

会場にアナウンスが流れたが、ほとんど人々の大波のような声に掻き消されてしまっている。

「ルーファス様ーっ！」

荒波を越えて少女が駆け寄ってくる。

嫌そうな顔をするルーファス。

「……げっ」

それとは対照的なニコニコ笑顔のビビちゃん。

「セツたん、こんちわわー！」

「おはよう……ビビ」

ビビの顔をあまり見ないようにセツはあいさつを返した。少し頬が桜色だ。

二人ののようすを見てルーファスは、

「(相変わらず仲悪いみたい)」

きのうのビビとセツの温泉秘境大冒険を知らないルーファスは、そんな風にセツの態度を見たようだ。

気を取り直したセツが元のテンションに戻る。

「ルーファス様、大変です！」

「(セツが現れるといつも大変なんだけど) どうしたの?」

「この大会の優勝賞品は純正ホワイトムーンのトロフィーです!」

「……へえ (まさか出場するとか、出場しろとか言わないよね?)」

「いっしょに出場しましょう!」

予想の中!

「うん、出ないよ♪」

ルーファス笑顔で即答。

ビビが獅子の群れに子猫なら、ルーファスはネズミだ。

ならばセツは?

「いいえ、絶対に出場します。予選はバトルロイヤルですから、二人で出場したほうが有利です。愛の力でがんばりましょう!」

へビだ。しつこいの代名詞のへビ。そして、へビに睨まれたカエルのように、ルーファスは強硬なセツに対抗できない。あ、ルーファスはネズミだった。どちらにせよ、ネズミだろうがへビにかかれば、丸呑みだ。

「アタシも出るー!」

ビビちゃんが拳手した。ヤル気満々だ。

バトルロイヤルとは、三人以上が同じ舞台で戦い乱れる勝ち残り戦だ。出場者同士が強力し合うことも可能なため、セツはルーファスと出場しようとした。ここにビビが加われば、さらに強力して戦うことも可能だ。

が、セツはほそい目でビビを見つめた。

「足手まといになります」

「ならないよっ！」

すぐにビビが食い付き、ルーファスがコソツとパクツとする。

「それを言うなら僕のほうが足手まといになると思うけど」

「ルーファス様はわたくしがお守りいたしますから心配なさらずに！」

ソレツテ足手マトイナンジャ？

万が一、バトルロイヤルの予選を通過できたとしても、その先には本戦がある。

ルーファスの顔は心配一色。

「予選は毎年運良く勝ち残っちゃう人がいるみたいだけど、本戦は一对一。実力がなきゃ一回戦で負けるに決まってるよ。この大会は規模も大きくて、国内外から実力者が出場してし、当日に参加受け付けをした出場者は、多く戦わなきゃいけないんだ」

勝ち残る可能性は低くなるばかり。

なにか良い手はないものか？

……と考えるのはセツだけ。ルーファスは出場したくないし、ビビはノリでなにも考えていない。

「優勝候補はどなたかわかりますか？」

と、セツ。

「前大会はだれが優勝したんだっけ？」
と、ルーファス。

「アタシに聞かれてもわからないよお」

と、最後に顔を向けられたのはビビが答えた。

近くにいる男たちの声が漏れ聞こえてきた。

「A組予選はゼッケン八六は本命だろうな」

「俺は一番の子に二〇〇〇ラウル賭けたぜ」

「おまえ顔で選んだら。これ美女大会じゃなくて武術大会だぞ」

賭の対象になっているのだ。

ルーファスは観客席に来る前に通った広場のことを思い出した。

「そうだ、この大会は運営本部が公式で賭をやってるんだ。優勝候補は一目でわかると思うよ」

三人は賭けが行われている広場に向かうことにした。

お目当ての優勝の賭は、一回目の締め切りが予選A組と同時に行われる。まだ一つも予選が行われていないため、参加者全員が賭の対象となる。ただし、最終予選は当日参加組なので、まだ参加受け付けの最中ということもあり、全参加者が出そろっているわけではない。当日参加組はリストに登録された者から順次、賭の対象となる。

広場に設置された超巨大ディスプレイに、現在の人気優勝候補者とオッズが表示されている。

ディスプレイに表示された六番目の名前をルーファスが指差した。

「エルザ先輩の名前だ（六番人気なんてさすがだなあ）」

「知り合いですか？」

セツが尋ねた。

「あれ……さつきエルザが来たとき、いなかったんだっけ？」

「ああ、さつきすれ違いました。前にもお会いしたことある方ですね。ルーファス様のお知り合いなら話を付けやすいですが、六番人気では心許ない。手を組なら優勝できる方がいいのですが……」

「手を組むの？」

「わたくしたちだけでは予選は通過できても優勝は不可能でしょうから（最終的には優勝者にトロフィーを譲ってくれるように頼むつもりだけれど、優勝の証を簡単に手放してくれるかどうか）」

後ろにいた男たちの声が漏れ聞こえてきた。かなりのヒソヒソ話だ。

「なあ聞いたか、伝説の男が出場するって聞いたぞ」

「伝説の男ってだれだよ？」

「ドラゴンスレイヤーの（地鳴りの大狼）だよ、出場したら優勝間違いなしだろ」

「そりゃすげえ、大剣一本で超巨大なドラゴンを殺したって男か。しかも一人で。竜塚があまりにデカイもんで、地図を書き換えた話だな」

「けどさつきっから名前探してるんだが、どこにも載ってないんだよ」

「ならガセだな。それにそんな男が出たら賭けにならないだろ」

二人の男が話していると、知り合いらしき男がやって来た。

「おいお前ら、マジでいたぞ。今酒場に行ってきたんだが、ありゃ間違いねえよ、絶対本人だ」

「落ち着けよ、だれがいたんだ？」

「へ地鳴りの大狼」に決まってるんだろ、周りにいたヤツらも絶対そうだってコソコソ話してたぞ」

話を聞いていたセツがルーファスの腕を引いた。

「行きましょう」

「どこへ？」

「いいから、早く。参加受け付けが終了してしまいます」

「げっ、やっぱり出場するんだ」

てつきり受け付けまで引きずられるものだと思っていたら、ルーファスが連れて来られたのは酒場だった。

コロシラム内にある酒場。ここにいるのは観客がその大半だが、戦闘前に酒を煽っている出場者も少なくない。

盛り上がりを見せる店内だが、店の奥——角の席だけ空気が違った。人が寄りつかない。大剣を背負った黒髪の若い男がひとり飲み物を飲んでいた。

「あの方だと思えます」

セツが言って、気負いすることなく男に近づいていく。

ルーファスが前に立ちふさがる。

「まずいって、声かけない方がいいよ」

「どうしてですか？」

「どうしてって、近づいただけで斬られそうだし」

「近づいただけで人を斬っていたら、今ごろ全世界で指名手配されていると思います。話をして、手を組んで欲しいと頼むだけですから」

「ダメだって、なんかあの人一匹狼っぽいし、手とか組んでくれないって」

二人があれこれ言っているうちに、ビビの姿が消えていた。

「どもども、アタシビビっていうのよろしくねっ♪」

もう声かけとるーっ！

すでにビビは二人を放置して男に声をかけていた。

男は一瞬だけビビに目をやったが、すぐに視線を戻して無視を決め込んだ。話したくもないようだ。

「ねえねえ、その剣一本でちよ〜でっかいドラゴン倒したってホント？ 魔法も使わずに、生身の人間が剣一本で？ アタシこう見えてもちよ〜カワイイ悪魔なんだけど、人間って魔族とかに比べたらちよ〜脆弱じゃん？ なのにドラゴンに勝っちゃうなんてすごくない？」

一方的にしゃべりまくったビビちゃん。

しかし、男はシカト。

そこへセツが遅れてきた。

「あなたが〈地鳴りの大狼〉でしょうか？ そうならば、ぜひ力をお貸しいただきたいのですが？」

男がセツに顔を向けた。

「たしかに……〈地鳴り大狼〉と人は呼ぶ。わかっているなら声をかけるな」

鋭い眼だ。男は鋭く荒んだ眼でセツを睨んだ。

睨むのならばセツも負けていない。

「用件だけでも聞いてくださいませんか？」

口調は丁寧だが、声に凄みがきいている。

男はセツから視線を外し、

「名前は？」

と飲み物を口に運んだ。

「セツ・ヤクシニと申します」

「用件だけ聞こう。俺の名前はハガネス」

セツは柔和な顔をして、ルーファスはほっとした。

ビビはちよっぴり膨れ顔。

「（アタシのなになが悪かったのかなあ？）」

態度。

受け付け終了まで時間がない。さっそくセツは本題から切り出すことにした。

「この大会の優勝トロフィーを必要としています。地位や名誉が欲しいと言っているではありません、トロフィーの素材であるホワイトトムーンが必要なんです」

「ホワイトトムーンならべつのところでは買えばいいだろ」

「街で探しましたが、ホワイトトムーンが不足しているらしく、わたくしの求めている良質な物となると見つかりません。長い時間をかければ手に入るかもしれませんが、あまり時間がない

もので、ぜひあのトロフィーが欲しいのです」

「それで俺に何の用だ？」

「あなたに優勝してもらってトロフィーを譲って欲しいのです。もちろんそれなりの報酬は払います」

「……大会には出ない」

「は？」

と最後につぶやいたのはルーファスだった。

参加名簿に名前がなかったのは、大会に出場しないからだ。

セツも少し驚いたようだ。

「大会の出場するためにここにいるのでは？」

「その……つもりだったが、俺のレベルには合わないようだ」
強烈な酒の臭いがした。

酔った男がこちらに近づいてくる。腰には剣を差している。

「ひっく……おい、〈地鳴りの大狼〉さんよお……うつぶ。アステア武闘大会といやあ、世界から腕自慢が集まる名高い大会だぜえ？ それをよお、レベルが合わないだと何様だ……ひっく、参加もしねえで優勝気取りかあ、おい？」

酔って絡んできた男。ハガネスは顔すら合わせない。その態度がさらに男を怒らせた。

「おい、剣を抜け……ここでおれと勝負だ、これでもおれはちよつとは知られた剣士だ。ボンジョボン様と言えばわかるだろ、おれがそのボンジョボンだー！」

ビビはルーファスと顔を合わせた。

「ルーちゃん知ってる？」

「さあ、聞いた事ないけど。セツは？」

「わたくしも存じ上げません。少なくともわたくしの故郷まで名前は届いていませんが」

三人とも知らなかった。

周りでこの騒ぎを見ている客たちも、顔を見合わせたり、ヒソヒソ話をしながら、疑問符を表情に浮かべている。

ボンジョボンの顔が酒で染まった以上に赤く燃え上がった。

「おれを知らないだと、さては田舎もんだな！ 覚えておけ、
〈赤っ鼻のボンジョボン〉とおれのことだ。おれは強い強いんだぞ、よし剣を抜け、かかってこい、〈地鳴りの大狼〉さんよお、おまえの背中のでっけえ剣は飾りか？」

挑発されてもハガネスはシカトを決め込んだ。

ついにボンジョボンが剣を抜いた。

酒場での決闘がついにはじまるのかっ!?

「かかって来いってつってんだろ坊や！」

叫んだボンジョボン。

抜かれた剣が木のテーブルに叩きつけられ、真つ二つに切断された。乗っていたグラスが宙に跳ね上がり、中身がビビの顔に掛かった。

「きゃっ(……あ、アップルティー)」

ハガネスが飲んでいたのは酒ではなく、アップルティーだったのだ！

というのはいといて、やむなく立ち上がったハガネスは、荒んだ鋭い眼でボンジョボンを似た見つけた。

「……………」

だが、なにも言わない。

「なんか言ったらどうだ、やり返してこねえのかおい！」

ボンジョボンは切っ先をハガネスに向けながら挑発してくる。

調子にノっているボンジョボンは、さらになにをしてくるか
わからない。

「マズイよこれ、どうにかしなきゃ」

ルーファスは不安顔でつぶやいた。

しかし、

「ケンカを売られたのはわたくしたちではありませんし」

と、あっさり言い放つセツ。

「(雇い主として彼の實力も見ておく必要があります)」

セツはそういうことを考えていた。

動向を見守る二人——を見て、ビビは前へ出た。

「よおし、ここはアタシがガンといっちゃうよお！」

なんだか張り切っちゃってるビビちゃん。

「待ちなさい」

セツが腕を伸ばしてビビの行く手を遮った。

ボンジョボンがハガネスに斬りかかった！

ついにハガネスが背中の大剣を抜くかッ!?

すってんころりーん！

「ふげぼっ！」

奇声をあげたボンジョボンが床に落ちていたグラス(テーブルを叩き割ったときに落ちた物)を踏んでコケた(自業自得)。

うつ伏せで大の字になったボンジョボンは動かない。
遠くから声が聞こえてくる。

「おまえたちなにをやってる！ 会場でのケンカは御法度だぞ、
大会出場者なら即出場停止に処分にしてやる！」

どうやら大会関係者が警備の者だろう。

いち早く動いたのはセツ。ルーファスの腕を引いた。

「逃げましょう！（ここで捕まったら大会に）」

スタコラサッサと四人は逃げた。

《二》

「なんで………俺まで」

どうしてこうなった感をたっぷり込めてハガネスはつぶやいた。

酒場から逃げたあと、どさくさに紛れて出場受け付けをさせられてしまった。まずセツが受け付けを済ませ、次にノリノリのビビ、ルーファスは強引に、ハガネスは三人が登録を済ませたんだから次はおまえの番だぞ的に、気づけば出場決定。

そして、当日参加組の受付が終了した。

すぐに予選A組のバトルロイヤルがはじまる。当日参加組は予選D組と最終組のE組だ。その後、短い休憩を挟んで本戦がはじまる。当日参加組は、ほぼ連戦となるため、過酷な戦いが強いられることになる。

大会の流れや傾向を見つつ、今後の対策を話し合うため、四人は観客席で話し合うことにした。

席に座らされたハガネス。

「どうして俺まで……」

とか言いつつも、なんだかんだで一緒にいる。もしかしたら、ルーファスと同じで、押しに弱いタイプなのかもしれない。

予選がはじまると客席のボルテージが一気に上がった。

歓声がまるで津波のように客席を呑み込む。

会場にはいくつかの巨大スクリーンが設置されており、注目の戦いが映し出される。巨大スクリーンには、戦いのようすがさらに分割されて表示されており、人数が減ってくると分割数が少なくなつて、最終的には大画面に一つの戦いが映し出されるようになる。

バトルロイヤルの勝敗は獲得ポイントによって決まる。参加者は体の見える場所に配布されたシールを張り、それをほかの参加者から奪うことによつて枚数がそのままポイント数になる。シールは張った本人が剥がす、もしくは気絶すると剥がせるようになっていゝる。シールを失つた者はその場で退場、一度剥がれたシールは二度と張り直すことはできない。

予選がはじまった途端、何人かの出場者が集中的に狙われはじめた。優勝候補たちだ。バトルロイヤルでは、示し合わせたように強い者が寄つて集つて狙われる。

それを知つたセツはハガネスに顔を向けた。

「予選ではあなたが狙われる集中して狙われる可能性が高いで

すね」

「……………」

ハガネスは固い表情をしてなにも返さない。

予選を見ているだけで青い顔をしているルーファス。

「無名選手の僕はあんまり狙われなくて済むかな（はじまってすぐにギブアップしよう。そのためにはまずセツから必死に逃げて、見えないところでシールを投げ捨てなきゃ）」

ルーファスの敵は味方の中にいるらしい。

身を乗り出してビビは観戦に熱を上げている。

「ねえねえ、A組に前大会の優勝者がいるんだって！ しかもその人、三大会連続優勝してるらしいよ！ オッズ低かったけど二〇〇ラウル賭けちゃった！！」

ここでセツは冷静にツツコミ。

「あなた優勝する気ないでしょう？」

「ん、なんで？ あたしヤル気満々だよー！」

「だったらなんで他人に賭けるんですか……はあ」

セツは溜め息を落とした。

ハツとしたビビ。

「そっか、あとで自分にも賭けてこよう！」

ビビちゃん優勝する気も満々。

ちなみに予選の賭は、単勝や複勝、連勝式など、幅広く扱っている。中でも的中困難なのが、組予選通過者計一〇名をポイント獲得数の多い順で当てる連勝単式である。

ちなみに大会非公認の賭け屋ブックメーカーでは、予選通過一〇名の連勝

単式からさらに、獲得ポイント数まで当てるという独自の賭けも行っている。

セツは優勝者当てのオッズを思い出し出していた。

「一番人気はオッズが低かったですが、それ以降の人气がバラけているようだったのはそのせいですか」

優勝者は真つ先にバトルロイヤルで狙われる。本戦に出場できても、予選の総攻撃でだいぶ体力も消耗させられ、怪我也負ってしまいかも知れない。そのハンデがある条件で三大会連続優勝というのは、不動の一番人気というのもうなずける。それ以下の者は、予選の集中攻撃によって蹴落とされ、二位以降の順位の毎回大きく変動す要因になっている。そのため賭の予想も困難になる。

賭けの予想は難しくなるが、参加者には優勝のチャンスが与えられる。うまくつぶし合ってくれば、予選突破も夢ではない……かもしれない。

でもルーファスは負ける気満々！

「（セツからも逃げなきゃいけないけど、ビビにもわざと負けるところ見せたくないなあ。二人から逃げるとなると至難の業だし、あとでバレてもマズイからうまくやらないと）」

ひとりで作戦会議中だった。

全員参加の会議も同時進行だ。セツが話している。

「予選は全員通過を目指します。本戦ではわたくしたち三人は最低でも一勝を勝ち取り、優勝候補と当たってしまった場合は、全力で相手の体力を削ること。そして、ハガネスさんの優勝確

率を高めます。あくまでわたくし三人は、ハガネスさんの剣となり、盾となり、そして踏み台です。それが優勝への最善の方法だと思えます」

「えー、アタシ優勝する気満々なだけどー？」

うん、ビビちゃんはそのままがんばればいいと思う！

さらにセツが話を続ける。

「予選ではバラけるよりも、固まった方が有利だと思います」

「……げ」

ルーファスが漏らした。いきなりセツから逃げる作戦が困難になりそうだ。

まだセツの話は続いている。

「問題はハガネスさんともいつしよにいるべきかということ、ハガネスさんが集中して狙われた場合、わたくしたちもそれに巻き込まれる可能性があります。しかし、ハガネスさんがそれでも余裕のようであれば、わたくしたちのこともまとめて守ってもらい、逆に安全ということになります。どうですかハガネスさん、わたくしたちも守って戦えますか？」

「………」

ハガネスはなにも答えなかった。

そこへビビが身を乗り出してきた。

「ちょー強いんだからだいじょぶだよ！ ドラゴンに比べたら人間の群れなんてアリの大群みたいなものだし、ひとりですべてくれるよ生ける伝説ハガネスは！」

他人事なのに自信満々。

ハガネスは否定も肯定もしなかった。無言なのは自信の表れか？

ここでルーファスがボソツと。

「キングカリファンアントっていう全長三メートル（約三・六メートル）を越える世界最大のアリがいるけどね」

そんなアリの大群はヤバイ。ルーファスにとって、戦わなきゃいけない参加者たちは、みんなヤバイ相手だ。実力者から見れば小物、ルーファスから見ればみんな大物。

会場のモニターの分割数が減ってきている。ルーファスたちが話している間も、一人、また一人と敗者が退場していく。

人数が減ってきてても未だ集中攻撃を受けている者がいる。画面がその戦いを大きく映し出した。優勝候補一番人気の剣士だ。

その姿を見たビビが啞然とした。

「銀行強盗……百歩譲ってプロレスラー」

マスクが。

ルーファスもはじめて知ったようだ。

「あれが前大会優勝者？ 覆面戦士とは聞いてたけど（あのマスクはない。しかも、僕より貧弱そうな体付きなんだけど）」
デスマスクを被った小柄な剣士。体系もごつい感じではなくスマートだ。しかし、強い。

まずスピードが尋常ではない。敵の攻撃をかわしながら、一瞬にして敵の懐や背後に回り込む。そして自分よりも二倍以上ありそうな巨人を一撃で仕留めるパワー。

あれがルーファスたちが倒すべきライバルだ。優勝する気な

らば勝たねばならない。

「……ムリ」

ルーファスがつぶいた。

予選ですら勝つ気がなかったルーファスが、覆面剣士の戦いを見て完全にあきらめた。

隣のビビは真面目な表情になっていた。覆面剣士の戦いを見て、浮ついた気持ちが引き締まったのだろうか。

「覆面で顔を隠してるのって……やっぱりブサイクだからなのかな？」

ということを悩んでいるだけだった。

ハガネスは覆面剣士の戦いから目を離さない。出場すれば優勝間違いないとウワサされる伝説の男も、覆面剣士の実力を無視できないと言ったところか。

——そして、A組予選が戦いの幕を閉じた。長い戦いを勝ち抜いた中には、もちろん優勝候補一番人気の覆面剣士がいた。

自分たちが出場する最終予選E組の試合が近づくにつれて、ルーファスの体調が悪化してきた。

じっといていられずルーファスは一人で出歩くことにした。

「うう……（おなか痛い）」

もうすでにトイレには何回か駆け込んだ。

「うう……（胃も痛い）」

常備している胃薬も飲んだ。

「うう……（逃げたい）」

今はひとりだ。周りにセツもビビもない。今なら逃げられる！

ルーファス逃亡！

別に正面ゲートから逃げても問題ないが、小心&罪悪感でココソツ逃走。

窓から外に出て、会場裏にある茂みに逃げ込む。

茂みはそのまま森に繋がり、その敷地は自然公園になっている。

人気のない森。

「ホゲエエエエエ〜」

不気味な呻き声が響いてきた。

ビクッとルーファスは体を凍らせた。

自然公園に管理されてはいるが、自然と名がつくだけあって、自然な状態が保たれている。カワイイ小動物から、大型の獣まで、バリエーションも豊富だ。

なにかいる！

ルーファスの近くになにかいる！

謎の呻き声を発する生物がいるのだ！

ルーファスは逃げることもできる、その場から動けなくなってしまった。

ガサガサッ、ガサガサッ！

茂みが揺れた。

なにか出てきた！

幽鬼のような影が茂みから出てきた。

……目が合った。獣のような鋭い眼。どこか荒んだ瞳だ。ルーファスは唖然としながら口を開く。

「あ、こんにちは」

「……………」

ハガネスだった。

向かい合ったままハガネスは動かない。

「……………」

「……………」

二人とも無言。

ハガネスが口に手を当てた。

「ホゲエエエエエエ〜」

嗚呼、大地に還元されていく。

あの謎の呻き声は、ハガネスは内容物をリターンしている音だったらしい。

「…………あの、大丈夫ですか？」

「問題…………うええ、うげっ、ううつぶ」

ぜんぜんダメそうだ。

しかし、ハガネスは平静を装うとする。

「問題ない…………少し…………酒を飲み過ぎただけだ」

ここにビビがいたら疑問に思うだろう。

ハガネスはあの酒場からずっとルーファスたちに同行させられている。ここで独りになる前に…………とも考えられるが、酒の臭いがまったくしない。

あえて臭うとしたら【自主規制】のかほり。

同族、同じ種類の者同士は互いを嗅ぎ分けることができる。
ルーファスは察した。

「本番前になると体調崩すタイプですか？」

「……………」

無言になるハガネス。

もともと無口っぽい感じだが、この無言はいつもと違う。

「……………」

「……………」

お互い無言。

無口なドラゴンスレイヤー。そのキャラが崩壊を迎える。

「な、ななななな、なにを言ってるんだ、まるで俺がプレッシャーに弱いみたいな……そんなことはない、おまえも俺の伝説を知っているだろう！」

「ドラゴンをその身一つと剣だけで倒したって云われてますよね」

「そうだ、俺がひとたび背中の大剣を抜けば、大地が震え上がり地震が起こると云われている。ゆえに俺は〈地鳴りの大狼〉と謳われているんだ」

「本物の〈地鳴りの大狼〉ですよね？」

「……そうだ、そう呼ばれている」

「(あやしい)」

湿度の高い生暖かい視線でルーファスはハガネスを見つめた。
まさか目の前にいる〈地鳴りの大狼〉は偽物か？

「本当に本当の本物の〈地鳴りの大狼〉ですよね？ ドラゴン

倒したんですよね？」

「そう呼ばれて、そう語られている」

「なんだか微妙な言い回し。」

さらに追求する。

「ドラゴンに倒したんですよね？ 語られてるとかそういうのじゃなくて、実際に戦って止めを刺したんですよね？」

「ドラゴンは倒し……」

そこで言葉が詰まった。代わりにルーファスが言葉を紡ぐ。

「てないんですか？」

「……………」

「質問を変えます。まさか弱いんですか？」

「ば、ばか言え！ 俺は断じて弱くはない、それは本当だ、信じてくれ、俺は弱くはないんだ本当に！」

焦りすぎ。

湿度がさらに高くなったじとっとした視線で、ルーファスはハガネスを見つめた。

「背中の剣も飾りですか？」

「この剣は伝説の宝剣だ。抜けば天と地を割ると云われている」

「云われている？」

「……この剣が真正銘の本物だというのは事実だ」

ハガネスは微妙な言い回しこそするものの、ウツは言っていないように思える。

ではいったい、ハガネスはなにを隠しているのか？

今までの周りの話とハガネス本人の話を要約するとこうだ。

〈地鳴りの大狼〉と呼ばれている。

超巨大なドラゴンを一人で肉体と大剣のみで倒したと語れている。

断じて弱くはない。

背中の大剣は伝説の宝剣であり、抜けば天と地を割ると云われている。

ちなみに名前はハガネス。

全部、言葉に過ぎない。言葉だけでは事実と認められない。剣を抜いた姿も、戦っている姿も見えてない。ルーファスが見たのは【自主規制】していた姿。

「本当のこと言ってくれませんか？ もうすぐ予選はじまりますし、もしもウソをつけているなら、全部バレますよ、観客全員に前で（予選前に逃げれば別だけど。あ、ここにいたってことは僕と同じで逃げる気だったんじゃない？）」

「あなたに俺の気持ちかわかるか、俺の苦しみかわかるもんか……」

ハガネスは荒んだ眼をしてルーファスから顔を背けた。

「まさか逃げる気だったんじゃないですよね？」

「逃げる気ならこんなところで吐いてない」

「（逃げる気ならプレッシャーもないから吐かないってことか。そう言えば）大会に出るの渋ってましたよね？ 出る気がなかったら、なんでここに来たんですか？」

「はじめは出場するつもりだったんだ……でも、いつもこうな

んだ。周りに過度な期待をされて、絶対優勝なんて言われてる。そんな俺がもしも……」

ハガネスは頭を抱えて地面にあぐらを掻いてしまった。

「やっぱり弱いんじゃない？」

「それは違う！ 本当だ、腕には自信がある。厳しい修行もしてきた……地獄のような日々だった」

そして、過去を思い出すように遠い目をして、ハガネスが語りはじめた。

「俺の両親は親父が伝説の戦士、母は伝説の武闘家だった。生まれたときから俺は過度の期待されていた。おれは両親や周りの期待に応えようと懸命に励んだ。親父と母の修業は本当に辛かった。それでも俺は堪え、強くなった。自分でいうのもなんだが、腕には本当に自信があるんだ。それでも周りの期待ってやつは、遥か先にあつたんだ。あんたにわかるか、俺の気持ちか？」

「ちよつと違うかもしれないけど、私の父はそりやもう優秀な魔導士で、今もこの国の防衛大臣をしてたりするんだけど、生まれてきた私は落ち零れで……がんばってるつもりだったんだけど、期待に応えられないって気づいたときからはもう……。うちの一族ってみんな赤系統の髪の色をしてるんだけど、私だけこんなんだし、どうせもう期待もなにもされてないだろうし……はあ」

どんよりとルーファスは重い空気を背負った。

ハガネスがつぶやく。

「……そうか」

二人とも重い空気で押しつぶされそうな顔をしている。

そして、しばらくしてハガネスが再び口を開く。

「俺は逃げたんだ。期待を背負って生きていくのが嫌になって、親元からとにかく逃げ出した。独りで旅に出て各地を廻った。そんな旅の途中だった、俺があのだらゴンと出会ったのは。クラスで言えばマスタードラゴン、実力から言えば〈精霊竜〉クラスだった。だが、俺が会ったときには、もうろくも酷く、ゆえに破壊者となってしまったらしい。彼は言ったんだ『自分を殺してくれと』、自分がぼけていると自分でわかるうちに、これ以上ぼけてこの地を破壊する前に（お前のように力のある者を待つていたとも言われた）」

「じゃあドラゴンを倒したって言うのは本当だったんだ」

「止めを刺したのは事実でも、戦って勝ったわけじゃない（それでも我を忘れた彼に抵抗されて重傷を負ったが）。ドラゴンを仕留めたって部分だけに尾ヒレがついて、話が膨らんで、俺が伝説の両親を持つ素性が知られ、背中の宝剣のことも知られると、さらに話は膨れ上がっていった。そうなってくると、期待されるってレベルじゃない。神のように崇拜する者まで出てきて、俺は人前で剣を抜くことすらできなくなつた。これまでいくつもの大会に足を運んだが、周りの期待を裏切ってしまうと思うと出場できなかつた。優勝するだけじゃ期待を裏切る、大会で伝説のひとつもつくらなきゃ、期待には応えられないんだ」

肩を落とすハガネス。

いつになくルーファスは真剣な眼差しをしていた。

「期待を裏切ったらいけないんですか？」

「……なに？」

「ひとの期待を裏切るのは僕だってイヤですよ。でもそれでもできないとなったら意味ないですよ。僕もいつか父と和解して認めてもらいたいとは思ってますけど、自分なりにやってみてその結果を受け入れて、少しでも前に進んでいくことにしたんです（……その結果、ちょっと自堕落な感じになってるところもあるけど）」

茂みからびよこつと桃色のツインテールが飛び出してきた。

「あたし思うんだけど、別に負けちゃってもいいんじゃない？」

ハガネスに勝ったひとが次に伝説になるだけの話で、世の中にも変わんないと思うけど。てゆか、覆面被ったらいいよ、顔隠して出場したらいいじゃん？」

いきなり出てきたビビにルーファスとハガネスは啞然。

「いつからそこにいたの？」

と、ルーファスが口をあめぐりさせながら尋ねた。

「ハガネスがゲロったあたりから」

ゲロって、ゲロって今まで伏せられてたのに、アッサリ言いやがった！

とりあえず、かなりはじめのほうからビビはいたらしい。

ハガネスは重い腰を上げた。

「もう本名で登録してしまったから、今さら顔を隠したところ

「でもならない」

「今まで身なりを変えて偽名で大会に出場とか考えなかったの？」

ビビの質問に度肝を抜かれたハガネス。

「か、考えもしなかった……！」

コソツとビビがルーファスに耳打ちをする。

「このひとバカなの？」

「そんな質問されても困るよ」

二人の姿をハガネスはほそい目で見ている。

「聞こえてるぞ」

「えっ!？」

同時に驚くビビとルーファス。

遠くからアナウンスが聞こえてくる。

《E組予選開始まであと五分です。参加者の方は早急に第一ゲート前にお集まりください。時間内に集合場所に現れなかった場合失格になります》

ビビがルーファスの腕を引く。

「早く早く！」

「あ、うん」

ルーファスは返事をしながらハガネスに顔を向けた。

うなずくハガネス。

「もう覚悟は決めた、あとは悔いが残らぬよう戦うのみだ」

三人は集合場所に急いだ。

《三》

先に集合場所にいたセツが、突然頭を下げてきた。

「ルーファス様申しわけありません」

「えっ、なに!? (謝られる覚えがないんだけど……むしろ僕のほうが)」

「試合の直前になって逃げたのではないかと、疑ってしまいました。嗚呼、ルーファス様の愛を疑ってしまうなんて、夫の帰りを待つ妻として失格です」

ルーファスはなにも言えなかった。だって逃げようとしてたから。

とにかく四人揃って予選に出場することになった。

巨大なゲートが開かれ、円形闘技場への道が開かれる。

ルーファスは胸に張った赤いシールを確認した。これを奪われれば負けだ。

このシールには番号も書かれており、それと対応したサークルが闘技場内の地面に描かれている。そのサークルがスタート位置となる。

サークルの上に立ったルーファス。

「……マズイ」

つぶやいた。

サークルはランダムに割り振られている。

ルーファスの周りは敵ばっか!

「(はじめの作戦ではセツから逃げようと思ってたけど、思っ
てはいたけど、はじめっから独りなんて怖すぎる!!)」

周りの参加者たちを見回して、ルーファスはある重大なこと
に気づいた。

「しまった……(武器忘れた)」

ルーファス装備なし!

鍛冶の神ゾギアを祝した大会であり、基本的には武器を持つ
て戦うが、中には素手の者もいる。だが、あくまで素手の者は
武闘家であり、素手のプロだ。もやしっこルーファスとは体格
からして違う。

「お腹痛くなってきた」

ルーファスピンチ!

周りの参加者達の目が『お前なんでここにいるんだよ?』的
な感じだ。観客もそう思っているに違いない。そして、一番思
っているのは、間違いなくルーファスだろう。

「(ギブアップする前に袋だたきに遭いそう。まずはだれかと
合流したほうが痛い目に遭わなくて済むかも)」

急いでルーファスは遠くを眺めた。

もっとも近くににいるのはハガネスだ。一五メイト(二〇
メートル)くらい離れていそうだ。背中の大剣ではなく、長剣
を構えている。

さらに遠くにビビとセツ、二人は運良く隣同士のサークルだ。
大鎌と鉄扇で戦う気だ。

試合開始一分前。

ルーファスの足下が汗で海になりそうだ。

「(とにかく逃げ回るしかない)」

敵の武器を奪うなんて大冒険はルーファスにできるはずがない。

試合開始一〇秒前。

五、四、三、二、一——会場に鳴り響くラツパの音色。出陣に相応しい軽快な音色だ。

身構えるルーファス。

逃げる予定が足がすぐんで動かない。

頭を抱えてしゃがみ込んだルーファス。

どこかで男の悲鳴が聞こえた。

剣と剣が交わる甲高い音。

渦巻く熱気。

ルーファスは動かない。

ドサツという音がしてルーファスは足下を見た。男が伸びている。もうすでにシールはなかった。

「……あれ？」

だれも襲ってこない。

見事なまでにルーファスはスルーされていた。

逃げるなら今だ！

ルーファスが動き出そうとした瞬間、目の前に影が立ちほだかった。

「先輩も出てたんですか(弱そうなのに)」

魔導学院の後輩ジャドだ。ジャドは暗殺一家に生まれ、体中

に武器を隠し持っている暗器の使い手でもある。

「えーと、ジャドだっけ？」

「そうですね、ペット捜しから暗殺まで、幅広ぐえっ！」

呻いジャドが気絶して倒れた。

目を丸くしたルーファス。二撃目が来る！

弓矢か？

違う、飛道具だが弓矢ではない。

ロッドだ。魔導を帯びた宝玉を付けられた杖を振ることによって、魔弾を飛ばすことができるらしい。使っている相手は魔導衣を着た若い女だ。

魔法を唱えたりすることは禁止されているが、武器で魔力を変換して攻撃することは許可されている。魔導士タイプの出場者もいるのだ。

瞬時ルーファスはしゃがんだ。

頭の上を通り過ぎる魔弾は白熱の光を帯びていた。おそらく光系の魔力が攻撃に変換されている。

三撃目はすぐに来た。

「ぎゃー！」

かろうじてかわすルーファス。

四、五、六と連続して来た。

「ぎゃっ、ふんっ、どうあー！」

またもかろうじてかわすルーファス。逃げたり避けたりは大得意だ。

武器も持たないもやしっこに攻撃をかわされ、女魔導士は怒

りを露わにした。

「弱そうだから狙ったのに！ これでも喰らえー！」

一〇発以上はありそうな魔弾が一気に飛んできた。さすがにこれでは逃げ場はない。

ルーファスの目に飛び込んできた輝く盾。

「だれの落とし物か知らないけど借ります！」

しゃがめば体を覆い隠せる巨大な盾だ。

魔弾がルーファスの真横の地面を抉った。土塊が飛び散る。まるで鉄球の雨だ。

「きゃあああっ！」

甲高い叫び声。

魔弾の雨が止んだ。

恐る恐る盾から顔を覗かせたルーファス。女魔導士が倒れている。周りに女魔導士を倒した人物はいない。

ルーファスは気づいた。

「そうか、この盾はミラーシールドの類だったのか！」

盾は物理攻撃を防ぐだけではない。中には魔力を反射する物がある。雨のような魔弾は、盾に弾かれ女魔導士に返っていったのだ。

運良く自滅してくれた女魔導士。

何気にルーファスはシールをゲットした！

それも四枚だ。女魔導士が持っていた二枚、彼女本人のシール一枚、そして気絶しているジャドの一枚だ。

シールは剥がすと赤から青へと変わる。

ちなみにシール枚数イコールポイントのため、自分自身のシールも加算される。つまりルーファスは五ポイント持っていることになる。

突然うつ伏せになって倒れたルーファス。攻撃を受けたのではない、狙われる前に気絶したフリをしたのだ。

薄目で当たりを確認すると、スネ毛が見えた。男が辺りを確認しながら歩いている。気絶していないことがバレたら確実にヤラれる。

男が剣を振り上げた。

「(やられる!)」

と、心の中で叫んだルーファス。

しかし、男が剣を振り下ろしたのは拳に鋭い爪を装備した別の男だ。

爪男は剣をその爪で受けている。

ルーファスのすぐ目の前ではじまってしまった戦い。

二人が戦ってる隙に逃げたいところだが、そのタイミングも難しい。飛道具を使ってくる者もいることから、注意するのは目の前の二人だけとは限らない。

薄目でルーファスは巨大スクリーンを凝視した。時間がカウントされている。本戦が控えているため、予選は時間制限がある――一時間だ。

「(ムリに逃げて痛い目に遭うより、ここでじゅつとしてるほうが安全かも)」

ルーファスは気絶したフリをし続けることに決めた。

が！

「ふぎゃ」

思わず呻いたルーファス。背中を思いつきり踏まれたのだ。

「てめえ！」

踏んだ爪男が叫んでルーファスをガン見しながら転倒する。

そこへ振り下ろされる剣。

顔面に剣をモロに喰らった爪男が倒れた。真剣勝負だったら死亡しているところだが、防御魔法で守られているため死んではない。ただ衝撃はあるので、鼻と口から血が出ている。

スネ毛男がニヤリとルーファスを見下ろしながら笑っている。

苦笑いを浮かべるルーファス。

「あはは、バレちゃいました？」

「キタねえヤロウだ、気絶したフリしてやがったな！」

「ご、ごめんなさい、えっと、あの、そうだシールを僕のシールをお渡ししますから暴力を振るわないでえ！」

「てめえみてえなヤロウはただじゃおかねえ！」

剣が振り下ろされる。

「痛いイヤだつてば！」

咄嗟にルーファスは近くにあった棒のような物を拾って振った。

放たれた圧縮された空気の塊。

スネ毛男がツバを飛ばしながら後方にぶっ飛んだ。

………。

しばらくルーファス休止。

そして、気づいた。

「ご、ごめんなさい痛かったですかすみません！」

倒れているスネ毛男に駆け寄るルーファス。その手にはあの女魔導士が使っていたロッドが握られていた。

「あれ……もしかして勝ちちゃった？」

まさかのルーファス勝利！

スネ毛男のシールを奪い、さらにスネ毛男が倒した爪男のシールももらう。これで七ポイントだ。

「やったー！」

子供のように飛び跳ねて大喜びするルーファス。

「生きてきて良かった、僕にもこんな輝ける瞬間があるなんて、母さん生んでくれて感謝します！」

喜ぶあまりルーファスは周りが見ていなかった。少しでも周りが見えていれば、二メティート（二・四メートル）もある大男が斧を持って突進してきたのに気づけたはずだ。

「ルーファス様危ない！」

セツの叫びでルーファスはやっと気づいた。

巨大な斧が横降りにされ、ルーファスの胴体を真っ二つに割ろうとしている。実際は割れないが、喰らったらゲロくらいは吐きそうだ。

しかし、なかなか斧は近づいてこない。まるでスローモーション。いわゆる走馬燈がルーファスの頭を駆け巡っていた。

幼稚園の運動会で一位になった徒競走。グラウンドに乱入してきた野犬に追っかけられての一位だった。それ以降、ルーファ

スは徒競走で一位になったことはない。てゆか、一度っきりの一位以外はみんなビリだった。

——以下略。

なぜなら運動会などの、運動系の舞台で輝けたメモリーがほかになかったからだ。

ルーファスはよくがんばった。幼稚園の運動会以来の快挙だ。もう思い残すことはないだろう。

さよならルーファス。

空の彼方へ……彼方へ？

斧の衝撃があまりに強すぎて空に打ち上げられたのか？

違う。セツの鉄扇が竜巻を起こしたのだ。

ルーファスよりも低くした舞い上がらなかった大男が地面に叩きつけられた。自分の体重が凶器になったようだ。

次はルーファスの番だ。

「ちょ、ちょちょちよつとこれマズイよ、えつと、そうだ！」

魔法であれば回避も可能だが、魔法は禁止。だがルーファスの手にはアイテムが握られていた。

ロッドから空気を地面に向けた放った！

——止まった。

ルーファスの鼻先に地面がある。

その一秒後、空中で制止していたルーファスが地面に落ちた。

「うげっ！」

鼻強打。

「ルーファス様！」

すぐにセツが駆け寄ってきてルーファスを抱きかかえた。鼻血をツーッと流しているルーファス。どうやら気は失っていないらしい。

「大丈夫、ちょっと鼻打っただけ……痛いけど」

「嗚呼、ルーファス様よくぞご無事で！」

セツがルーファスに抱きつく横で、桃色のツインテールをびよんぴよんさせている小悪魔。

「あのおう、アタシもいるんですけどー？ まだシール取られてないんですけどー？」

冷たい眼をしてセツが振り向いた。

「あ、ビビもまだ生き残ってたんですか？」

「生き残ったますよーだ！」

「で、シール何枚集めましたか？」

「自分のも合わせて三枚。ちよーがんばってるでしょでしよー！」

「わたくしは今の男を合わせるとー」

セツは伸びている大男からシールを奪った。

「五枚です」

「……………」

口を結んだビビは頬を膨らませた。

セツはルーファスに顔を戻した。

「ルーファス様は？」

「私は七枚……運が良かったんだよ本当に」

「……………」

セツも口を結んでしまった。『ルーファス様、ルーファス様』と慕っていても、相手がデキると思っっているかどうかは別。つまりルーファスは期待されてなかったのだ。

「ルーちゃんすごい！」

自分のことのように無邪気にはしゃぐビビ。それを見てセツは慌てた。

「さすがルーファス様です！！」

取って付けたようなまさにお世辞だ。

立っている参加者の数も減ってきている。時間の刻々と過ぎている。

三人固まっていることで、周りも様子見ですぐに仕掛けてこないようだ。

セツは自分の持っていたシールを一枚ルーファスに渡した。
熱い、視線が熱い。

「八枚あれば予選通過は確実です」
横からビビが出てきた。

「なんで？」

「そんなこともわからないんですか？」
冷たい、視線が冷たい。

「なんで？」

と、ルーファスも尋ねた。

「それはですね、ルーファス様」

視線がまた熱くなった。

セツが続ける。

「E組の参加者は七八名で、通過者は一〇名となっています。つまり参加人数の一〇分の一のポイントを持っていけば予選通過できることになります。八枚のシールを手に入れたら防御に徹するのが生き残るコツでしょう」

慌ててルーファスはシールを返した。四枚にして。

「だったらセツが八枚持つててよ、僕が予選通過したってなんの役にも立たないから！」

「夫を立てるのが妻の務めですから」

「まだ夫じゃないから！」

「まだそうではなくても、未来の夫ですから」

「まだって深い意味で言ったんじゃないよ、夫とかならないから」

「ならダーリンがいいですか？」

「いや、そういう問題じゃないから」

二人の間にビビが割って入る。

「もしもーし、敵が来てますけどー」

ビビの言うとおり、甲冑のナイトがすぐそこまで来ていた。が、かなりの重鎧らしく、機動力はあまりよくないらしい。相手は不意打ちのつもりだったらっぽいが、見事に三人に気づかれている。

ビビが大鎌で薙いだ。

ガッン！

大鎌はナイトに当たったがビクともしない。逆に柄を握るビビの手が痺れ、刃こぼれしそうだった。

「ウソっ、ぜんぜん聞いてない!？」

硬いだけではない、比重もあってビクとも動かない。

セツが大男を飛ばした竜巻を起こした。

浮いた!

ナイトが浮いた!

——拳が入るくらい。

ドスンと地響きを立てて甲冑剣士が地面に着地。

ビビとセツでは歯が立たない。

ナイトが槍で突きを打つ!

でも早くないので避けられる。セツは軽くかわした。

鉄壁の防御を誇るナイト。だが機動力が犠牲にしているらし

く、攻撃が遅い。

ビビがのんびり提案する。

「逃げちゃおうよ、めんどくさいし」

すぐにナイトの仮面からくぐもった声がする。

「おまえらも逃げる気か! 戦え、俺と戦え、俺は絶対に負け

ないぞ!

ほかのやつにも逃げられたのか……かわいそうに。

ルーファスが自信なさげに手をあげた。

「あのさお、ちよつと試したいことがあるんだけどいいかな?」

「なにをするのルーちゃん?」

「まあ見ててよ」

ルーファスはロッドを構えて魔弾を撃った。黄色く輝く魔弾

だ。バチバチと音を鳴らしている。

魔弾が甲冑にヒットした。

「ギャアガガガガガガ！」

機械的な悲鳴を上げたナイト。

どうやらルーファスの作戦は成功したようだ。

「よかった。魔法防御で電撃も衝撃変換されるかと思っただけ、なんか平気だったみたいだね（鎧を通した間接攻撃だからかな？ それとも魔法防御は物理のみ有効？）」

ナイトは立ったまま動かない。甲冑が重いので倒れもしないが、たぶん気絶しているだろう。

ルーファス勝利！

しかも今度は運ではなく、作戦よる実力での勝利だ！

まあ、ロッドを手に入れたのは運だったけど。

さっそくビビはナイトからシールを奪おうとした。

「あうっ！」

甲冑に触れたビビがすぐに手を離れた。

すぐにルーファスが駆け寄る。

「ダメだよ、しばらく放電させないと」

そう言いながらルーファスは靴を脱いで手にはめた。不導体で絶縁しながら甲冑に触れるためだ。

顔を赤らめたセツが心をときめかせる。

「惚れ直しそう（嗚呼、やっぱりルーファス様って、やる時はやってくれる！）」

ルーファスの横でビビがはしゃいでいた。

「ルーちゃんすごい、頭イイんだね！」

「常識の活用だからたいしたことないよ」

謙遜するルーファスを見て、セツの心はさらにヒートアップ！

「ああん、好き……大好き（はあと）」

だが、次の瞬間にはセツは溜め息をもらしていた。

悪戦苦闘するルーファスに姿。靴では甲冑に張られたシールがうまく剥がせない。そりゃそーだ。

それでもやっとの思いでシールを剥がし、さらに甲冑を脱がせてほかのシールもないか探した。

トランクス一枚になった男を見てビビがクスツと笑った。

「ガリガリじゃ〜ん！」

ナイトの自身は骨皮だけしかないような痩せた男だった。こんな男じゃ重鎧で動けるわけがない。

そして隈無く探した結果、獲得したシールは二枚だった。

ビビちゃんはちよつとご立腹。

「ええ〜っ、二枚しかないのお〜」

三人では割れない数字だ。一枚は功労者のルーファスがもらうとして、残り一枚が問題だ。

力強くセツが前に出た。

「これはわたくしがもらうべきでしょう。なぜなら、ビビよりもすでに多く獲得しているということは、それだけ予選通過の可能性があるということです。もつと言わせてもらえば、ビビが持っている分もわたくしに渡すべきです」

「はあ〜っ、なに言っちゃってんの!? ズルイズルイーっ、これからアタシが巻き返すかもしれないじゃん!」

こんなところで仲間同士のケンカをしている場合じゃない。すぐにルーファスが割って入った。

「ちよつと待った、今全員が持つてる分を均等に分けようよ。まだ時間はあるんだし、全員分が集まらなかつたら、そのときに調整すればいいし、ひとりが負けて奪われたときの損失も考えてさ、ね?」

「ルーファス様がそうおっしゃるなら」
あつさりセツが承諾。

全部で一七枚。また三で割れないが、余りはルーファスが持つと言ふことで話がついた。

ルーファス↓七枚↓七枚

セツ↓五枚↓五枚

ビビ↓三枚↓五枚

結局、今手に入れた二枚がビビの元へ。セツは配分してから、納得してないような顔をしているが、ルーファス様の決めたことだ、口に文句は出せない。

ここまで健闘を見せる三人。とくにルーファスは大穴だろう。そして、四人目がいる。

ルーファスが辺りを見回す。

「ハガネスは？」

いた！

遠くで五人の敵に囲まれている。

即席チームによる連携攻撃。腕試し、名声、予選突破、さまざまな迷惑を胸に秘めながら五人が襲い掛かってくる。

魔弾を撃つバズーカ砲での遠距離攻撃。

「あんな武器もアリなの!？」

と、ルーファスが遠目からツッコミを入れている間に、ハガネスは砲撃をかわしていた。魔弾が地面に開けた穴は人が潜れるほどだ。一発でもくらったらアウトだろう。

ハガネスが逃げた先には鞭使いの鞭が放たれていた。

「くっ！」

声を漏らしたハガネス。足が鞭に取られた。転倒する！

片手の剣は絶対に手放せない。ハガネスは地面についた片手で全体重を支えた。そこで支えて留まっただけではない、地面を押し上げてバネのようにすぐさま立ち上がった。すぐに敵が仕掛けてくる。

背後からは短剣二刀流、左右からは棒術使いと剣士が攻めてきた。

ハガネスの長剣が円を斬る。

剣士が飛び退いた。

短剣二刀流が高くジャンプした。

最後の棒術使いがハガネスの剣を受け止めた。

止めと言わんばかり短剣二刀流がハガネスの頭上に降りてくる。

剣士も体勢を立て直し、鞭使いは隙を狙い、バズーカは遠くからいつでも標的を狙っている。

発射！

魔弾が短剣二刀流を吹っ飛ばした。

即席チームの仲間割れか？

違う、バズーカを放った男は地面に倒れていた。

額の汗を拭ったルーファス。

「ふう、当たってよかった（しかも、ついでにもうひとりもやつつけられたミラクル）」

今日は絶好調のルーファスがバズーカ男も狙撃したのだ。

ビビとセツも動いていた。鞭使いをフルボッコ。二人かがりですっ倒していた。

バズーカ男も鞭使いもハガネスとの戦いに集中していて、隙を突いてうまく倒すことができた。かなり運がよかったと言える。

ハガネスの相手は二人。

棒術使いに突きをお見舞いして、剣士には長剣の柄の底で突き飛ばした。

突きを喰らった二人はかなりの距離を飛ばされ、剣士のほうが闘技場の壁に打ち付けられた。

棒術使いは軽装だったため、一撃でノックアウトされたが、剣士は軽鎧で守られたのか剣を構え直してハガネスに挑んでき

た。

「ウオオオオオオオオン！」

まるで猛獣のような雄叫び。

剣士は一撃を振り下ろした！

紙一重でかわしたハガネスだったが、その顔に土塊が飛んでくる。さらに足をなにかに取られた。地面が割れている、亀裂の走った地面に足を取られたのだ。

人間のパワーを越えている剣士の攻撃力。武器が成せる業か、それとも……。

急に剣士がうずくまった。

「ウググ……」

不気味な呻き声。

様子がおかしいのは明らかだ。

予選のようすを特別展望席から観戦していたクラウスの元へ、警備兵が飛んできた。

「大変です！ 防御結界が停止しています、さらに警護に当たっていた者が数名行方不明に！」

「まずは予選の一時中断のアナウンスを！ それから消えた者たちの搜索、怪しい人物も見つけ出せ！」

クラウスはすぐさま命令を下した。

会場に流れるアナウンス。

《防御結界に不具合が発生したため、予選を一時中断します。

参加者は速やかに武器を下ろし戦闘を中止してください》

ルーファスはほっと胸をなで下ろした。

「よかった（このまま大会そのものが中止になっちゃわないかな）」

混乱を避けるために、観客や参加者に危機は知らせなかった。ルーファスも軽い気持ちで休憩モードに入ろうとしていた。観客たちも頭から水をかけられたようにシラけてしまった。

しかし、それは超巨大モニターに映し出された。

大きく宙を舞って飛ばされるハガネスの姿。金属の鎧ごとを抉った傷から血の珠が飛び散っている。

観客席で若い女が悲鳴をあげた。

闘技場に君臨した巨大な影。

ルーファスは目を丸くして尻餅をついた。

「……ど、どどど、ドラゴンだ！」

コロシアムに響き渡る地竜の咆哮！

咆哮だけで地竜は地面に亀裂を走らせた。

ドラゴンと一口に言っても各の違いがある。最高峰は（精霊竜）と呼ばれる他の生物を凌駕する力と知識を兼ね備えた神に等しきドラゴンたち。それに続くのがマスタードラゴンたち。

さらにそこからA級、B級、C級と続き、ワニに毛が生えたようなドラゴンがE級にランクされる。

「ハガネス！ その程度でくたばってもらっては困る。貴様はもっと苦しみながら死ななければならんだ！」

地竜が人語を発した。それなりの知能も持っている証拠だ。

さきほど見せつけた咆哮で大地を割る力、全長は軽く一二メートル（約一四・四メートル）以上はありそうな巨大、それら

を考慮して少なくともB級以上のドラゴンだ。

参加者たち、観客席にいたクラス魔導学院の教員たち、多くの者が戦闘態勢に入っていた。

地竜は自分を狙う者たちを見回した。

「無駄な血を流すつもりはない。俺はハガネスだけに用がある。それでも俺に手を出すというのなら、俺もただでは済まんが、貴様らに出るであろう死傷者を想像してみろ！」

たったひとりの犠牲で話は済む。下手なマネをして犠牲者を増やす必要があるだろうか？

果たしてひとの命は計ることができないのか？

逃げ出す観客たち。いつでも戦える構えをしていた魔導学院の教員たちも生徒の避難を優先させた。

そんな中、残る者もいる。

倒れているハガネスの前にビビが立って地竜と対峙した。

「友達をこれ以上傷つけたら許さないんだから！」

その後ろから屈強な戦士たちがぞくぞくと現れた。

「こんなちっこい嬢ちゃんにカッコいいとこ持って行かせるわけにはいかんだろ」

「ドラゴンと一度戦ってみたかったんだ」

「止めを刺せば名を上げられる」

「こんなおもしろいことを前にして逃げ出せるか、ふっー」

「ドラゴンハントの基本は連携だが、これでは何人死人が出る事やら」

総勢二〇名はいるだろう。参加者たちも各々の思いでドラゴ

ンに戦いを挑む気だ。

倒れていたハガネスがゆっくりと立ち上がった。

「俺一人でやる」

周りがざわついた。

伝説のドラゴンスレイヤー。話には聞いていても、すべてを鵜呑みにはしてなかったのだから。それが『俺一人でやる』と宣言した瞬間、本物かもしれないという衝撃が走ったのだ。

「へ地鳴りの大狼」の御手並み拝見だな。その背中の大剣、抜いて見せてくれるんだろ？」

「おいおい、楽しみを独り占めなんてずるいぞ、俺にも戦わせろ」

「ドラゴンさんもハガネスをご指名してんだ。一対一の決闘に横やりなんて野暮だぜ」

口々に戦士たちはしゃべりながら、結局はハガネスひとりに任せ見守った。

ハガネスは重傷を負っている。地竜の一撃は鋼鉄の鎧を穿つほどの威力。その攻撃もおろらくは手加減している。地竜はハガネスが苦しみながら死ぬことを望んでいるからだ。

長剣を構えるハガネスを見て地竜はあざ笑った。

「宝剣ヴァルバスブレードを抜かないのか？ 貴様にその資格などあるはずもないがな」

地竜はハガネスの背で沈黙を続ける大剣についてなにか知っている。

「俺になんの恨みがある？」

ハガネスは尋ねた。だが、おそらく気づいている。

「この姿を見てもわからぬのか？ ヴアルバツサの名を出してもわからぬのか？ この竜殺しの略奪者めっ！」

「いや、一目でわかっていた。老竜ヴァルバツサの面影がある。ヴァルバツサを殺したのを俺だ、しかしそれには訳が……」

「聞く耳など持たぬ！」

地竜は毒液を口からまき散らした。

すぐに飛び退いたハガネス。その目の前で炎の柱が上がった。毒液が気化して火がついたのだ。

気がつけば辺りは火の海だ。

地竜の狙いはハガネスだ。だが、周りが巻き添えを食うのは時間の問題。決着を早急につけなくては！

爆風を起こしたセツの鉄扇が炎を掻き消す。

その風は追い風となるか？

ハガネスは長剣で地竜に斬りかかる。巨大な地竜を前にしては、長剣など縫い針に過ぎない。さらに地竜の皮膚はまるで硬い装甲に守られるように、針の一本も通さぬのだ。

長剣では歯が立たない！

剣が刺さるとすれば、眼や口腔などだろうが、易々とそれを許すとは思えない。

地竜の長い尻尾が鞭のようになった。

まるでそれは自分の皮膚に止まった蚊を叩くように、長い尾はハガネスを叩きつけた。

「ぐっ！」

金属の鎧が変形した。ハガネスは体に食い込む鎧をすぐさま脱ぎ捨てた。これで身を守る物はない。次は確実に死ぬ。

見守る戦士たちがざわめき立つ。

——なぜ、背中の大剣を抜かない？

ハガネスはルーファスに語った。抜けないのだと。

地面に血が落ちる。

鎧を脱ごうが脱がまいが、どちらにせよハガネスは長くない。

セツが鉄扇を構えた。

「もう見ていられません！」

地竜に向かっていこうとするセツをルーファスが止める。

「待つて無謀だよ！」

「それはわかっています。しかし、目の前でひとが死ぬのを黙って見ているというのですか！」

「……………（僕だつて！）」

しかし、あまりにも無謀な戦いなのだ。

それでもセツはルーファスの制止を振り切って地竜に挑み掛かった。

「愚かな」

地竜は蔑むような瞳でセツを見下し、鋭い爪を振り下ろした。

眼を見開くセツ——避けられない！

ズオオオオオン！！

巨大な手が大地を割った。

次の瞬間だった！

轟音と共に爆発が巻き起こり地竜が煙の中に消えた。

客席に並ぶ魔法連隊。王宮の魔導士たちだ。

セツは!?

「ありがとうございます」

無事だった。

セツを抱きかかえているのはクラウス。

「ひとりのために、多くの者が命を賭ける……人間なんてそんなものさ。観客の避難はすでに済んだ、残った者は覚悟がある者だけだろう（王宮の兵も志願者のみだ）。思う存分、戦えばいい。僕は僕の意思で守りたいものを守る」

戦乱が幕を開けた。

飛び交う魔法。

刃が風を斬る。

人々の懸命な攻撃も地竜にはかすり傷程度だった。

圧倒的なドラゴンの力の前に、戦士たちがひとり、またひとりと倒れていく。

世界が揺れた。

地竜の咆哮。

毒液がまき散らかされ、大地に亀裂が走る。

叫び声がそこら中からあがった。

攻撃などしていられない。守りに徹するだけで人々は精一杯だ。

「ああっ！」

叫んだルーファス。亀裂に落ちた！

伸びる手。

「つかまれ！」

男の叫び。ハガネスだ。

がっしりとつかまれた互いの手。ハガネスがルーファスを亀裂から引き上げている最中だった。

——ルーファスの顔に血の珠が落ちた。

二人の体が浮いた。地竜に噛み付かれたハガネスが持ち上げられたのだ。

ハガネスに噛み付きながら首を振る地竜。ルーファスの体も大きく振られ、今手を離せば大きく飛ばされ地面に叩きつけられる。

「ハガネス！ 離して、すぐに離すんだ！」

振り子となったルーファスの比重が加わり、ハガネスの体に牙が食い込んでいく。じわじわと、じわじわと……。

地竜の眼が笑った。

あっさりと地竜はハガネスから口を離れた。

大きく放り出される二人の体は、地面に激しく叩きつけられた。

ルーファスは無傷だった。

だが、ハガネスは……。

「ハガネス！ ハガネス！ 僕のことなんかかばわなくても！ 生きてるんだろ、返事してよ！」

ぐったりとして動かないハガネス。

ルーファスの目つきが変わった。絶望と憎しみを宿した鋭い眼。

「くそおおおおおつ！」

形振り構わずルーファスが地竜に飛び掛かった。

あまりにも無力。

あまりにも虚しい。

あまりにも呆気なくルーファスの体を叩き飛ばした巨大な爪。

「ルーちゃん！」&「ルーファス様！」

二人の声は絶叫だった。

ハガネスの真横に落ちたルーファスは、眼を開けたまま動かない。傷はハガネスよりも深い。死はすぐそこに迫っていた。

「俺は……俺は……お前のことを守りたかった……なのに、なのに……うおおおおつ！」

怒りに我を忘れたハガネスは無意識のうちに背中の大剣に手を伸ばしていた。

伝説の宝剣ヴァルバツサブレードが――抜かれた。

世界を覆い尽くす暗い雲。

雷鳴と共に大地が泣き叫んだ。

コロシアムの壁にも次々とひびが走る。

高く舞い上がったハガネスが、大きく振り上げた大剣を地竜の眉間に叩き落とす刹那！

「待て！」

覆面剣士がハガネスの地竜の間に入った。

そして……。

目を開けたルーファス。

次の瞬間、セツが抱きついて来て二人はベッドの上で大きく跳ねた。

「ルーファス様！」

「いたたたた……ちょっと離れてよ」

さらにビビまで抱きついてきた。

「ルーちゃん！」

「ビビまで……なに、どうしたの!？」

状況が把握できなかった。

多く並べられているベッド。病院とは少し違うらしい。横になっっているのは、ほとんど屈強な男たちだ。

「コロシアムの医務室です」

と、セツが説明した。

ルーファスの脳裏に気を失う寸前のことが、叩きつけられるように思い出された。

「そうだ、ドラゴンは？ ハガネスは大丈夫なの！」

心配で胸がはち切れんばかりのルーファ。

顔を向けられたビビは顔を下に向け、つぶやくように静かに言う。

「……ハガネスは……逃げた」

「は?」

啞然とするルーファス。

「どういうこと？」

と、ルーファスはセツにも顔を向けたが、

「わたくしはよく知らないんです」

逃げたとはいったい？

ビビが悪戯そうな笑みを浮かべ、ルーファスにそっと耳打ちをする。

「本人の意思に反して伝説がまた増えちゃって、居づらくなつたからこの地を離れるって。ルーちゃんによろしくって言うってよ」

「伝説って？」

ビビはルーファスの耳から離れた。

「ついにあの大剣を抜いたんだよ。それからながあつたのか、なんかみんなよくわからないんだけど、とにかくすごい光に包まれた、気づいたらドラゴンもいなくなつて」

「……どーゆーこと？」

「だからさっぱり」

「そういえば、僕のケガは？」

「それもさっぱりなぜだか」

そして、全部ハガネスに押しつけられた。

すべてハガネスのお陰だと。

雪の積もる霊山。

グラーシユ山脈の山頂に地竜はいた。

「なぜ邪魔をした？」

その横には覆面剣士の姿。

「この国の守護者ですもの、当然よっ」

女のような声。いや、女と言うより……。

覆面剣士の体が光に包まれ、姿が徐々に変化していく。

白銀の美しい毛に包まれた霊竜ヴァツファート。

「それに無駄な血は流すことはない……あのとき、触れてみてわかったでしょう？」

「愚かな過ちを犯した、今ではそう思っている。あの剣には祖父の魂が宿っていた、封印から解放された剣がすべてを教えてくれた」

地竜の額には大きな傷痕があった。すでに治っているが、痕は残りそうだ。

ヴァツファートは教師のようになぞいた。

「わかればよろしい。ならアンタの隠してる財宝の一部を渡しなさい！」

「なぜだ？」

「アンタが起こした顛末の損害賠償に決まってるじゃないか、いい！」

「人間っぽいな……あんた」

「国の守護者である前に人間が好きなの」

二匹のドラゴンは気配を感じて振り返った。

啞然とする男の姿。

「……貴様は！」

叫んだのはハガネスだった。

神々しいまでに凜としたヴァツファート。

「人間よ、慌てるな。まずは客人としてそちに茶でも振る舞おう」

「あア？」

あまりの事にハガネスは呆然とした。

地竜にも今や殺気の欠片もない。ハガネスと見つめる瞳に鋭さはなく、どこか呆れているようにも見える。

「あんた方向音痴か？」

そんな質問をされるなんてハガネスは思いもしなかった。

雪が溶けそうなほど、なごやかな笑い声が響き渡った。

戦いを終えた男たちは、酒を酌み交わして友となる。

…ヴァッフアートはオカマだが。

第一七話 目覚めのキスは新たな予感

《一》

クラウス魔導学院に潜む影。

ササツと物陰に隠れて今日もストーリーキング。

学院で有名なストーリーカーといえば、ローゼンクロイツの追っかけアインだ。二代目として有名なのがユーリ。そして、このごろウワサになっているのがセツだ。

「嗚呼、ルーファス様。甘味処の割引券を手に入れたのでお誘いしたいのに……（小悪魔がちよろちよろと邪魔ですわー）」
物陰に隠れていたセツの遠い視線の先で、ちよろちよろとルーファスの周りを小走りしているビビ。

「ねえ、ルーちゃんルーちゃん、割引券もらったから食べに行こうよ。ジャジャーン！」

効果音を高らかに上げながらビビは甘味処の割引券を出した。よく目を凝らしてセツはビビの手元を見つめた。

「あれは同じ割引券！」
しまった、先を越された。

「いいね、ちょうど小腹も空いてたし」
と、ルーファスはセツの気も知らないで答えている。
悔しそうにセツは袖口を噛みしめた。

「キイー！ おんどりゃあ、血の雨を降らせたる！」

ゴリラの形相で鉄扇を構えたセツ。

そこへとある男が声をかけてきた。

「探したぞ」

ゴリラが振り返った。

あ、違った。ゴリラの形相のままセツが振り返った。

思わずビビって後退った大の男は、武術大会で知り合ったハガネスだ。

ハツと気づいたセツは苦笑い。

「おほほほ、ハガネスさんではありませんか？」

「あ、ああ……」

完全にハガネスはドン引きしている。

セツは取り繕うと必死になって、辺りを見回し適当な話の種を探した。そこで目に入ったのが、ハガネスが片手に持っていたトロフィーだ。

「それは？」

白銀に輝くトロフィー。

「こないだの大会のトロフィーだ」

先日の武闘大会の優勝者に捧げられるはずだったトロフィーだ。

「どうしてそれをあなたが？」

「大会は騒ぎで中止になったが、あの騒ぎを収めた功績ということでアステア王の使者がこれをもって来たんだが、俺にはこんな物ももらう資格なんてないから断ろうと思ったが、おまえ

のことが頭に浮かんでな」

ハガネスはトロフィーをセツに差し出した。

「そうですか……」

セツはトロフィーをつかんだが、手元に引き寄せようとはしなかった。その表情は暗い。

「どうしたんだ？」

「い、いえ、ありがとうございます。これでやっと故郷に帰ることが出来ます」

力強くトロフィーを受け取ったセツは、その顔を見られないように空かさず頭を深々と下げ、逃げるようにこの場から立ち去った。

セツの背中を眺めながら首を傾げるハガネス。

「わからん、悪いことしたか？」

悪気がなくても、物事が悪い方向に向かってしまうこともある。

まさかハガネスがトロフィーをセツに渡したことで、王都アステアを巻き込む大事件になるとはッ！

言い過ぎました。

ルーファス周辺で巻き起こるドタバタ劇になるとはッ！

笑顔爆発でビビが店内から出てきた。

「美味しかったあ！」

その後ろから、空っぽのおサイフを逆さに振りながら、ルーファスも店内から出てきた。

「割引券につられて逆に高くついたなあ」

それが店側の戦略だ。

しょんぼりと肩を落とすルーファスの顔をビビが下から覗き込んだ。

「どうしたのルーちゃん、元気ないのお？」

「(ビビが片っ端から食べまくるからだよ)」

とは口に出しては言えなかった。

「そうだ！」

と、ビビがなにかをジャジャンと取り出した。

笑顔のビビ。

表情の曇るルーファス。

ビビの手に握られた一〇パーセントオフの紙切れ。

「駅前に新しいケーキ屋さんができたんだって！」

「却下」

「えーっ、即答!？」

「だってもうお金ないよ」

「無駄遣いばかりするからだだよ」

「(……ひとにおごらせておいて)」

ビビと出会って以来、なにかといつもおごらされているルーファス。そういえばユーリにもよくたかられている。二人ともルーファスに召喚された当初、無一文だったため、その後もズルズルとルーファスにおごらせる構図ができたのだ。

「ルーちゃん仕送りで生活してるんだから、もっとお金は大切に使わないとダメだよ」

「そういうビビはどうなのさ？」

「う……」

言葉に詰まるビビ。

現在ビビも似たような生活だ。

「私は親に仕送りしてもらってるけど、ビビはパラケルスス先生にお小遣いせびつってるらしいじゃないか」

「違うよ、くれるからもらってるだけだもん。おじいちゃんも孫ができたみたいでうれいって」

「学生寮だって裏技使ってタダで使ってるんだし、ところで学費とはどうしてるの？」

「さあ？」

「そこ『さあ？』で済む問題じゃないでしょ」

二人は話しながら街を歩き、ルーファスはビビの顔から目を離し、前方に顔を戻したときだった。

立ちはだかるセツ。

「大事な話があります——ルーファス様」

周りを歩いていた一般人たちも足を止めてしまうほどの、気合いのこもった真剣な眼差しでセツはルーファスを見つめた。

まだ話も聞いていないのに、ルーファスはどっと汗をかいた。

「な、なんでしょうか？」

思わず敬語だ。

「わたくしといっしょにワコクに来てください」

ガン。

ショックを受けたのはルーファスではなく、その横にいたビ

ビだった。

そんなビビのようすをセツはチラッと見て、すぐにルーファスへ視線を戻した。

「ルーファス様との結婚をあきらめておりません。ぜひ、ルーファス様にはわたくしの両親に会ってもらいたいのです」

「ちよ、ちよ、ちよっとお！」

慌ててビビがルーファスを押し退けて前へ飛び出してきた。

キリツとセツがビビを睨む。

「部外者は邪魔です」

「部外者じゃないもん！」

ほとんど脊髄反射的にビビが言い返した。

「だったら何者だというのですか？」

「ともだち代表！」

「婚約者なら話になりますが、ただの友達なら黙っていてください」

「セつたんだって婚約者じゃないクセに！」

「わたくしは少なくとも元婚約者です！」

なんだかルーファスを置いて二人が白熱している。

セツの後ろにはモヤモヤと角の生えた鬼神が見えるような気がするし、ビビの後ろには大きな鎌を持ったドクロさんが見えるような気がする。

ちなみにドクロさんは一般人に取り憑くとかなりヤバイっていうか、死んじゃうが、ビビの実家の守護神なのでビビには無害だ。

ビビがズンと一步前へ！

「いっどこで？」

「ルーファス様と接吻を交わし、掟が無効になるまでの間で
す！」

あのとときのルーファスとセツのキスシーンがビビの脳裏に浮
かんだ。

馬乗りのセツに押し倒されているルーファス。ふたりの唇が：
…。

カーッとビビの顔が沸騰した。

セツがルーファスに近づいてくる。

ビビがルーファスの前に立ちはだかり両手を大きく広げた。

「だったらルーちゃんの今の婚約者はアタシだもん！」

「ええええーっ!？」

叫んだのはルーファス。裏返った叫び声で歩行者たちが立ち
止まって振り向いた。

ハッしてビビは我に返った。

「(うっかかり変なこと口走っちゃった、ヤバイどうしよ
う!)」

慌ててそのままルーファスに耳打ちをする。

「ああでも言わないとセツさんが納得しないと。ルーち
ゃんとアタシただのともだちもんね、ね！」

不自然な強調だったが、ルーファスはそのゆーところには気づ
かず納得した。

「つまり作戦ってことだね。よし、それで行こう」

つくり笑いを浮かべながらルーファスがビビより前に出た。

「じつはそうなんだ。ビビと婚約したんだ、さつき」

さつきとか思いつき取り取って付けたような設定だ。

見え透いたウソにセツが引つかかるわけがない。

「証拠はありますか？」

「し、しょう……こ？（そんなこと言われても）」

困った顔でルーファスは後ろを振り向きビビと顔を見合わせた。

ズンズンとセツが迫ってくる。

「婚約したというのなら、接吻くらいもうしたのでしょ？」

ここで見せてくれませんか？（そんなことふたりにできるわけない）」

真っ赤な顔をしてビビは両手で口元を押さえた。

「で、できないよ！」

「ぼ、僕だってそんなこと！」

ルーファスの頭からは湯気が出た。

気づくとルーファスの眼前にセツの顔が迫っていた。

「わたくしはできません。これでまた掟が有効になります」

なんとセツはルーファスの唇を奪おうとしたのだ。

「ちょっと待ったあ！」

二人の間に入ったビビちゃんのグーパーパンチがルーファスの顔面に炸裂！

「ぐはっ！」

ぶっ飛ぶルーファス。キスは回避できたがこれは痛い。

そして、ゴリラ現わる。

「なにしとんじゃボケカスがッ！」

ゴリラに怒声を浴びせられたビビはちよつと足を後ろに引いたが、その足を一步前に出して負けまいと身を乗り出した。

「ちよつと勢い余ってパンチしちゃっただけで、これを見せたかっただけでもん！」

今ルーファスを殴ったばかりのビビの鉄拳。その指に輝く巨大な宝石。

「これがルーちゃんにもらった婚約指輪！」

がーん！

セツシヨック！

「そ、そんなまさか……（ウソや、ウソに違いない！ ルーフアス様がビビに婚約指輪を贈るなんてありえへん！）」

素のセツはワコクの西方の方言が出る。

しかし、この婚約指輪はどうしたのだろうか？

立ち直ったセツは疑いの細い眼でビビの指でキラメク婚約指輪をガン見した。

「……………（うゝん）」

ビビの頬を滑る冷や汗。

「も、もうじっくり見たからオツケーだよねっ！」

ササッとビビは手を引っ込めようとしたが、ガシッとセツにつかまれた。

「あやしい……」

つぶやいたセツはなにを思ったのか、舌をペロツと出した。

焦るビビ。

「えっ、なにしようとしてるの！」

必死に腕を引っ張り逃げようとする。が、ゴリラ並みの腕力で離してくれない。

そして、セツはペロツと指輪の宝石を舐めたのだ。

「甘い」

と、一言。

瞬時にそしらぬ顔でビビはそっぽを向いた。

冷笑を浮かべ勝ち誇った顔をするセツ。

「アメちゃんです。ただのお菓子のアメちゃんではありませんか！」

指輪の形をしたアメだったのだ。

ネタバレしてもビビはブツとほける。

「お、おかしでもいいじゃん。気持ちさえこもってれば婚約指輪にはかわりないもん！」

「そもそもルーファス様から贈られたものなのですか、ルーファス様？」

ここでビビに尋ねても普通にウソをつかれそうだ。ルーファスに顔を向けたの正解と言える。

「え、その……あげたような、あげなかったような……どっちかっていうとあげてない寄りのような気がしないでもするようないようなするようない……」

しどろもどろだ。

強気に攻められるとルーファスは弱い。いつもそうだ。

ルーファスを見つめていたセツの視界にビビが割り込んできた。

「勝手にルーちゃんを連れて行かないでくれる？」

強気の口調。そして、ビビの手にはいつの間にか大鎌が握られていた。完全に実力行使に出るつもりなのだ。

セツは怯まない。

「友達代表の部外者は黙っていてください」

「ともだちのなにが悪いわけ？ カンケーないし、ともだちだって家族だって、いきつけの喫茶店の店員だって、ルーちゃんのこと思ってるひといっぱいいるんだよ、ここには。だから勝手に遠い場所なんか連れて行かないでって言ってるの。それにルーちゃんだってイヤがつてるじゃん」

ルーファスの気持ち……。

哀しげな瞳でセツはルーファスを見つめた。

「本当に嫌なのですか？ 心の底から本当に……」

「……」

ルーファスは難しい顔をして黙っている。顔を伏せたりしてセツから視線を外さないが、言葉は出て来ない。

ほっぺたを膨らませたビビが叫んだ。

「ルーちゃんはつきり言ってるよ！」

「そ、その……（セツと結婚なんてできないよ。答えは決まってるんだけど、そんな真剣な顔で僕を見てるセツに言いづらい）」

ダメ人間。

なあなあで済まされる局面ではない。セツは真剣なのだ。

ビビは怒っていた――ルーファスにだ。

「サイテーだよルーちゃん。なんではっきり言えないの？　ぐずぐず煮え切らないルーちゃんイライラする」

「イライラするって言われても」

溜め息をもらしながらつぶやき、ルーファスはビビからセツに顔を向けた。

瞳を潤ませているセツ。

ルーファスが動いた！

逃げた！

セツの顔を見た瞬間、一目散に逃げた！

うわあ、ルーファスサイテー。

顔を大きく振ってルーファスに向けたセツの瞳から一粒が散った。

「それでも構いません！」

突然、セツの袖口から巨大なマジックハンドが飛び出した。

魔導ではなく機械だ。

びっくり仰天メカにルーファスが捕まった。マジックハンドに持ち上げられ、拘束されてしまったのだ。

目の前で起きた捕物劇にビビは瞳をまん丸にしてその場から動けない。

周りのギャラリも呆然としている。

叫び声が木霊する。

「ぎゃーっ、助けてーっ！」

逃げられないルーファス。

そのままセツは愛の逃亡劇を開始した。

ルーファスを拉致しながら、素早くこの場から逃げ去ったセツ。

残されたビビはハッと我に返った。

「逃げられたーっ！」

すぐにビビはふたりのあとを追ったのだった。

《二》

巨大なマジックハンドは街中でかなり目立つ。しかも、そこにひとが握られている。

「あのお、降ろしてくれないかな？」

「逃げないと約束して、ワコクに同行してくださいさるなら」

というルーファスとセツの会話。ほぼ同じような内容です。一〇回ほどやり取りをしていた。

「トイレ行きたいから降ろしてくれないかな？」

「我慢してください」

「どこまで？」

「ワコクまで」

「それはさすがに無理です」

今のところ逃げ出すチャンスはなさそうだ。

ルーファスは話題を変えることにした。

「ところでどうやってワコクまで行く気？」

「この都には空港があったはずです」

三大魔導大国の首都である王都アステアは、都市としての発展もめざましく、多くの公共施設のインフラも進んでいる。

交通面での整備は、王都の西を流れる大運河シーマスにある港から船が出ており、都市の東西南北と中心にあるアンダル広場の五ヶ所に駅があり、これから向かおうとしているアステア国際空港は第二東地区という運河の向こう側にある。

現在位置から空港まではかなり遠い。

「走っていくには遠いよ？」

「道をよく知りませんから、馬車を拾おうと思います」

「今すぐじゃなくて、旅行の準備とかしたりして、あしたとかじゃダメかな？」

「時間がありません」

もうセツの気持ちは頑なだ。

今は他人の気持ちなど考えない。ルーファスの気持ちすら今はいい。今は自分の気持ちのまま行動する。

「(わたくしは母上のように後悔しない)」

母？

セツの母に過去になにかあったのか？

どうやらセツを突き動かしているのは、ルーファスへの想いだけではなさそうだ。

「セツが本気なのはわかるけど、私よりもいいひと見つかると思うんだよね。自分で言うのもなんだけど、そこら中にいると

思うんだ」

「ルーファス様はわたくしが自分で決めたひとです」

「次に決めたひとが見つかると思うよ」

「次という選択肢がなかったらどうします？」

「それは困るなあ」

「わたくしはルーファス様を強引にでも連れて逃げることにしました」

「でもさ、今回の場合は次があると思うよ。絶対、必ず（たぶん）」

「今はルーファス様のことをお慕い申し上げております。それがすべてです」

今はそれがすべて。今はセツの気持ちが変わることはないだろう。なにか切っ掛けがなければ、もしくは刻が過ぎ去らなければ、ひとの気持ちは変わらない。

恋は盲目！

次の恋を考えているようなら、もうすでにその恋は終わっているのだ。

逃亡を続けていると、セツたちの前に人影が立ちはだかった。

「ストオーツプー！！」

ビビではない。

スーパリーの袋を片手に持った巨乳の女。残念ながら人妻主婦ではない。カーシャだった。

思わず足を止めてしまったセツ。

「いきなり大声で驚いてしまったではありませんか」

「どういう状況なのだ？」

変な物を見るような目つきで、カーシヤはマジックハンドと捕まってるナマモノを確認した。明らかに変だ。

自力で逃げ出せないルーファスの頼りはカーシヤしかない。

「(素直に助けてくれるかな?)」

頼るには不安いっぱいだった。

ルーファスは不安を抱えながらも、助けを求めることにした。

「じつはさ、セツが私と結婚するためにワコクに連れて行こうとしてるんだ。だから助けてよカーシヤ」

「嫌だ」

即答。

「そんなこと言わないでよお、カーシヤあ(ぐすん)」

「(嫌だと思っても言いたくなってしまう妾の悪いクセ

……ふふ) 条件によっては助けてやらんこともないが(どうせ

ヒマだし遊んでやるか)」

「どんな条件？」

「ここにカレーの材料がある。が、うっかりルーを買うのを忘れてしまった。甘口のルーを買ってウチに届けてくれたら、そのあとで助けてやろう」

……あと？

「今捕まってるんだけど？」

「見ればわかる」

平然とカーシヤはルーファスの問いに答えた。

助ける気ナッシンゲ！

「行きましよう、ルーファス様」

時間の無駄をしたと言わんばかりの溜め息を漏らしてセツが歩き出す。

「まてえい！」

ヒマ人カーシャ立ちはだかる。

しかしセツシカト！

スタスタとセツはカーシャの横を通り過ぎようとした。

「だからまてえい！　　つと言っておろうが！」

右手にニンジン、左手にはタマネギを構えて立ちはだかるカーシャ。明らかな不審者だポーズだ。

こんな不審者とお友だちだと思われるとアレなので、さらにセツの足は速まってこの場から立ち去ろうとした。

しかし、逃げようとするとする相手を逃がすハズがないのだ。そういうひねくれ者のカーシャなのだ。

「ライラライラ、大地の加護を受けしお野菜さんたちよ以下略、精霊ドリアードとか力を貸したまえ以下略！」

呪文詠唱がかなりテキトーだった。通常ならこんないい加減な詩で魔導が発動するはずがない。だが、そこはいにしえの魔女カーシャだった。

ニンジンとタマネギがカーシャの手を離れ巨大化し、なんと手と足がニョキニョキと生えてきたではないか!?

「ふふふっ、ニンジンさんとタマネギさんから逃げ切れるか？」

もはや勝ちを確信して不敵に笑うカーシャ。

背丈は大人と同じくらい。ニンジンさんとタマネギさんにセツは挟み撃ちされてしまった。

セツは眉をひそめてよろめいた。

「うっ……わたくしが大のタマネギ嫌いだと知ってのことですか！」

「（知らん）ふふっ、敵の弱点を突くのは兵法の基本中の基本！」

知らないのかよっ！

相変わらず今日のカーシャさんはテキトーである。

しかし、たまたまタマネギが弱点というのは、セツにとってピンチである。

そして、マジックハンドに捕まっている上空のルーファスもゲンナリしていた。

「ニンジン苦手なんだけど」

ルーファスはニンジン嫌いだった！

………で？

たしかに嫌いな食べ物に追い詰められたセツ&ルーファスベアだが、嫌いな食べ物巨大化して目の前に立ちはだかつてからって、食べなきゃいけないわけでもなし、だからどうしたっていう状況である。冷静に考えれば。てゆーか、野菜さんたちはどの程度の戦力なのだろうか？

カーシャがビシッとバシッとセツを指差した。

「ゆけっ、ジアルスルフィドアタック！」

タマネギさんがセツにビュッと液体を飛ばした。

素早くそれを交わしたセツ。が、液体はすぐに気化して、猛烈な目の痛みでセツは目元を押さえてしまった。

ジアリルスルフィドとはつまり硫化アリルのことである。だからその硫化アリルってなんじゃって話になるのだが、つまりタマネギを切ると目に染みる成分である。この成分は加熱すると甘みが変わり、カレーを美味しくしてくれたりするのだ。

目つぶし攻撃を受けたセツは前が見えずに逃げることもできない！

カーシャが笑う。

「ふふふつ、思い知ったかジアリル以下略攻撃を！」

そーゆーカーシャも目元を押さえてフラフラしていた。すっげーダメ攻撃だ。

このタマネギガスは、さらになんちゃってテロ攻撃として広がろうとしていた。

辺りを歩いていた人々が目元を押さえながら次々と倒れていく。それを見た人々は悲鳴をあげたりして、さらにパニックは広がる。

「テロだ！」

誰かが叫んだことでさらに辺りは混乱状態が激化してしまった。

さらに最悪なことに、ジアリルスルフィドは可燃性があり、引火点が四六度だったりする。気温が四六度まで上がるなんてことは、アステア市中ではありえないことだが、たとえばちょっとした摩擦熱とか――。

巨大なボデイのタマネギさんが放出した液体は、放水したように道路に水溜まりを描いた。ちょうどそこへブレーキをかけた自転車がやってきて、車輪が水溜まりに突っ込んで炎上。

火花が飛び散って、瞬く間に次々と炎上していった。

「(今夜はカレードじゃなくてバーベキューだな、ふふ)」

なんてカーシヤさんは呑気なことを考えてる場合ではない。もうけっこう大惨事である。

だが、この程度の炎など、氷の魔導に長けたカーシヤにかかれば、ちょちょいのちょいだ。

しかし、セツのほうが迅速に動いていた。

「(芭蕉扇でひと扇ぎすれば) 烈風！」

大きく扇がれた鉄扇から凄まじい風が放たれ、炎を一瞬にして掻き消してしまった。

人々から歓声が上がる。セツに浴びせられる讃辞の声。人だかりがセツを取り囲んで褒め称えたのだった。

照れ笑いを浮かべるセツ。

「いえいえ、当然のことをしたまでです」

なんて対応をしながら、セツはふと気づく。

「あれ？」

マジックハンドの先にルーファスがいない。

「逃げとるやないけ！」

ゴリラフェイスで怒鳴り散らしたセツの周りから、サーッと観衆が引いていく。

周りから人がいなくなり、カーシヤの姿も消えていた。とっ

くにカーシャも逃げていた。残されたのは焼けたタマネギとニンジン。

このあと、タマネギとニンジンは地域住民が美味しくいただきました。食べ物を粗末にしちやダメ！

セツの間を見て逃げ出していたルーファスは、とにかく東に逃げていた。東には空港がある。つまり逆を突いたルーファスなりの作戦だった。

しかし、魚屋さんの曲がったところで、セツが立ちはだかつたのだ！

「お待ちしておりました、ルーファス様」

待っていた？

「(完璧な作戦だと思ったのに) どうしてここに？」

とルーファスが尋ねると、セツはニッコリ笑って受信機を取り出した。

「発信器を頼りに」

ちよーストーカーッ！

慌ててルーファスは体中を手探りで発信器を探したが、まったくもって見つからない。

「いったいどこに……？」

「メイドインワコクの発信器は針の先ほどしかありません。肉眼で見つけるのは不可能だと思います」

「見えなくても、体になんかついてると思うと気になるよ」

「では、わかりました。ワコクに来てくださると約束してー

」

「イヤです」

先読みして即答。

「まだ最後まで言ってますんが？」

「約束したら発信器を外してくれるんでしよう？」

「いえ、結婚式を挙げましようと言おうとしたのです」

「そっちの話っ!? (発信器の話はいつの間にか終了?)」

セツビジョンは広がり続ける。

「急な式なので、親族のみのごちんまりしたものでよいと思います。しかし、式はワコクの伝統に則って神前式でお願いします」

「いやいやいやいや、式とか挙げないから」

「新婚旅行は海が綺麗な南アトラス大陸のメスト地方で、美味しい海鮮料理を食べて、夜は浜辺で星を眺めながら、君のほうが綺麗だよ……なんて言われてしまうたら、ウチ、もお……」

「(言わないよ、絶対)」

頬を赤くしてモジモジするセツを冷めた表情でジトつと見つめるルーファス。

さてと、セツが妄想に浸っている間にルーファスは、そおつと逃げようとした。

「そういうわけでルーファス様！」

と思ったら、いきなり話しかけられた。

「うわっ、現実に戻還した！」

叫びながら後退って、つまずいたルーファスは尻餅をついて

しまった。

ルーファスが立ち上がる前に、セツがジリジリと距離を詰めてくる。

「この方法だけは使いたくなかったのですが……」

「強硬手段なら拉致の時点ですーとーだと思うけど、それ以上のこと？」

「じつは……」

「じつは……？」

「爆弾型発信器をルーファス様の体に埋め込んだのですー！」

「エエエー……ッ!?」

ルーファスの叫びに周りの通行人たちが反応して、こっちはほうを見はじめた。

震える腕を掲げるセツの手には受信機型送信機。

発信器とか、受信機とか、送信機とか、なにがなんだか混沌としてきた。とにかく重要なのは、ルーファスの体に爆弾が埋め込まれているということだ。

「ほ、僕の体に爆弾だって!?」

「はい、この起爆スイッチを押せば、ポンとなります」

「……ポン？」

「はい、ポンです」

「（なんかポンってあんまり爆発力強そうじゃないけど、体の中っていうし、もしも爆発したら絶対に痛いよ、ヤダよ）」

ポンの擬音では威力がイマイチわからないが、爆弾は爆弾である。

そんな爆弾発言を聞いた通行人たちのひとりが叫ぶ。

「爆弾テロだー！」

いきなりこんな発言を聞いても、多くの人はなんのこっちゃとポカーンとしてしまうが、次に叫び声があがった瞬間、辺りは一気に騒然となった。

「きゃーっ！」

「助けてーっ！」

叫んだの女性だ。甲高い叫び声というのは、恐怖心を煽るには最適だ。叫びが風に乗ると同時に、恐怖も伝播していった。

そして、爆弾騒ぎの伝言ゲームは巡り廻ってこうなった。

「あのひと痴漢よーっ！」

中年オバサンが叫びながら指を差したのは、もちろん我がルーファス！

「え……僕？」

伝言ゲームとはかくも怖ろしいものだ。どこでどう間違って爆弾テロが痴漢になったのか？

とにかく痴漢犯にされたルーファスへの視線は冷たい。マゾには堪らないほどの尖った氷のような女たちの視線が浴びせられる。

そして、女の敵となった副賞と男の敵にも認定された。被害者が若い娘とならば、なおさら男どもは張り切る。良いとこ見せたがりの精神だ。

とにかく逃げようとするルーファス。それを追おうとする被害者セツ。

「あのひとを捕まえてください！」

この発言が一連の勘違いに拍車を掛けた。

ギラついた眼をした猛者どもがルーファスを追っかけてきた。

ダツシユしながら後ろを確認するルーファス。

「ぎゃーっ！（なにあの先頭走ってるひとっ!?）」

先頭グループから抜きん出て痴漢を追っているのは魚屋のオヤジだった。

しかも裸にエプロン！

オヤジは裸にエプロンと聞いて、かなりエグイものを想像した諸君もいるかもしれないが、そこまでひどいものではない。

小麦色に焼けた筋肉モリモリの上半身が油でベトベトに輝いていて、首からかけるタイプのビニール製の前掛けをしてるっただけだ。裸なのは上半身だけで、下半身はちゃんと赤ふんを装着しているのでなんら問題はない。手にはモリを持っていくような気もするが、アレはモリではないので大丈夫、どう見てもモリではなく魚類だ。魚屋が魚を持っていてもなんら問題はない。

魚屋のオヤジが魚を投げた！

まるでそれはヤリのようにルーファスの脚に刺さりそうになった。

ルーファスジャンプ！

ヤリ……じゃなかった、魚はルーファスの股の間の法衣を裾を貫通して穴を開けた。

冷や汗を流すルーファス。

「(食べたなら美味しいのに、刺さったら死ぬ)」

ルーファスを仕留め損なつた魚は、尖つた口を地面に突き立てて刺さつたままだつた。

じつはこの魚、王都アステアの東を流れるシーマス大運河で捕れるウナギなのだ。死後硬直が早く、その硬さは軍神ノーマスの拳ほどあると云われ、つまりちよー硬いということである。これらのことから槍ジャベリン 鰻イールと呼ばれ、二五〇年以上前のアステア革命時には、物資不足の民衆たちがこのウナギを武器にしたなんて逸話も残っている。

魚屋のオヤジが装備していたジャベリンイールは、もう一匹手元に残っていた。

「そりゃ、よつと！」

かけ声と共にジャベリンイールが投げられた。

が、滑って手から抜けた！

この槍の難点は、ぶっちゃけウナギなので、ヌルヌルして投げるのに適さないってことだ。

ほつと溜め息を吐いてルーファス命拾い。

だが、ほつとしたのも束の間、まだルーファスは絶賛追われている真っ最中。

しかも、なんだか追っ手の群衆たちが騒がしい。

「馬だ、暴れ馬だ！」

……は？

暴れ馬ですと？

そして、振り返つたルーファスが眼にしたものとは!?

《三》

ルーファスを追っている猛者どもが、ポップコーンが弾けるように、次々と宙へ跳ね飛ばされていく。

なにかが、なにかが猛スピードで群衆を撥ね除け、嵐のごとくやってくる。

それは馬だ。暴れ馬だった。白く輝く美しい白馬だった。

その光景を見たルーファスは思わず啞然とした。

「……え（ローゼンクロイツ?）」

白馬に乗るローゼンクロイツの姿。

乗るっていうのは跨るっていう意味ではない。暴れ馬をサーフボードのように、二本脚で立って乗っかっているのだ。超人的なバランス感覚である。

これだけでも衝撃的な光景であるが、異様なものがもう一点あった。

なんとローゼンクロイツは暴れ馬の上で納豆をかき混ぜていたのだ!

もはや意味がわからない。電波な住人のローゼンクロイツに意味なんでもとめちやイケナイのかもしれない。さすがのルーファスも長い付き合いながら理解に苦しんだ。

「(どういう状況でそうなる?)」

いくら考えてもわかりません。

ローゼンクロイツは遠い目をしている。ルーファスのことなんか目に入っていないようにすで、追ってきたわけでもないらしい。つまり通りすがりの暴れ馬に乗るひとつでことだね！

相手はただの通りすがりなのでスルーしとけばいいものを、ルーファスは声をかけずにはいられなかった。

「ローゼンクロイツ！」

「ふに（にゃ？）」

ローゼンクロイツと目が合ったと同時に、ルーファスは馬とも目が合っていた。

暴れ馬が突進してくる！

ズドン！

ルーファスを跳ね飛ばして暴れ馬が去っていく。パカラッ、パカラッ！

地面に這いつくばって息絶え絶えのルーファスの元へ空色ドレスの影が近づいてくる。

「そんなところで寝ていると風邪をひくよ（ふにふに）」

いつの間にかローゼンクロイツは暴れ馬から飛び降りていたのだ。しかも、納豆を一粒も溢さず、かき混ぜ続けている。

「ね……寝てるんじゃない……なくて……暴れ馬に……ぐふ」

「ちよっと擦っただけなのに大げさだよ（ふあふあ）」

「えっ……ホントだ、ぜんぜん痛くないや」

体を確かめルーファスは立ち上がった。ケガはまったくないようだ。服が少し破けて汚れたくらいで済んでいた。

そこへやっとセツが追いついてきた。

「どうなさったのですかルーファス様！」

「べつにたいしたことないよ、ちょっと転んだだけ（げ……追いつかれた）」

内心では隙を狙って逃げようとしている。

チラッとローゼンクロイツはセツを見て目が合った。

「ルーファスの知り合いかい？（ふにふに）」

「わたくしのことお忘れですか!？」

「覚えてない（ふにい）」

他人を覚えるのが苦手なので仕方ない。いつも通りの反応だけれど、その少し前にローゼンクロイツは普段と違う反応を示していた。

ルーファスはおおくと片足を下げた。それにすぐさま気づいて鋭い視線を向けるセツ。

「もう逃がしません。絶対にルーファス様をワコクに連れて帰ります。逆らうというなら、爆弾をポンとさせます」

ポンとされたら大変だ……たぶん。ポンだけにポイント大変に
違いない！

ジト目で見ているローゼンクロイツ。こつちじゃない、あつちだ、セツのことをだ。

「旅行に行くのかい、ルーファス？（ふにふに）」

「そうじゃないよ、セツにさらわれそうになってるんだよ。誘拐だよ誘拐、ワコクなんか行きたくないよ」

「そうだね、引きこもり体質のルーファスには海外無理（ふにふに）。ワコクは納豆が美味しいらしいから、おみやげはそれ

でいいよ（ふあふあ）」

他人の話を聞いていないのはデフォルトとして、自分の会話も前後で脈絡が合っていない。

セツの鼻を刺激する独特の腐った臭い。腐ったというところ怒られるので、独特の発酵した臭いが漂ってきた。

「まさか異国で納豆に出会えるとは驚きです！」
未だにローゼンクロイツはコネコネしていた。

「わたくしは納豆が好物で、朝は必ず納豆と決めています。もちろんルーファス様とひとつ屋根の下で暮らすことになったら、お召し上がりになってもらいます」

「納豆キライなだけ……」

リアルでイヤそうな顔をしてルーファスがつぶやいた。

がーん！

セツシヨック！

「納豆を否定するのは、わたくしを否定するも同じ。しかし、納豆はわたくしのほんの一部でしかありません。ワコクにはまだまだ素晴らしいものがあります」

気を取り直して、ピシッとバシッとルーファスを指差しセツが早口でしゃべる。

「王都アステアでも人気の和菓子店もや本店はワコクにあります。たしかにここで食べる和菓子も美味ですが、本店で食べる和菓子の数々は此の世の至極ともいべきもの。中でも本店でしか売っていない限定スイーツの本家特製もどら焼きは、女子校生たちの間で大人気。ティーンエージャーの雑誌で何度

も取り上げられるこれを食べなきゃスイーツ好きは語れない定番中の定番。食べてみたいとは思いませんか、ルーファス様ッ！！」

「ぜひ、食べたいですッ！」

なぜかセツの気合いに押されて、ルーファスも熱がこもった返事をしてしまった。

「では、ぜひともワコクにお出てください」

サラッとニコツとセツは言った。

「行…行かないよ！」

サラッと乗せられて『行く』と言いきりになったがセーフ。

王都のスイーツは食べ尽くしている隠れスイーツ男子のルーファスとして、心が揺さぶられるセツの話であったが、そんな甘い罠で結婚させられてはたまったもんじゃない。

スイーツだけに甘い罠。

ジト目で見ているローゼンクロイツ。こっちじゃない、あっちだ、セツのことをだ。

「ふうん（ふにふに）。で、ルーファスはおみやげを買ってちゃんと帰ってくるんだよね？（ふあふあ）」

「だから僕はワコクなんか行かないし、だからおみやげも無理だし」

「でも彼女はルーファスを絶対に連れて行くってオーラを発してるけどね（ふあふあ）」

納豆が糸を引いた！

その糸は切れない。ローゼンクロイツの魔力が込められ、

妖糸ようしと化したのだ。これは構えの体勢であった。

変化にセツも気づいていた。

「ルーファス様を守ろうというのですか、なぜ？」

そうだ、ローゼンクロイツはルーファスを背にしている。

ちよっぴりルーファス感動。

「さすがローゼンクロイツ。僕たちちよっぴり友だちだよね、うんうん」

「道に迷って家に帰れないから、ルーファスに送ってもらわないと困る（ふにふに）。だからルーファスをワコクには行かせられない（ふあふあ）」

「……そうですねー、友だちなら家まで送ってあげるの当然ですよねー、あはは（カーナビ体に埋め込め）」

ルーファス空笑い。

友情で助けてくれるのかと思ったら、道に迷って帰れないからカーナビをルーファスにやれてことだ。カレーのルー（甘口）を買ってこいというのよりはマシだが。

真剣な眼差しでセツはローゼンクロイツの背に隠れるルーファスを見つめた。

「わたくしと来ませんか？ ルーファス様の周りにはこんな方々ばかりです。わたくしならルーファス様に一生、身も心も尽くします」

ちよっつとローゼンクロイツの肩からルーファスが顔を出した。

「こんなんて？」

「短い間ですが、ずっと見てきました。ルーファス様と取り巻

く環境を——」

つまりストーリーカーしてましたったことだ。

セツは話を続ける。

「カーシャさんはあからさまにルーファス様を遊び道具としか見ておらず、いつも酷いことをしてきます。義理の姉のリファリスお姉様もルーファス様を家では召し使いのように顎で使っていますし」

「義理じゃないからね、そこ重要だからね」

「学園でルーファス様の話を聞くと、ドジ、マヌケ、へっぽこ、おまえの母ちゃんまでべそ、とみな口々に言っていました」

「母はでべそじゃないから（本当は覚えてないけど）」

「ビビにだって、振り回されたり、たかられて驕らせたり、ルーファス様をいいように使ってるだけなのです」

この話を聞いてルーファスは静かに瞳を閉じた。なにも言い返さない。

そして、ローゼンクロイツは納豆に隠し持っていた七味唐辛子を振りかけた。

思わずセツの気が削がれ、納豆七味唐辛子に視線が向いてしまった。

「納豆に七味なんて邪道です。香辛料はからしに決まっています！」

七味を納豆に入れて食べるというのはけっこうある話だが、問題はその量だった。

見る見るうちに七味唐辛子のビンが空になっていく。聳え立

つ燃えるような赤い山。ひとビン丸々かけやがった。

「は、はくしゅん！（ふにゅ）」

なんていか、つまりのところ、七味唐辛子が鼻にキタらしい。かけ過ぎなのだ。

ぴよんとローゼンクロイツの頭から飛び出たネコ耳。いつものパターンである。そして、本日のビツクリどつきり魔法は――。

ローゼンクロイツの身体から、花粉が吹雪くように飛び出したねこちゃんたち！

縦横無尽に暴れ回り、街中がパニックに陥る。

ねこちゃん大行進だ！

そんな中、ルーファスはとつくに逃げていた。ローゼンクロイツがくしゃみをしたら逃げる。もはや脊髄反射的な行動である。が、ルーファスは長年の付き合いなのにならびに逃げ遅れて巻き込まれたりする。

今回は運良く逃げられたルーファスだったが、その要因が大事件だった。

なんとなぜかルーファスは白馬にまたがっていたのだ。

「ぎゃあああああつ、だれかとめて！ うわあつ、ごめんなさあい道を開けてくださいー！！」

暴れ馬再び。

ルーファスはロデオマシンに乗った勢いで、振り落とされまいと滝汗を流して必死だ。ダイエットに効果的だねっ♪

なんてお茶目に言える状況ではなかった。

ハッキリ言って、振り落とされたら大ケガ間違いなし！
「とまっててばばばば！」

夢中のルーファスは無意識のうちに馬の胴体をバシンと平手打ちした。

ヒヒーン！

暴れ馬がいなかった次の瞬間、なんと馬に白鳥の翼が生えたではないかっ!?

「ペ……ペガサス!？」

イエス、ペガサス！！

翼をはためかせ、天に舞い上がるペガサス。

あつという間に、ルーファスの視界から見る地面のようすは、人影だが米粒くらいになっていた。

今落ちたら死亡だねっ♪

「だめだって、高いの苦手なんだよ！（去年の校外学習で塔の上からカーシャに突き落とされそうになってからトラウマなんだ）」

こんな状況のときに限って、ヤル気を出しちゃうペガサス。

宙返りをしてグルンとキメやがった。アクロバットなファンタジーだ——ルーファスが。

だって、この馬手綱もないんだぜッ！

なかなか落ちないルーファス。

（空飛ぶ魔法空飛ぶ魔法！）

空を飛ぶ魔法はいくつかあるが、ルーファスの属性である風を使う魔法での飛行は、かなりコントロールが難しくバランス

を崩しやすい。こんな恐怖に彩られた真つ青な顔をしたルーファスの精神状態ではムリだ。てか、通常時でもルーファスは空を飛べない。

二回転、三回転、四回転、高速五回転宙返り！

「うええええっ」

吐き気を催した瞬間、思わず抱きついていた馬の首から手を離してしまった。

慌ててたてがみを掴むが、暴れ馬は痛みでさらに大暴れ。首を縦横無尽に振り回し、反動でルーファスはついに振り落とされてしまった。

「ぎゃあああああああああゝゝゝ」

ルーファスの声が落ちて小さくなっていく。

さよならルーファス。

地面に向かって死のダイビング！

——じゃない!?

「水っ!？」

ルーファスの瞳に映る水。それは海のように大きいが違う。

大河だ、王都アステアを流れるシーマス運河だった。

これで助かるかもっていう甘い考えはルーファスにはなかった。案外、ここまで危機的状況だとスツと冷静だった。

「(この高さで速度で水に衝突したら……)」

速度と重量があればあるほど、ぶつかった衝撃は大きくなる。つまり、見た目は水でも、ぶつかったときの硬度は石ってことだ。

「なんか魔法を！」

この危機を脱する魔法はいくらでもあるだろう。が、冷静っぽく見えてもやっぱり焦って脳は必要以上に高速回転で情報が取り出せない。脳が回るたびに、びゅんびゅん情報が飛んで行ってしまってる状況だ。

もうダメだ！

ルーファスは水面まで顔を出していたお魚さんと目が合った。ぶつかる！！

風が吹く。

まるでその風は羽布団のように、ルーファスをふわっと乗せ、宙に浮かばせたまま、一隻の小舟まで運んだ。

手こぎボートの上に仁王立ちして鉄扇を構えているセツ。その鉄扇が起こした風であることは言うまでもない。

風から落ちたルーファスをセツがポトンとお姫様抱っこで受け止めた。女の子なのに以外というか、やっぱり力持ち。キレイたときのセツを考えると、その腕力もおおかしくないとうなずける。

「お帰りなさいませルーファス様」

ニコツと笑顔。

「た、ただいま（助かったのはいいけど、また振り出しに戻る）」

ルーファスは苦笑した。

見つめ合う二人。

このときの心を覗いてみよう。

「(嗚呼、ルーファス様)」

それしか頭がないセツ。

「(早く降ろしてくれないかな?)」

という目をしているルーファス。

掛け違う二人の視線だが、結果として見つめ合う状況になっている。

しばらくその状態が続き、やっとルーファスが口を開く。

「降ろしてくれないかな?」

「わたくしなら平気です」

「僕が平気じゃないから、早く降ろして」

「どうしてもですか?」

「どうしてもお願いします」

「そんな瞳で見つめられたら断れないではありませんか」

べつにどーって目をしているわけではなかった。ただただルーファスは降ろして欲しいだけだ。

仕方なくセツはルーファスを降ろした。小舟が少し揺れる。

大河の真上に浮かぶ一隻の小舟で二人つきり。

逃げようと思えば泳いで――

「(いけないよね)」

と、ルーファスは溜め息を吐いた。ちなみにルーファスは泳ぎが得意ではない。この王都アステアは海には面していないが、大河あるので幼いころから泳いで遊んで育つので、住民の多くは泳げる。

河の流れに沿っていくと、このまま飛空場に辿り着きそうだが、不安を覚えながらルーファスはセツに横目をやった。和服のところどころが破れていることに気づく。煤や灰などの汚れも目立っていた。

「大丈夫？（あのあとローゼンクロイツに巻き込まれて大変だったんだろうな）」

「なにがでしようか？」

「服が……あっ、手見せて！」

ルーファスはセツの手を取った。その手の甲についた軽い火傷の痕。

「ご心配はなさらずに！」

慌てて身を引いたせいで、セツは足下のバランスを崩して、よろめいて小舟から落ちそうになってしまった。

すかさずルーファスは手を伸ばした。セツも手を伸ばす。目を丸くして見つめ合うふたり。互いの指先が触れ合った。

まるで時間が止まったような感覚。

そして――。

《四》

再び時間が動き出した瞬間、大きな水飛沫を上げてセツが河に沈んだ。

水面から顔を出して、手をバタつかせるセツ。

「泳げないのです！ 内陸部の出身で泳ぎなっ……」

セツの顔が沈んだ。

パニックになるルーファス。

「わっ、えっ、マジ、あっ……うっ！（僕も泳ぎはちょっと）」

しかも、服を着たままなど危険極まりない。布が水分を吸って重くなり身体に張り付き自由を奪う。ルーファスも溺れかねない自殺行為だ。しかも、たっぷりどっしりな布が使われている魔導衣着用。

ならば和服のセツも事態は深刻だ。まったく泳げないとなれば、さらに状況は最悪へと進む。

あれこれ考えている場合ではない。ルーファスは河に飛び込んだ！

「やっ！」

水中で沈み行くセツの姿。眼を大きく見開いて水面に手を伸ばしてもがくようすは恐怖だ。

泳ぐと言うよりもがいてルーファスは潜っていく。

セツの口から漏れた大量の泡。大変だ、セツの息が続かない。ふっと糸が切れた人形のようにセツの動きが止まる。

慌てたルーファスは口を開いてしまい、大量の泡が水面に昇っていった。

「(うっ……苦しい)」

ルーファスの息も続かない。だが、今から水面に戻って呼吸をしていたら、セツを助けられない。今このときも、セツはゆ

つくりと暗い水底みなそこに落ちていく。

真っ赤な顔をして懸命に潜り続けるルーファス。あと少し——
—ついにセツの服をつかんで抱き寄せた！

やはりセツは気を失っている。ルーファスも息が限界だ。もう水面に上がる余力などなかった。

真面目な顔をして目をつぶっていたルーファスが、瞳をカット開いた。

「(そうだ！)」

ルーファスは神経を集中させて、手のひらで魔力を練った。まるで沸騰するように、手のひらから小さな粟粒がいくつ沸き出す。

急に大きな泡となり、ごぼっと水面へ上昇した。

慌ててルーファスはその泡に噛みついて口に入れようとしたが、口に入ったのはほとんど水。

「(ダメだ、うまく魔力が練れない)」

少量の酸素をつくることはできるが、それを自分だけでなくセツに与えるのは難しい。気絶した相手では、空気を呑み込むこともできず、誤って水を呑んで気道に入ってしまう可能性も否めない。

「もっと大きな泡で身体を包めれば……そうか、エアスクリーンだ！」

再度、魔法を使おうとした。だが、全身から小さな気泡が出たのみ。

「やっぱりダメだ！」

苦しげな表情をするルーファス。

魔法とは唱えるもの。現存する魔導の原型となったライラの別名は〈神の詩〉。意味を持ち、言霊なつたとき、最大限の力が引き出すことができる。念じるだけでも魔法の使用は可能だが、それでは力が弱い。

「(神様、僕に力を貸してください)」

ゴボゴボゴボ……と泡の言葉を吐きながら、ルーファスは魔法を唱えた。

しかし……なにも起きなかった。

肺の空気を使い果たしたルーファスはセツを優しく抱きしめたまま、意識が遠くなり白い世界から真つ暗に閉ざされた闇に落ちそうだった。

「(ダメだ……もう死ぬんだ……でもセツだけでも……助けたい！)」

カッと開かれたルーファスの両眼。

片眼が蒼く輝いていた。魔力を帯びた輝きを持つオッドアイ。刹那、氷結した！

ルーファスたちの水が一瞬にして凍りつき、球状の空間に閉じ込められたのだ。

スノードームのようなその空間に小さな雪の結晶が舞う。

そう、ここには空気があった。

氷の壁が作られ、中には水がない。水系と風系の魔導系統を同時に使用したのだ。

ふたりを乗せたスノードームは水面へと昇っていく。

ルーファスは驚いた表情をしていた。

「……なにが？」

この魔法はいつたいだれが発動させたのか？

ルーファス自身に自覚はなく、セツは気絶したままだ。

直前に起きたルーファスの変化は、すでに何事もなかったように消えている。

「はっ……セツっ——！」

慌ててルーファスは状況を思い出しセツの様態を確かめる。

口元に耳をそっと近づけると、呼吸の音が聞こえなかった。

「うそ……だよね？」

真っ白になりかける頭。

腕から脈を取る。

「うまく測れなかった」

自分自身の乱れている呼吸のせいでセツの脈をうまく測れなかった。

太い血管を探して、今度は首から脈を測ろうとした。

「うそ……だよね？」

同じ言葉しか出なかった。

ルーファスはセツの顔を覗き込むと、紫に染まった唇を見た。すぐに人工呼吸が脳裏に浮かんだが煩惱も同時に沸き上がった。

「（キスなんて……でもやらなきゃ！）」

こうしている間にも一分一秒と時間は過ぎ去り、セツの様態は深刻さを増していく。

ルーファスは目をつぶった。

そして、息を大きく吸いこむと、勢いよくセツの唇にぶつかっていった。

冷たい口づけ。

自分から他人に、ましてや女性にキスする日が来るなんて夢にも思っていなかった。だが、今はそんなことを考えている場合ではない。セツの鼻をつまんで、漏れることなく息が肺の底まで届くように吹き込んだ。

———。

口を離し、すぐに声をかける。

「セツ！」

返事はない。

もうキスをしたときに覚悟を決めている。ルーファスは臆することなくセツの鳩尾みぞおちあたりに平手を置いた。柔らかな胸の感触が伝わってくる。どうやらセツは着やせするタイプだったらしい。

覚悟は決めていたとはいえ、実際に感触が伝わってくると、動揺して顔をが赤くなってしまう。

それを振り払うように、ルーファスは魔法を放った。

ドン！

風系の衝撃で心臓マッサージを行ったのだ。

そのまま立て続けに、繊細に注意を払いながら、幾度かマッサージをして、再び人工呼吸をした。

「お願いだから！」

のどがはち切れんばかりに叫びながら、再び心臓マッサージをする。

心臓マッサージなんて今までのことではない。切羽詰まった状況で見よう見まねだ。リスクもあるだろうが、死はすぐそこに迫っている。

ルーファスの頭によぎる。

「(電撃で……いや、危険すぎる)」

不可能ではないが、ルーファスの技量では奇跡が起きない限りムリだ。

ルーファスは今、自分にできることを精一杯した。

再び心臓マッサージをして、人工呼吸をする。

口づけをして息を吹き込んだ次の瞬間、セツが急に咳き込んだ。

思わず叫ぶルーファス。

「セツ！」

朦朧とする意識の中で名を呼ばれ、重たいまぶたで何度かまばたきをして、セツは静かに口を開く。

「ルーファス……さま？」

自分の置かれている状況を理解できずにいる。目に入った者の名を呼んだに過ぎない。

無意識にルーファスはセツの肩を力強く握った。

「セツ！ セツ！ セツッ！ 生きてるんだよねセツッ！」

鼻水を垂らしながら、ルーファスは顔をグシャグシャにして、大粒の涙を撒き散らした。

セツは自分の身体が濡れていて、酷く凍えることに気づいた。けれど、一ヶ所だけは、ほのかに温かかった。そっと指先を伸ばしてセツは自らの唇に触れた。

そのようすを見ていたルーファスはハツとして沸騰する思いだった。

「違うんだ、誤解だから、その、うん、だから、人工呼吸と心臓マッサージをしただけで、やましいことなんて一切してないから！！」

「わたくし……？」

「濡れて、その、なんでか、えっと……」

「ルーファス様が助けてくださったのですよね？」

「そう、そうなんだけど……へっくしょん！」

壮大なくしゃみをしてブルブルと震えた。まだときおり夏の暑さが尾を引く陽気もあるが、寒さも確実に近づいてきている秋だ。水に濡れた身体は冷えて体力を奪う。

ふっと寄りかかるようにセツはルーファスに抱きついた。

「服を着たままでは余計に冷え込んでしまいますから……脱いで抱き合ったほうが……」

「いやっ！ それは、ダメだから、うん。あれだよ、とにかく外に出よう、ここが寒いんだよ」

氷の入れ物はすでに水面でぷかぷかと浮いている状態で、薄い氷の壁の向こうに景色がぼやけていた。

「えっと、まずは氷を割って外のようすを……」

ルーファスは少しセツに離れてもらおうと、肩を押そうとし

たが、そのときに気づいた。

「セツ？（息が苦しそうだ）」

苦しげで顔に力の入った表情で、セツは弱いながらも荒い呼吸をしていた。

ルーファスはセツの身体を片腕で抱きながら、残った腕を天井に伸ばして氷の壁を確かめるように叩いた。

その程度ではビクともしない。二・五メートル（三センチ）くらいの厚さがありそうだ。

氷と言えば対極にある属性は炎だ。

「（けど、条件が悪い）」

魔法は万能ではない。

すべての魔力の源となる素は、究極的には一つのものであると魔導学では習う。が、だからと言って常にどんな条件でも好きな魔法が使えるわけではない。それは理論上は可能であっても、それを行えるのは神話の登場人物ですら一握りだ。

「エアプッシュ！」

ルーファスは得意の風魔法で氷を割ろうとしたが、気体である風はこの手の作業には不向きである。強度もなく、放出時は圧縮されていても、すぐに拡散してしまう。

ならばとルーファスは現状で好条件に使える魔法を放つことにした。

「アイスニードル！」

強度もあり、尖った先端は衝撃には弱いですが、瞬間的な破壊力はある。

放たれた腕ほどのツララは、氷の壁を打ち抜き八ティート（九・六センチ）ほど貫いた。

一度、穴さえ空いてしまえば、そこから脆くなる。ツララと氷壁の密接面を狙って、ルーファスは続けて魔法を放つことにした。

「アイスニードル！」

先ほどよりも大きなツララは氷壁にヒビを走らせた。

「待っててセツ、外に出たらすぐに……（どうしたらいいんだろう）」

外への道が開かれても、ここは大河の真ん中、このスノードームから出るなんて自殺行為だ。

ルーファスはアイスニードを幾度も放ち、頭が通る程度の穴を天井に開けた。そこから腕を出し、

「（外と繋がればいける）」

天に向けた手のひらに魔力を集める。

「ヒート！」

一瞬にして、スノードーム内が暖かい空気に満たされた。静かに溶けはじめ氷壁。急速に溶けているわけではないが、氷壁がぬらりとしている。

ルーファスはセツを抱きしめた。身体から熱を発し続けている。

「（セツを温めないで、でもあまりやりすぎるとここが保たない）」

この場でこまねいていてもセツの様態は悪くなるばかりで、

お互い助かるかどうかもわからない。

どのくらい流されたのだろうか？

まだ街や港に近ければ、人や船などが近くににいるかもしれない。

パチパチつと弾ける音がした。

「サンダーシュート！」

天に向かって放たれた稲妻が昇る。ルーファスは救難信号の代わりとしたのだ。

すぐにルーファスは穴から首を出す。

「おい、だれか！」

辺りを見回しながら叫ぶと、遠くに小型船が見えた。

歓喜に沸き立つルーファスの表情が明るくなる。

頭を引っ込めた代わりに腕を出し、再び稲妻を放つ。今度は小型船がいる上空を狙うことにした。

「サンダーシュート！」

すぐにルーファスは外のようにすを確かめるため首を出す。

「おい！（気づいて！）」

が、その数秒後、小型船が魔弾砲を撃ってきたのだ。

魔弾砲はいくつかのバリエーションがあり、こちらにグングン向かってくるのは炎の玉だ。はじめは豆粒程度だったが、すぐに野球ボール、バレーボール、バスケットボールほどになった！

「違うんだ！」

叫びながらすぐさまルーファスはスノードームに身を隠した。

水壁を這うように広がった炎が目には飛び込んできた。

「あの距離から当ててくるなんて！」

炎はすぐに消えたので、瞬間的な熱ならこのスノードームで耐えられる。が、いつかは溶けてしまうだろう。すでに危機が迫っているのは、炎を当てられた箇所ではなく、水に浸かっている部分、とくに足下の氷が薄くなっている気がする。

ガタンッ！

急にルーファスたちの身体が浮いた。

「また撃たれた!？」

と思ったが、その衝撃ではなかった。

塀だ。整備された沿岸の塀ということは、街や港はすぐそこだ。

ゴン、ゴン、ゴンと流されつつ塀に何度も衝突する。

その振動が響いたのか、足下の水にヒビが入り、そこから少しずつ浸水してきたではないか。

ルーファスは天井を力一杯叩いた。

「割れる！」

魔法を使うことも忘れ、無我夢中で殴り飛ばす。

水の滴りとともに紅い雫が落ちた。

やっと思いついたように魔法を使う。

「エアダッシュ！」

通常、この魔法は風の力を借りて、ほんの二、三步を瞬時に移動するものだが、ルーファスは天井に向かって体当たりをした。

「ううっ、わっ！」

苦しげに声をあげてルーファスは一瞬だけうずくまったが、すぐに天井を確認した。ひとが通れるほどの穴が開いている。

「今だしてあげるからね！」

セツを背中に背負ってスノードームから出ようとした。が、思いのほか塀が高く、手を伸ばして届きそうになく、セツを背負っていたらなおさら無理だ。

「セツ、ちよつと無理させちゃうけど動ける？ 僕の身体をよじ登って上に！」

強引にルーファスはセツを押して塀を登らせようとする。

「ルー……ファ……さま……」

苦しげにつぶやくセツ。

登る体力もないが、ルーファスを残していけないと、セツは積極的には登ろうとしていない。

ルーファスは踏ん張ってセツを持ち上げ、お尻を押して塀の上へと放るように乗せた。

「はあ……はあ……」

力尽きたルーファスはへたり込んだ。

塀の上で横たわりながら、セツは顔と腕を出してルーファスに伸ばした。

ルーファスは手を伸ばした。

しかし、その手はセツの手を握る寸前のところで拳を握った。パキパキとヒビの入る音がした刹那、割れた足下の氷とともにルーファスが河に沈んだ。

「……っ！」

息を呑むセツ。

ルーファスの手を取れなかった。

わかっていた。あそこで手を取っても引き上げる力はなかった。最悪、ふたりで河に沈んでいただろう。

「ルーファス……さま……」

その名を呼び切は気を失いぐったりとした。

閉じられた瞳から流れた一筋の涙。

こちらに向かつて魔弾砲を撃ってきた小型船が近づいてくる。船首で仁王立ちしている女の長い赤髪が風に靡く。

「酒の邪魔しやがったクソ野郎はどこのだれだい！」

リファリスだった。まだ沈んだのが自分の弟だと気づいていない。

埠頭に目をやったりリファリスは気を失って横たわっているセツに気づいた。

「あの子はたしか……そんなまさかねえ？」

イヤな予感がする。

リファリスの背後で凶太い男の声がした。

「姐さん、クソツタレは見つかりましたかい？」

「それが……ひとりはそので、もうひとは河に沈んだっぼいんだけど……もしかしたら、わっちの愚弟だったかも、なんてなっ！」

「そりゃ大変ですぜ、今すぐおいどんが！」

目をつぶりながら、静かに落ちていく感覚に包まれた。

「（もう死ぬんだ。あはは、ツイてない人生だったな。セツは助かったかな。ローゼンクロイツに借りたゲーム返してないや。カーシャには酷い目に遭わされっぱなしだったけど、あのひとはあれはあれで……やっぱり酷いひとだったなあ、あはは。クラウスは今以上に立派な王様になって欲しいな。そうだ、ビビとなんか約束してた気がするけど、なんだったっけな。僕が死んだら母さんもローザ姉さんも悲しむだろうなあ。リファリス姐さんには怒られそうだ）」

まさかそのリファリスに沈められたとはルーファスは夢にも思っていない。

「（父さんは……どんな反応するんだろう）」

ルーファスは瞳を開けた。最後に光が見たかった。水面の光はまだ見えるだろうか？

「（寂しいな。天国ってどんなところだろう。みんなが来るのはだいぶ先だろうからなあ、ともだちできるかな……やだな、死にたくないな）」

水面の光が揺れていた。

「（ん？）」

少し驚くルーファス。

人影らしきものがグングンと潜って近づいてくる。

「ゴボボボッポッ!?（魚人!?）」

残る空気を全部吐き出してルーファスは眼を剥いた。

筋肉モリモリでヒゲモジヤのほぼ全裸のおっさんが、赤いふ

んどしをなびかせて泳いでくる。

遅しき漁夫の姿がそこにはあった！

というのが、ルーファスが目に焼き付けた最後の光景だった。

病室のドアがババーンと開けられた。

「お見舞いに来たよおくん♪」

ピンクのフリフリツインテールが凍りつくように止まった。

ベッドに横たわる患者に顔を近づけ妖しげな行動をしている人影。

ビビは力なく手に持っていたお見舞いの定番高級フルーツのピンクボムを床に落とした。

黒衣の医師が気を失っている患者にキスする寸前だった！

男が男にキスしようとしてたのだっ！

ビビが叫びながら部屋を出て行く。

「へんたいい！」

その声が届いたのか、ルーファスが目を覚ました。

「ぎゃあああああっ！」

いきなり目の前にあった妖しげな色香を放つディー院長に驚いた。

さっと顔を離したディーは舌打ちをする。

「チッ」

未遂だ。未遂でよかった。

ルーファスの脳裏になにかモヤのかかった光景がフラッシュバックする。

そこへ新たな見舞い人が尋ねてきた。

「よお、ルーファス元気にしてるかい？」

リファリスだった。その背後からクマのような男が顔を見せた。

イエス、ふんどし！

「ぎゃああああああっ！」

ルーファスの叫び声が病室に木霊した。

かかっていた頭のモヤが一気に晴れた。

「僕は……（覚えてる、覚えてる、朦朧とする意識の中で魚人に濃厚なキスをされたのを……）うええええええっ」

吐き気がして、自分の身体をブルブル震わせながら抱きしめた。

「ルーファス……はあはあ……様、だいじょうぶですか！」

息を切らせながら、よろめくセツがドアにもたれながら姿を現した。

見る見るうちにルーファスの顔色がよくなり晴れていく。

「セツ！」

思わずルーファスが両手を広げていた。

駆け寄ったセツがルーファスに抱きつく寸前、ディーが首根っこを掴んで制止させた。

「ルーファス君は絶対安静だ。それに君も患者なら患者らしくベッドで安静にしてくれたまえ。休んでいられないというなら、強制的に休めるようにベッドに縛り付けておくしかないな」

氷のように冷たい言葉。マジでやる気だ。

セツは笑った。

「それで構いません」

と前置いて、ルーファスに抱きついた。

「ありがとうございますましたルーファス様！ あなたに救われたこの命、もはや身も心もルーファス様のものです！」

それを聞いたルーファス——の傍らに立っていたディーが口を半開きにした。

ハッと我に返るディー。

「ルーファス君とはどのような関係なのだね！ 返答によっては緊急オペを行うぞ！」

「妻です！」

セツはキツパリと答えた。

荒れる病室。

そのようすをこっそりのぞき見していた影が去る。寂しげにツインテールを揺らしながら。

病室からは廊下には、セツの明るさと自信にあふれた笑い声が、いつまでも木霊していたのだった。

第一八話 トランスラヴ

《一》

放課後、薬品調合実習室で居残りをしているルーファス。その付き合いをさせられているローゼンクロイツと、そのおじやまをしているビビ。

今日の錬金術の授業で、薬品の調合が上手いかずに、緑色の煙を教室に充満させるといふ事故を起こし、それを反省して自主的にルーファスは復習にいそしんでいた。

「その試験管、青いやつを取ってこないかな？」
目の前のビーカーを真剣に見つめながら、手だけを二人に向けた。

「が、だれも試験管を取ってくれない。」

「あの、試験管を……」

振り向くと、ローゼンクロイツとビビは楽しい錬金実験をしていた。

「この薬品とこの薬品を混ぜて、少しボクの魔力を加えてやると（ふあふあ）」

「なになに、なにが起こるの？（ワクワク♪）」

大きめのビーカーに薬品を入れて、そこにローゼンクロイツが指先を浸けて、素早く離した。

すると、ビーカーの中で錬金反応が起こりはじめた。

はじめは小さな粒だった。それがだんだんとコンペイトウのようになり、やがて七色に輝き踊りだした。

「すっごーい、わあキレイ♪」

ビビは目を星のように輝かせて喜んだ。

さらにローゼンクロイツは液体に指先を浸けて魔力を注ぐ。

「生まれる結晶は魔力を注ぐモノによって違うんだ（ふにふに）」

「アタシだったらべつものになるってこと？ やりたいやりたーい！」

樂しそうにはしゃぐビビを恨めしそうに、ルーファスは生温かい眼で見つめていた。

「（手伝ってくれるって言ったのに遊んでるじゃないか）」

だれも試験管を取ってくれないので、仕方がなく目の前の調合中のビーカーから目を離して、青い液体の入った試験管に手を伸す。

「んっ、んんっつ（届かない）」

あとちよっぴり届かない。ぷるぷると腕が震える。

微妙に悪戦苦闘するルーファスを放置して、ふたりは楽しげに実験を続けている。

新たに作り直した液体の中に、ビビはおそろおそろ指を浸けようとしている。

「いきなり爆発することないよね？」

尋ねるとローゼンクロイツは、横で新たな調合に夢中だった。

シカト。仕方ない、彼は我が道を行くひとだ。

「ねえねえ、ルーちゃん見て見て！」

だれにも構われないとつまらないので、ルーファスに声をかけるが、こっちも現在必死だ。

「ちよつと今忙しいんだ、あとでね」

「もお！」

ぷくつと頬を膨らませて、ビビはブイツとそっぽを向いた。

「いいも〜んだ。アタシだけ楽しいことしちゃうもんね！」

大きな声で言うてから、ビビは一気に指をビーカーの中に入れた。

ピューン、パンパンパン、パーン！

ビーカーから打ち上げ火花が連続して上がった。

弾け飛ぶ火花が煌めきながら躍り、直撃を喰らいそうになったルーファスが悲鳴を上げる。

「ぎゃっ！」

髪が焦げ、慌てた拍子に試験管を倒し、ビーカーの中身をぶちまけた。

そして、床にできた水溜まりに火の粉が落ちた瞬間！

「ルーファスはおらんか？」

教室にカーシャが乗り込んできた。

ピンクの煙で視界が奪われる。

「げほっ、げほっ……（なにごとだ、またルーファスがしでかしたか？）」

煙を手で払いながらカーシャはルーファスを探した。

「ルーファス、ルーファス！」

手探りをしていると、むにゅっとした感触に触れた。煙が晴れてきて、ルーファスとカーシャが目を合わせる。

「ギャーギャーッ！」

一斉に二人は悲鳴を上げた。

ビビが当たりをキョロキョロ見回す。

「どうしたの!？」

凍りついているルーファスとカーシャ。それを見たビビも凍った。

いったいなにが起きたのか？

カーシャが口火を切る。

「なんだこの爆乳は！」

ルーファスの爆乳を両手で揉みしだきながら叫んだ。

「あうっ、む、胸!? カーシャこそそのマツチヨ……」

喘いで驚き、さらにカーシャを指差して指摘。

女体化したルーファスと男体化したカーシャ。

爆乳とマツチヨ。

ムキムキのボディで服がピッチピチで、まるでクマのような巨体。荒くれる漢の中の漢だが、顔は基本カーシャ。

華奢な体とはミスマツチな爆乳と、元々髪も長くシルエットはまさに女の子。メガネっ娘属性もプラスされ、顔立ちも悪くないので、まさかの美少女。でも、ちよつと背が高い。

変貌した自分のボディにショックを受けたカーシャは、背を向けるとスカートを捲り上げて、ナニかを確認した。

「生えとる！」

ぱおくん♪

ルーファスは恐くて自分の体を確かめられない。

二人に起きた肉体変化。ほかの者は？

ビビは自分の胸に手を当てて確かめた。

「(ちっちゃいけどある！) アタシ平気だよ？」

小さくても胸は胸！

全員の視線がローゼンクロイツに集中する。

何事もなかったように調査を続けている。

呆れたようにビビがつぶやく。

「いつもどおりだね」

カーシャがあとに続く。

「どっちでも構わんだらう」

はじめから中性！

どっちにしろローゼンクロイツは我が道を行く！

カーシャはそのマツチヨボディでルーファスに詰め寄り、首を絞めながらブンブンと振った。

「いったい、なんの、調査を、しておったのだあーっ！」

「こんなこと想定外だよ！ 僕はただ中和剤を……」

「それがどうしてこうなる！」

「わかんないよ、ビビに聞いてよ」

ふんぬっ！

というかけ声が聞こえてきそうな勢いで、カーシャは振り返ってビビを睨んだ。

ビビは一步後ろに下がって逃げ腰。

「知らないよ、ローゼンクロイツに聞いて」

全員の視線がローゼンクロイツに集中したが、以前としてマイペースに調査を続けている。

ドスン、ドスン！

象のような足音でカーシャがローゼンクロイツに詰め寄った。

「説明しろ！」

「ん？（ふに）」

なんか今やつとカーシャがいることに気づいたリアクションだ。しかも、マツチヨボデイを見てもまったく驚かない。

「『ん？』じゃないだろう『ん？』じゃ！ どうして性転換したと聞いておるのだ！」

「なにが？（ふにゃ）」

「見てわからんのか、妾も、ついでにルーファスも性別が変わっておるだろう！」

「ふうん（ふにふに）」

「おまえだって変わっておるかもしれんのだぞ！」

ゴッドフィンガーでカーシャはローゼンクロイツの胸を鷲掴みにした。

「……………（ん？）」

ぽかんとするカーシャ。

念入りに胸をまさぐってみる。

つるぺた、つるぺた。

「……………（変わっておらんのか？）」

さらにカーシヤは禁断の一手を使った。

「これでどうだ！」

股間を鷲掴みッ！

真顔のローゼンクロイツはボソツとつぶやく。

「いやん（ふにゃ）」

背筋がゾツとしてカーシヤは空かさず手を引いた。

そして、ローゼンクロイツは無表情のまま口元だけで悪意のある笑みを浮かべた。

「……変態（ふっ）」

思いつきりカーシヤが弄ばれている。

鷲掴みの結果をビビは興味津々。

「ね、どうだったの？ 男？ 女？」

「いや……それが……（細くて長くて固かった）」

重大事件が起きたような深刻な顔で考え込むカーシヤ。

その傍らで何事もなかったように実験を続けるローゼンクロイツは、何事もないようにスカートの中の股の当たりから試験管を取り出した。

それを見て啞然と言葉を失ったカーシヤだったが、すぐにカッと頭に血が昇った。

「それかッ！ ふざけるな、どんな場所に試験管を入れておるのか！ いつからそんなキャラになったのだ！」

「たまにはいいでしょ（ふっ）」

無表情のまま口元だけで笑った。なんかすごいムカつく笑い方だ。

結局、ローゼンクロイツの性別はわからないし、彼はべつにど
っちの性別だろうが構わないだろうが、カーシャとルーファス
は大いに困る。

ローゼンクロイツでは話にならんと考え、ビビに予先が戻る。
「おまえが説明しろ、なにが起きたのか順序よく、サルでもわ
かるように！（あ、バナナ食べたい。帰りにでも買って帰るか、
ふふ）」

「ええっと、ローゼンクロイツがおもしろい液体をつくって
来て、そこにあたしの魔力を注いだらいきなりドーン、バーン、
キラキラってなって……でどうなったの？」

とルーファスに顔が向けられる。

「私が調べていた中和剤とそれが魔導反応を起こして、気づ
いたらこの有様で……（どうしよう、この姿じゃ人前に出られ
ないよ）」

「わかった、とりあえず調合した物を全部並べろ」

カーシャの指示でテーブルに薬品などが一つずつ並べられる。
腕組みをして仁王立ちをしたカーシャが唸る。

「うーん、わからん」

「わかんないの？」

ぼそりと言ったビビをカーシャが睨む。

「おまえのせいだ。不確定要素のマナの成分がわからなければ、
中和剤なり解毒剤をつくることはできない」

がーん、ルーファスショック！

「やだよお、ずっと女の子のままなんて」

「妾だってマッチョなんて死んだほうがマシだ（死なんがな、ふふ）」

二人にとっては死活問題だが、ローゼンクロイツは相変わらず黙々と、ビビは楽しそうにしている。

「いいじゃん、おもしろいし」

「よくないー！」

二人の声が揃った。

ビビはお構いなしだ。

「せっかく女の子になったんだし、アタシと同じ髪型にしようよ。ねっ、ルーちゃん♪」

「えっ（すっごくイヤなんですけど）」

凍りつくルーファスに詰め寄ったビビは、予備の髪留めのゴムを両手でビヨンと伸ばし、ニコニコしながらルーファズに見せつけた。

逃げ腰のルーファスは一步、二歩、と後ろに下がる。

攻めるビビは三步、四歩と間合いを詰める。歩きたびにニコ

ニコが、ニヤニヤに変化している。

「逃がさないんだからっ」

ビビが飛びかかった！

捕まるルーファス。後ろで雑に結わいていた長髪をほどかれ、髪を二等分されて素早く結わかれた。

ぴょんぴょんっとルーファスの頭で二本の尻尾が揺れる。

「うんっ、カワイい♪」

目をキラキラさせて自分の作品を見つめるビビ。女子のカワ

イイは信用ならない。

「あとは女の子の服を着れば अच्छり！」

「勘弁してよお」

困った顔をするルーファスを見つめていたビビの表情が曇っていく。

「でも……アタシの服じゃ入らない（とくに胸が）」

貧乳でも胸は胸！

だいじようぶ、ローゼンクロイツだって胸ないし！

女子の服を着てはいないが、元々ルーファスがいつも着ている魔導衣は、シルエツト的には男女兼用なデザインで、裾も二股に分れていないスカートっぽい感じなので、この服でも十分に女子で通用するだろう。

ただ、もうひとりの被害者は変態が女装しているようにしか見えない。

「おまえら遊んでおらんで、解決方法を考えんか！」

「私に思い付くと思う？」

「あたしぜんぜんわかんないし」

二人の顔を見てカーシヤは溜息を吐いた。

「……………（だろうな、役立たずどもめ）」

はじめから期待していない。残るひとりの空色ドレスは、その類い希なる魔導センスがあるが、性格的にまったく期待できない。

カーシヤは手のひらの上にポンとグーを落として叩いた。

「そうだ、パラケルススがいるではないか。おいルーファス、

ちょっとパラケルススを探して来い」

「えっ、なんでも私が？」

「行けたら行け」

「やだよ、こんな姿で行けるわけないじゃないか」

「だれのせいで妾がこんな姿になったと思っておるのだ？」

「（絶対に僕のせいではないと思うんだけど）」

思っても口には出さなかった。

ビビはルーファスにじとーっと見つめられた。

「ひどくいい、あたしのせいだってゆーの？」

「そうは言っていないよ」

そう目は言っている。

ぶくうつと頬を膨らませたビビは、

「仕方ないなあ、あたしもついてってあげるよ」

「（いやいやいやいや、ついてくとかじゃなくて）ビビが行っ

て来てよ」

「えーっ、めんどくさあーい。ケーキ一個で手え打ってあげて

もいいよん」

「（……なにも悪いことしてないのに）ひとりで行ってくる

（なんだよ、みんなひどいよ）」

そそくさと教室を出て行こうとしたルーファスにカーシャが

声をかける。

「ついでにイチゴジュースを買ってこい」

「は？」

啞然としながらルーファスは振り返った。

その瞬間、カーシャが第一投振りかぶった。

ビューン！

「ぐえっ」

潰れたカエルのように呻いたルーファスのおでこに小銭がヒット！

デッドボールだ。

おでこを抑えて言いたがっていると、さらに別方向からビューン！

「いてっ！」

ルーファスの側頭部に小銭がヒット！

投げられた方向を見るとビビが笑っていた。

「あたしもイチゴジュース」

「なんでビビまで投げるのさ」

「だって楽しそうだったんだもん」

ビューン！

また小銭が飛んできた。

今度は素早くルーファスは避けようとしたのだが、なんと小銭が分裂した！

四枚の小銭がトルネード回転をしながら迫ってくる。

魔球だ！

「ぶえっ！」

ルーファスの顔面にヒットした小銭が、チャリン、チャリン、チャリン、チャリンと音を鳴らしながら、床に次々と散らばった。

ビビが目を丸くして驚く。

「お金を増やす錬金術!」

ボソッとカーシャが吐く。

「四枚投げただけだろう」

魔球じゃねーし!

ルーファスは小銭を拾いながら顔を上げ、困った顔をしてローゼンクロイツを見つめた。

「どうしてろーぜんくろいつまで投げるのさ?」

「そこに意味なんてあると思うのかい? (ふっ)」

ほくそ笑みやがった!

嫌がらせだ、絶対に嫌がらせだ!

「で、ローゼンクロイツはなに飲むの?」

ルーファスが尋ねると、

「いらぬよ、そんなもの (ふあふあ)」

すっげー嫌がらせ!

思わずカチンと来たルーファスは小銭を投げ返した。

が、四枚とも目にも止まらぬ早さでローゼンクロイツはキャ

ツチした。

「お金は大切にしないといけないよ、ルーファス (ふあふあ)」

おまえが先に投げたんだろう。

嫌がらせを受けて時間を潰してしまっていると、カーシャは痺れを切らせて怒り出した。

「さっさと飲み物買って来んか! (のどが渴いて堪らん)」

なぜのどがそんなにも渴くかって?

カーシヤはここにあった材料でわたあめっぽい食べ物をつくり、ビビと、ビビといっしょに食べていた。

それを見たルーファスは声をあらげる。

「ビビまで!？」

声に反応してビビがこっちを向いた。

「ん、ジュースまだ買ってきてないの?」

「……………(買ってきてないよ)」

無言で思いながら、ルーファスはさっさと教室を出ることにした。ここにいたらまた絡まれそうだと。

「……………なんで僕だけいつも」

ビューンッと飛んできた小銭がルーファスの後頭部に当たった。

振り返るとローゼンクロイツが指を一本立てていた。

「今はコーラの気分(ふあふあ)」

やっぱり頼むんかいっ!

《二》

小銭戦争のやりとりですっかり忘れていたが、現在女体化絶賛公開中!

ルーファスはハツとして廊下の影に隠れた。

このフロアには実習室も多くあるせいで、放課後も生徒たちがチラホラいる。

学園都市と言ってもいいほどの生徒在籍数なので、知らない顔とすれ違う確率のほうが高い。とは言っても、知り合いじゃないからって、今の姿はあまり見られたくないものだ。

今回のミッションを確認しよう。

目的は二つ。

その一、飲み物を買ってくる。

その二、パラケルスス先生に助けを求める。

飲み物は学院内のいたるところに自販機があるので、ミッションレベルは高くないだろう。ただ四本も持ち歩くのが大変そううだ。

「(しかもローゼンクロイツはコーラって)」

炭酸は振ると危険だ。

廊下をそろりそろりと気配を消して進む。

ルーファスはビクツと背中をさせて振り返った。後ろから男子生徒が歩いてくる。

「(バ、バレないかな)」

男子生徒に背を向けながら、壁の掲示物を眺めるフリをしてやり過ごす。

とくに男子生徒はルーファスには気を止めずに歩き去っていく。その後ろ姿をチラ見したルーファスは、ほっと胸を撫で下ろして溜息を吐いた。

「(心臓に悪い)」

ひととすれ違うたびにこの調子だったら、かなりの心的負担だ。加えて、こんな調子じゃいつまで経ってもミッションをク

リアできない。

さっさとミッションを終わらせてしまいたい。

「クイック！」

一時的に瞬発力を高め高速移動を可能にする魔法を唱えた。

ルーファスが廊下をダッシュする。

その角を曲がれば自販機はすぐそこだ！

一気にカーブを曲がった瞬間、目の前に人影が飛び込んだ。
た。

ぼによりん！

ルーファスの爆乳に男子生徒がダイビング！

相手は尻餅をついて倒れ、ルーファスは咳き込んだ。

「げほっ、げほげほっ……いった〜」

声帯も変わっているため、あげた声まで女の子っぽい。

高速移動していたためかなりの衝撃で、ルーファスは胸を押さえてうずくまった。

「（胸を潰されるとすごい痛い……はっ!?）」

押さえている胸が自分の胸であって自分の胸でないことに、ハッと気づいて顔を真っ赤にして離して立ち上がった。

頭から湯気を出して呆然とパニックになっているルーファスには、男子生徒が頭を下げながら声をかけてきた。

「すみません！ 大丈夫でしたか？」

ポロシャツにジーンズ姿のラフな格好で、腰のバッグにはいろいろな魔導具が詰め込まれていた。

そして、顔を上げた彼はサラサラの髪を靡かせながら、メガ

ネの奥の優しそうな瞳で笑った。

キラリーンと光る白い歯。

その精神的なまぶしさにルーファスはたじろいだ。

「だ、大丈夫です（人間と接触してしまった）」

さっさとこの場から立ち去りたい。

逃げるように背を向けて小走りで駆け出すルーファスに声がかげられた。

「待って」

呼び止められたが振り返りたくない。声すら出したくない。できれば関わりたくない。

「キミの名前は？」

名前を聞くなんて興味津々過ぎる。

本名を名乗れるわけもなく、気の利いた偽名も浮かばず、ルーファス逃亡！

「マギ・クイック！」

ルーファスは魔法を唱えた。マギはメギを最上級として、メギ・マギ・ラギ・ピコの上から二番目。ルーファスが扱える中では高等だ。

目にも止まらぬ早さで一気に廊下を駆け抜け、クイックの効果が切れた瞬間、今までの勢いに体がついていけず、ルーファスはロケットのようにぶっ飛んで壁に激突した。

「ぶべっ！！」

潰れたトマトにはならずには済んだが、全身を強打してかなり痛そうだ。

力なく床に倒れたままルーファスは動けない。

「(死ぬ)」

学院内で壁にぶつかって死ぬなんて、しかも女体化したまま。

「まだ死ねない！」

声をあげてバシッと立ち上がった。

女体化したままなんてイヤすぎる。友人知人家族にまで、ルーファスは女として死んだと心に刻まれてしまう。

「(とくに父に知られたらと思うとゾッとする)」

ただでさえ見放されて勘当寸前なのに、女になりましたなんて知られたらどうなることか。

「(世間体とか気にするひとだから、絶対に存在自体が歴史から抹消される。お墓も建ててもらえなくて、モンスターのエサにされて骨まで溶かされるとか)」

最悪すぎる。

そうならないために早く男に戻らなくては！

と、その前に、ルーファスは床に落ちていた小銭に気づいた。壁に激突したときに、預かっていた小銭を落としてしまったらしい。

「ジュースなんか買ってる場合じゃ……」

ぶつぶつぶやきながら小銭を拾い、最後の一枚に手を伸したとき、男の手が伸びてきてルーファスの手に触れた。

ゾゾゾッと寒気がして素早く手を引いて、顔を上げて見るとさっきの男子生徒がいた。

「はい、これで全部？」

最後の一枚を拾った男子生徒が、さわやか笑顔で小銭を差し出している。

「ありがとうございます」

手のひらを出して小銭を受け取った瞬間、手と手が触れた。

ルーファス滝汗！

心臓がバクバクして、その場から動けなくなってしまった。

男子生徒は輝く眼差しでルーファスを見つめている。

「俺の名前はルシ・ハグラマ、魔導工学科の四年生。キミは？」

魔導学院は四年生から魔導普通科と魔導工学科に分れる。ちなみにルーファスは魔導普通科の四年生だ。

また名前を聞かれてしまって、やっぱり気の利いた偽名も浮かばない。

そして再び逃走！

「マギ・クイック！」

目にも留まらぬ速さで廊下を駆け抜けたが、途中で筋肉が悲鳴を上げた。この魔法は身体の負荷がハンパないのだ。

グギッ！

足首をひねってルーファスが転倒。

そこへちようど人影が通りかかった。

「危ない！」

叫んだルーファスに顔を向けた人影。

ぼんぼん！

相手の顔面に爆乳アタックが決まった。本日二度目である。

尻餅こそつかなかつたが、片手を廊下に突いて、そのまま立ち上がるうとしていいる人影。

「廊下を走るのは危険だよ、お嬢さ……ん？」

途中まで言いかけて唾然とした。

「ルーファス、ルーファスカ!?」

知り合いだった。爆乳アタックを食らわせてしまったのは、同級生のクラウスだ。

その爆乳をガン見して驚くクラウスは、ハツとして顔を赤らめて背けた。

「（思わずレデイの胸を直視して……レデイではなくルーファスカ）どうしたんだルーファス？」

「あはは、どうしたって……なにが？」

言い訳すら思い付かなかった。

「なにがって、その……胸になにか入れているのか？」

「ちよっと腫れちゃって」

「声も高いというか、体付きも丸みがあるというか……」

奇異なモノを見るような目つき。完全に疑っている。

二人の間に微妙な空気が漂っているところへ、ルシが追いかけてきた。

「ハア、ハア……まだ名前を……」

肩で息を切って膝に両手をついている。

クラウスはルシを一瞥した。

「だれだいルーファス？」

ルーファス。

たしかにそう言った——ルーファス。

気づいたルーファスはマズそうな顔をした。

「げっ（聞き逃してないかな）」

聞き逃すはずがなかった。

「ルーファスっていうんだ。まるで男の子みたいな名前だね」
てゆーか、男の子です。

ササッとクラウスはルーファスの横に立ちそつと耳打ちをする。

「彼、ルーファスのことレディだと思っているのかい？」

「まあ、なんていうか、事故っていうか……（体は女の子だし）」

コソコソ話をする二人にルシがニコニコしながら近づいてきた。

「仲がいいんだ、王様と」

キリっとした目つきでクラウスは一瞬ルシを見た。

「（敵意を感じた）ただの友人だ」

なぜか慌てるルーファス。

「そ、そうだよ、だたの友人だよ！」

なぜか焦る。

変なところで焦るものだから、すっごい疑惑の眼差しを向けられた。

「てっきり、王様の妾（めかけ）かなって」

クラウスのこめかみがピクッと動いた。

「妾とは失礼な。そもそも僕は未婚だ」

「王様は女遊びがお盛んだってもつばらのウワサだから」

「どこの噂だ！」

身を乗り出して声を荒げたクラウスをルーファスが小声でなだめる。

「まあまあ、ほらクラウス女の子に優しいから勘違いされてるっていうか（実際、ストーカーっぽい子とかに付きまとわれたり、自分が彼女だつて名乗り出る子も多いし）」

親密なふたりのようすをルシは表面的な笑みで見つめている。「ルーファスさんが王様のモノじゃないなら、別に俺がモーシヨンかけてもいいよね？」

モーシヨン——異性の気を惹こうとする振る舞いのこと。うん、わかっていたけど確定だね！

コイツ、ルーファスに惚れたなッ！

ゾゾゾっと寒気がしてルーファスは後退りクラウスの後ろに隠れた。このクラウスを頼る行為が、絶賛疑惑を強めちゃいます。

ルシが強引に出た。ルーファスの腕をつかんだのだ。

「院内にあるカフェで休まない？」

「えっ、えっ、えええ（な、なんだこの状況）」

言葉に詰まるルーファスに変わって。クラウスがルシの腕を振り払った。

「レディはもっと優しく扱いたまえ」

何気ない一言だったが、ルーファスの胸にズキューンと来た。「（クラウスが僕のこと、レ、レディって……クラウスまでそ

んな目で……)」

身体の芯から発汗してきて、顔は蒸気を噴きそうなほど真っ赤だ。心臓のバクバクが止まらない。

そして、気づけばルーファスはクラウスの袖をギュッと掴んでいた。

無意識だった行動にハツとして手を離すと、クラウスも気づいて微妙に顔を赤らめた。ふたりを包む微妙な空気。恥ずかしいやら、気まづいやら。知らない第三者からすると、どう映るのだろうか？

「俺とはダメなのかい？」

寂しげな瞳。子犬の眼差しのような、キラキラうるうるの目からビーム攻撃。

思わずルーファスはたじろいだ。

「ちよっとだけなら……」

と折れたルーファスを身体ごとクラウスが遮る。

「いや、僕と約束があるんだ」

ねえーよ！

ルーファス初耳。

「えっ、そんなのあったっけ？」

ないない。

クラウスがソツとルーファスに耳打ちする。

「彼とデートしたいのか？ 僕に会話を合わせろ」

「デ、デデデ、デート！」

目と口を丸くして声を張り上げたルーファス。ぷしゅーっと

頭から湯気が出てふらつとしたところを支えられた。

ルシがクラウスを睨む。

「離せよ」

「君こそ」

クラウスは精悍な瞳で返した。

ルーファスはサンドイッチ状態で二人に支えられたのだ。

先に引っ張ったのはルシ。

「俺といっしょに」

負けずとクラウスも引っ張り返す。

「僕と来るに決まっているだろうルーファス？」

綱引きの縄状態でルーファスは両手を右へ左へ引っ張られる。

「ちよつと二人とも……（なにこの展開、男二人が僕を取り合
つてる）」

ポツと頬を赤らめ恥じらうルーファス。

ルーファス、ルーファス正気を保て！

おまえは男だッ！

「イチゴケーキと飲み物のセットおごるよ！」

ルシが声を荒げながら今まで以上にグイッと引いた。

「店ごと、いや国中のケーキを買ってあげよう！」

クラウスが乗せられてる。魔導産業で国を豊かに導いている
名君が、国中のケーキとか暴言過ぎる！

ルーファスは眉尻を下げてクラウスの身体を揺さぶる。

「クラウス、クラウス、君はそんなキャラじゃないだろクラウ
ス！」

「はっ（僕としたことが、冷静さを欠いていた）」

ふっとクラウスがルーファスから手を離れた瞬間、ルシがグツと引っ張り抱き寄せた。

熱く逞しい胸板に顔を置く形になったルーファス。

「（鍛えられてる）」

同じメガネでもエライ違いだ。もやしっ子ルーファス。

トク……トク……。

ルーファスの耳に微かな音が聞こえた。

耳をすませば音は大きくなる。

ドクドクドク……。

脈打つ心臓の音色。早く力強い。

「（もしかして僕のことを想って……）」

なぜかルーファスは胸がキュンとした。

顔を上げるとルシがメガネの奥の真剣な眼差しでクラウスを見ている。猫背なので気づかれにくいだが、ルーファスもそこそこ高身長だがルシはさらに長身で、こんな間近で殿方の顔を見上げるなんてドキドキものだ。ルーファスは男ですが。

クラウスが腕を伸してルーファスの手を握った。

「僕と来るんだルーファス！」

ぼわくと脳内お花畑な表情をしているルーファスにクラウスの声は届かなかった。

勝ち誇った顔でルシがクラウスを見下ろす。

「しつこいよ王様、彼女は僕といっしょに行く運命なんだ」

運命って！（笑）

恋愛トキメキキーワードの上位にランクすると共に、スイーツ（笑）な雰囲気も同時に醸し出される魔法の言葉。今のルーファスにはキュンキュンきた。

「（イケメンな彼とデート……きゃは♪）」

完全にキモイですルーファスさん。

ルーファスは正気じゃないし、ルシは正気だけど大幅な勘違いに気づいてないし、クラウドは正気に返ったかと想われたが、剣の柄に手が触れそうな位置まできてる時点で冷静じゃない。

三人とも空気がマトモじゃない！

そこへ新たな風が吹いた。

小走りでピンクのツインテールがびよんびよんやって来た。

「ルーちゃんおそ〜い、カーシャさんがカンカンだよ……（つてなにこの状況）」

一触即発な感じで乙女（男）を奪い合う構図になっている殿方ふたり。と、その片っぼの殿方に抱き締められているルーファス（絶賛心は乙女）。

そのようすを見たビビがボソツと。

「キモツ」

静かな廊下にはその発言は遙か遠くまで響き渡った。

ルーファスとクラウドがハッと我に返る。

そして、ルーファスはルシの身体を押し飛ばし、ビビをチラ見すると、真っ赤な顔を両手で覆い隠し小走りで駆けていった——内股で。

ぜんぜん我に返ってねえッ！

その後ろ姿にクラウドスは片手を切なそうに伸した。

「……ルーファス」

こっちもぜんぜん夢から覚めていないようだ。他人からしたら悪夢だ。

ルシは呆然としている。

「なぜ逃げるんだ」

同性だから。

その事実を知らないルシはルーファスの後を追ったのだった。

《三》

一方そのころカーシャは――。

「妾のプロテインはまだかーッ！！」

注文の品が変わっていた。

薄々わかっていたかも知れないが、じつはこの性転換は肉体のみの転換だけでは済まないようだ。

つまり、ルーファスの一連のキモイ思考や行動も、決してルーファスが変態化したわけではなく、この性転換の仕業だったのだ。

しかもどうやら、内面の変化は自然なモノというより、ちょっと振りすぎ――行きすぎてしまうようだ。

「妾の筋肉を見よ！」

両腕に力こぶをつくってマッスルポーズ。

「この美しい筋肉を見るのだーッ！（ふふっ、筋肉バカ）」

自分の筋肉に惚れ惚れしてニヤニヤするカーシャ。もう不気味すぎて勘弁して欲しい。

「この筋肉が目に入らぬかーッ！」

マッスポーズを次々と変化させながら、自称美しいボディを見せつける。

その見せつけられている相手はというと——無反応！

黙々と調合実験を続けているローゼンクロイツ。

彼、いや彼女、いや、彼……とにかくローゼンクロイツも性転換して、女体化しているハズなのだが、乙女チックに内面がなっていないようだ。というより、なっていないもよくわからない。ローゼンクロイツはどんなときでも例外扱いだ。

華麗にシカトするローゼンクロイツにカーシャが迫る。ついに服を脱いでその全裸まで披露した。

ちよつとした過ちなので、カーシャの名誉のために詳細な全裸描写は控えよう。その変わり、その全裸をやつと顔を上げて見たローゼンクロイツの表情から察してみることにしよう。

無表情。

三秒後——無表情。

五秒後——無表情。

一〇秒後——無表情。

三〇秒後——無表情。

この間、瞬きもせずカーシャを見つめていた。

そして、顔を下げて黙々と調合に戻る。

この間、何十回とポーズを変えたカーシャは、相手の無反応っぷりに怒りを通り越して、ただただシヨック！

「（もうローゼンクロイツとは遊んでやらんも〜ん）」

傷心を背負いながら、猫背でカーシャはいそいそと服を着始めた。

と、カーシャが見ていないところで、ローゼンクロイツは一瞬ニヤリと笑った。

そして、何事もなかった空気感が流れる。

無駄な筋肉披露に飽きたカーシャはお茶を啜る。

「やはり茶に限る」

てか、飲み物あるじゃん！

しかもイチゴジュースじゃなくてもいいのかよ！

ホントもうテキトーだな！

そして、一服を終えたカーシャがビシッとマッスルポーズング！

「妾の筋肉を見よーッ！」

と、結局筋肉を見せることをやめなかった。

こんな強制筋肉披露会がイヤで、ビビは教室を飛び出してルーファスを探しに行ったんだったりする。

そのころ逃走を続け、学院を飛び出していた。うっかり女体化のことを忘れ。

街中で立ち止まったルーファスは苦しそうな顔をした。

「うう、胸が重い……（引き千切れそうだし、なんだか擦れて

……」

思春期あたりで女子が急に足が遅くなったりするアレですね！

周りを見回すと、人々の視線を感じた。まるでジロジロ見られていような感覚がする。

「(みんな僕の胸を見てる気がする)」

まあ、たしかにそこに巨乳があれば見るのは当然！

もはや脊髄反射的な反応と言ってもいい。

が、女体化してしまっているという恥ずかしさで、必要以上に視線が気になっているということもある。

「(うう、恥ずかしい……)」

学院方向を見渡し、さらに逆方向も見渡す。

「(戻ろうかな、でもまた彼や知り合いに会うかもしれないし。ここにいるのもイヤだし)」

とりあえず学院に向けて歩いてみる。なるべく人と目を合わせないように、うつむきながら不安そうな顔で。

しばらく歩くと、甘味料のよい香りが漂ってきた。

ふと顔を上げると、クレープの販売馬車だ。

秋の新作クレープののぼりが風でひらひら揺れている。

瞬く間にルーファスの瞳が輝いた。

「チェックしてたのに忘れてた！」

女体化する前からスイーツ好きの一面がある。

さっそく短い列に並んでクレープを購入しようとする。

秋の新作はマロンを使ったものや、

どれにしようか迷いながら心が躍ってしまふ。

注文の順番が回ってきて、口を開こうとした瞬間、横から影が割り込んできた。

「ここは俺がおごるよ」

「げっ」

思わずイヤな気持ちが生み出した。隠し事が苦手なので、思いつきり表情にも出ている。

「俺はチョコイチゴスペシャル。君は？」

「え、えーっと（ここまで並んでいりませんとは言えないし、かと言ってここで答えたらおごられてしまう）」

男性店員がニコニコと笑っている。

ふとルーファスが振り返ると、後ろには列ができていく。

「○○、いや、××、やっぱり△△！」

「じゃあ、○○と××と△△」

「え……（三つも頼まれた）」

けっきょく新作クレープを三つ頼み、しかも流されるままにおごられてしまった。

で、なんだかわからないうちに並んで街を歩いてしまっている。

ルーファスの両手にクレープ二つ、ルシの手にも二つ。

じーっとルーファスはルシのクレープを見た。

「（あのクレープを最初に食べたいんだけど）」

「俺のこと見つめてどうかした？」

すっげえ勘違い！

シカト&気を紛らわせるため、ルーファスはクレープにがついた。

「（美味しいけど味わえない。さっさと食べ終えて逃げよう。彼の持つてるクレープはどうしよう）」

またルーファスがじーっと見ていると、ルシが微笑んだ。

「そのクレープも美味しそうだね」

と言った唇が大きく開いて近づいてくる。

間近まで迫ったルシにドキッとしてルーファスは一歩下がる。パクッ。

ルーファスが食べかけだったクレープを一口。

顔を離したルシは、唇の端についたクリームをぺろりと舐め取って、ニツコリと微笑んだ。

「美味しいね」

瞳を丸くしてルーファスは地面に足を引きずりながらどンドン後退る。

ルーファスの脳内でエコーするフレーズ。

——関節キス、関節キス、関節キス、関節キス♪

「ひゃーん！」

不気味な声をあげて、顔を真っ赤にしたルーファスが逃げ出す。

「（もう耐えられない……居ても立っても居られない、穴があったら生き埋めになって死んでしまいたい）」

ズボッ！

忽然とルーファスの姿が消えた。

「いたたた……」

ルーファスが見上げる青空が広がっていた。

穴だ、工事通の穴に落ちたのだ。

どこからか声が聞こえる。

「オーライ、オーライ！」

なにかを誘導するかけ声だ。

穴の仲で立ち上がったルーファスは、壁に手を掛けた。

「（微妙に高い、登れるかな）すみませ〜ん、だれか……！？」

言葉を詰まらせて眼を剥いた瞬間、空から生コンクリートが振ってきた。

「ぎゃあああつ！」

埋もれるルーファス。

「死ぬ、死んじゃう！」

望みが叶ったじゃないかルーファス！

もう目も開けられない。口を開くともできない。ただ必死にもがきながら、手を高く地上へと伸した。

「つかまれ！」

だれかの声。

生コンからかろうじて出ていたルーファスの手をだれかがつかんだ。

ルーファスの腕が引っ張られるが、まったく持ち上がらない。

「大変だべ、だれか埋まっちよる」

「そりゃ大変だあ、早く引き上げてやらんと」

「現場監督に怒られちまう」

「んだんだ」

男たちの会話が終わり、ルーファスの身体が一気に持ち上げられた。

地上に放り出されたように生還したルーファスはドロ怪人と化しており、見るも無惨な有様だった。すぐに固まることはないだろうが、このままだと怪作の彫像ができあがってしまう。

急にルーファスの身体が浮いた。抱っこされた、お褒め様抱っこだ。

「シャワーを借りませんか？　そうですか……」

ルーファスは目が見えずその声と抱えられていることで状況を判断するしかなかった。

小刻みにルーファスの身体が揺れた。彼が走り出したようだ。

「学院まで戻ろう」

生コンにまみれながらも、相手の温もりが感じられた。肌からだけではなく、その声からもだ。

「(きつと僕を助けてくれたのは彼だ)」

その声でわかる。

生コンの仲から助けられ、汚れを落とすために学院に運ばれる。お姫様抱っこで、こんなにも身体を密着させながら。相手の身体も生コンで汚れてしまっているだろう。けれど、きつと彼はそんなことなど気にしてないだろう。

ただ、ルーファスのことを想ってくれているだけなのだ。

なんだかルーファスは胸が苦しくなった。嬉しさと言うより、

なんとも言えない辛さが込み上げてくる。切なさでもいうのだろうか……。

「（今まで女の子にだって、こんなに好かれたことないのに……彼は男だけだ……どうしよう、もし彼が僕が男だって知ったら……）」

決して相手を騙そうなんて思っただけではない。けれど言い出せない。はじめは女体化したなんて——という恥ずかしさで言い出せなかったが、今は別の意味で言い出せない。

「（どうしよう……）」

モヤモヤとしながら考えていると、どうやら学院まで着いてしまったらしい。

「この先は着いていけないけど、ひとりで大丈夫？ ゆっくり降ろすよ」

丁寧に廊下に降ろされたルーファスは、目をこすって薄目で当たりを確認した。

シャワールームの入り口だ——女子の。

「……………（ヤバイ）」

男子と女子のシャワールームは隣接すらしておらず、離れた場所に部屋事態があるため、ここから入って男女のシャワールームに分れてるなんてころはない。つまり、途中で男子のほうにコソツと入るなんてこともできない。

ここはまっすぐ行ったら、確実に女子のシャワールームに直行だった。

「（男子のシャワールームに……いや待てよ、男子のところにこ

の身体で入ったら……)」

絶対ムリ！

どっちのシャワールームもムリだった。つまり学院のシャワールームを使おうとした時点で詰んでいたのだ。

お姫様抱っこでモヤモヤ考えていたせいで、うっかり考えが及ばなかったのだ。

「(マズイ……マズイよコレ)」

「どうしたの、早く落としてこないと。俺もシャワーを……そうか、着替えがないな。ともだちの女の子に体操着借りてきてあげるから、それで我慢してくれる？」

「(よし、彼がどっかに行ってくれた隙に逃げよう!) はい、お願いします」

「あとでまたね」

ルシが笑って手を振りながら歩き去って行く。

チャンスが到来したルーファスは、ここぞとばかりに満面の笑みで手を振りながらルシを見送った。

「(よし、そのまま、そのまま消えてくださいお願いします)」

角を曲がってルシの姿が見えなくなった。

空かさずルーファスはダッシュでこの場を離れようとした。

床を蹴り上げ一歩出た瞬間、目の前に現われた影に驚いて転倒してしまった。

「いったあゝい」

声をあげたルーファスにワラワラと影が近づいてきた。

「だいじょうぶ？」

「うわっ、どうしたのその姿？」

「早く落とさないと！」

女子三人。

ルーファスの前に現われたのは女子三人組だった。

立ち上がって逃げようとしたルーファスが――壮大にコケた

っ！

ズルッ！

女子たちが驚いて小さな悲鳴をあげた。

「手を貸してあげるから、ほらっ」

腕をつかまれ脱衣所に連れ込まれる。

「えっ、あの……ちよつと（マズイ、非常にマズイ）」

あたふたするルーファス。あれよあれよという間に服まで逃がされはじめた。

「これってコンクリートじゃない？」

「えっ、うっそー。なんでこんな目にあつたの？」

「表面固まってきてない？」

口々にしゃべるので、だれがだれだかわからない。

生コンのついた帯が投げ捨てられ、魔導衣の襟がすつと肩から抜かれた。

「（いやっ）」

衣がはだけ豊満な胸が波打った。

脱がせた女子が瞳を丸くして一瞬だけ固まった。

「（デカイ……しかもノーブラ）」

そのまま衣は下半身まで脱がされようとしていた。

ルーファスは自分の裸体を直視できず、瞳を固く閉じた。自分の身体であって自分の身体ではない。見ず知らずの女性の身体と言ってもいいくらいだ。

「(恥ずかしい、恥ずかしいよお)」

見ず知らずの女子に、服を一枚一枚脱がされ、しかも絶賛女性化中。

ここでハッと気づいた。下半身はダメだ、このまま下半身まで脱がされたら——トランクスをはいている！

相手はルーファスが本当は男だつてことを知らない。トランクスをはいているなんて知られたら、変態だと思われる。

大変だ！

ルーファスは相手の手を必死に押さえた。

「自分で脱げます、大丈夫ですから、もうホントに……ゆるして」

相手の顔がきよとんとなった。

——許して？

言葉の意味なんて理解できるわけがない。

「ん……ごめんね」

とりあえず相手の子は謝った。

そこへともだちが声をかけてくる。

「先入ってるよ！」

と、声に反応してルーファスがそつちに顔を向けると——ポ
ン！

すっぽんぽん！

あまりにも無謀な乳房が四つ。すでに服を脱いでいた二人の女子が立っていた。かろうじて、ひとりにはタオルで下半身を隠し、もうひとりは前に立つ子が影になって花園は見えなかったが、あの山はしかと見た！

聳え立つ連山がそこにはあった。

とは言っても、ルーファスはすぐさま首が折れる勢いで顔を背け、ぶっちゃけほとんど見えてない。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

脇目も振らず駆けて逃げるルーファスが飛び込んだ先はシャワールーム！

個室から出てきたポインと鉢合わせ！

ブハッ！

鼻血のシャワーを流しながらルーファスが後頭部から倒れた。意識が遠くなりかけて視界がぼやけて中で、ルーファスはシャワールームに飛び込んできたピンクのツイントールを見た。

「ルーちゃんの変態！」

そして、ルーファスは気を失った。

《四》

暗闇が白く明けていく。

白い天井だ。

目を覚ましたルーファスは辺りを見渡した。

清潔感あふれる白いシーツのベッドと仕切りのカーテン。

「(……医務室か)」

腹痛などで日頃からお世話になっている学院の保健室だった。

天井を見つめていた視界の中に、ヌツと男の顔が現われルーファスは悲鳴をあげる。

「ぎゃっ!？」

「具合はどうかねルーファス君？」

蒼白い顔に黒衣姿の男はこの大病院の医院長ディーだった。

「……ここクラウス魔導学院ですよね？」

当然の質問だった。

「そうだがなにか？」

「いや……どうしてここに?！」

「ルーファス君が倒れたと聞けば、灼熱の太陽が降り注ぐアウロの庭砂漠にでも馳せ参ずる」

「(こなくていいし)でもここにいるなんて都合よすぎですよ?！」

「ふむ、魔導衣学の講義をして欲しいと言われてね。今日は打ち合わせで来ていたのだよ。そんな折、ルーファス君が倒れたと聞いてね。まさに運命の巡り合わせとでもいうべきか」

「(迷惑な運命だなあ)」

ふとルーファスは気づいた。身体の汚れが綺麗さっぱり落とされ、アイロン掛けをされた自分の魔導衣を着せられていた。

「あの……シャワーと着替えはだれが？（イヤな予感）」

「私は悲しい！」

突然、ディーが声を張り上げルーファスはビクツとした。

「な、なんですか？（こんなに声を張り上げたのはじめて見た）」

「そのおぞましい身体はいったい何事だ」

ワシのような手が果実のような胸に伸びてきた。

むにゅつ。

「ひゃん」

「その甲高い声も耳障りだ。嗚呼、なんたることだ、ルーファス君にいったいなにが起きたというのだ。こんな肉塊などもぎ取ってくれる！」

「ひゃつ、あううう、あふん……ちよつと……やめて……」

鬼のような形相のディーに胸を揉みくちやにされ、吐息を漏らしながらルーファスが身悶える。

揉み方もだんだんと激しくなり、柔肉に詰めを食い込ませて、本当にもぎ取ろうとしているようだった。

「邪悪な肉体よ、滅したまえ！」

「イタツ、タタタタタツ、もういい加減にしてくだ……ひぐつ」

と、こんなあられもないシーンのところへ、保健室のドアが開いてピンクのツインテールが飛び込んできた。

「ルーちゃ〜ん！」

「はああああん！」

甲高いルーファスの声が木霊した。

一瞬に凍りつくビビ。

「……へ……ルーちゃんの……変態っ！」

力一杯叫ぶとビビは部屋を飛び出して行った。

「ちよっ……違うんだビビッ！」

ルーファスが声をかけるが、そこにビビの姿はもうない。

そこへビビと入れ替わりでルシがやってきた。

「倒れたって聞いたけど……なにやってるんだおまえ！」

黒衣の変態が巨乳っ娘を襲っている構図。

理由も聞かずにルシはデイーに飛びかかっていた。

「彼女から離れろ！」

「邪魔しないでくれたまえ」

デイーは注射器をどこからともなく取り出し、まるでダーツのように投げた。

ビュン！

注射器の針がルシの首元をかすめ、後ろの壁に突き刺さった。

すかさずデイーは次の注射器を投げようとしている。ルシも反撃しようと警棒のようなロッドを構えた。

バトル展開が繰り広げられる中、デイーの魔の手から解放されたルーファスは、息を殺して部屋からこっそり抜け出そうとしていた。

「（もうやだ……こんなことに巻き込まれてないで、早く男に戻らなくちゃ）」

そもそも、ジュースを買いに——ではなくって、パラケルス

スを探そうとしていたのだ。

どうにか保健室から抜け出して、廊下を見渡すとそこに山吹色の後ろ姿を発見した。今日の講義でパラケルススがあんな魔導衣を着ていた。

「パラケルスス先生！」

声をあげた瞬間、バトルをしていた二人がピタッと動きを止め、示し合わせたようにルーファスを射貫くように見た。

逃げようとしているのがバレた。

ここで立ち止まってはイケナイ！

猛ダッシュで逃げるルーファス。

豊満な胸が交互に激しく揺れる。

「パラケルスス先生！」

ガシッ！

伸した手で相手の肩を後ろから掴んだ。

そして、振り返ったパラケル……スス？

「じゃない！」

悲鳴に似た声を荒げてルーファスは目を丸くした。

ガシッ、ガシッ！

ルーファスの両肩が何者かによってつかまれた。

苦い顔をしてルーファスは左右を確認する。もちろんそこにはいたのはルシとデイーだ。しかもこの場には部外者の知らないオッサンまで。

ルーファスにつかまれたオッサンは不思議そうな顔で立ち尽くしている。

「どうかしましたか？」

「（人違いですって言ったほうがいいよね……）ひ、ひとさらいです、この人たち！」

「はい？」

「このふたり、あたしのこと誘拐しようとしている変態なんです！」

まさかの発言に左右の二人は啞然として、ルーファスをつかんでいた手からすつと力が抜けた。

今がチャンスだ！

「ミスト！」

呪文を唱えたルーファスの周りに霧が発生して、この場の視界を覆い隠した。

ゴン！

壁になにかを強打する音。

「いったーい！」

可愛らしい悲鳴。もちろんルーファスだ、

ディーが黒衣でマントのように霧を払うと、瞬く間に視界が晴れた。

そして、床で尻餅をついて倒れているルーファスの姿があった。

自分で出した霧で視界が見えずに壁に激突。

狼のような瞳で二人の男が乙女（ルーファス）にじわじわと近づいてくる。

「（喰われるっ！）」

背筋が一瞬で凍りつく恐怖を感じたルーファスは腰が砕け立ち上がれない。

「大丈夫かルーファス！」

突然現われた影がルーファスを搔つ攫って、お姫様抱っこをしながら駆け出した。

見上げるとルーファスの瞳に映し出された白馬の王子様の顔。キラキラと輝くその顔は、王子様ではなく王様だった。

後ろから男二人が追ってくる。

「ルーファス君は私のモノだ！」

「彼女をどこに連れて行くつもりだ！」

クラウドは振り向きもせず走っている。その懸命な顔つきにルーファスはドキドキした。

古い友人だったが、こんなに間近で、今までと違う印象を受ける。

「(クラウドって……やっぱり王様なんだ)」

気高く気品のあふれる丹精な顔。

ルーファスを抱いていたクラウドの手と腕に力が入る。

ぎゅっとしたそのとき、ルーファスの胸もぎゅっとされてキユンとした。

後ろからまだ二人が追ってきている。

クラウドがつぶやく。

「やむを得ないか……」

いったい何をするつもりなのか？

「テレポート！」

その魔導は超高等であり、ライラよりも難しいとされ、この魔導都市アステアでも扱える者は確認されているだけでも二人。クラウド魔導学院の学院長であるクロウリー、そしてアステア王であるクラウドだ。

テレポートとはすなわち瞬間移動。これと似たものに召喚術というものがあるが、あれとは原理が異なり、テレポートのほうが高位であり危険も伴う。

クラウドも実用レベルで使用が可能だが、準備もなしに使うものではない。失敗すると、よくて死。最悪の場合は……。

テレポートは厳密に言えば、場所から直接別の場所に移動するのではなく、〈魔の道〉と呼ばれる場所を通過する。通常は記憶にも残らないほどの時間で通り抜けることができ、目的地に辿り着くことができる。

ルーファスとクラウドのテレポートも無事に移動でき、それは一瞬の出来事だった。ちなみに、複数でのテレポートは難易度と危険度が上がる。

その場にテレポートしてきた二人が全身で跳ねた。下から突き上げるふわふわのスプリング。

「きゃふ」

声をあげたルーファスはクラウドの上で抱き締められた。

ベッドの上で！

「大丈夫かい？」

クラウドが甘く囁いたような気がする。

ベッドの上で！

「いったいここはどこなのか？」

「うちのベッドより高級そうだ」

「すまない、急だったので私の寝室に飛んでしまった」

レポートは知らない場所への移動は、なんらかの補助がない限りは不可能に近く、逆に思い入れが深い場合やよく行く場所が飛びやすい。

が、今のルーファスは脳内桃色レポリユーションなので、なぜここにとこの問いがあらぬ方向の解答を導き出す。

「(ベッドルームに連れ込むなんて、しかもクラウスのプライベートな神聖な領域。そんなところに連れ込んでなにをするつもりなの?!)」

「(いつも限界まで職務をこなして倒れるように眠ってしまったかな。緊急時に意識が朦朧としても、この場に飛べように訓練していたからだ)」

まだふたりは抱き合ってたままだった。

ベッドの上で！

クラウスの両手がルーファスの背中を軽く押さえている。

「(いやん、クラウスったら奥手なんだから。もっとギュッと、ギュッと抱き締めて離さないでえええん！)」

キモイ。

声に出さないだけマシだが、表情にはすでに歓喜と苦痛の狭間で身悶えてます的な表情で、キモイ。

辛抱堪らずルーファスからギュッと抱きしめた。胸部による窒息法——またの名をポインスープレックス。

「や、やめろッ！」

声を荒げたクラウスがルーファスを突き飛ばした。

瞬時にクラウスは後退り、部屋の間隙に背中を押しつけた。その表情は蒼白く汗を大量に流していた。

涙ぐむルーファス。

「ひどいわクラウス、ぐすん」

口語まで女性化していた。

ゆっくり近づいてくるルーファスにクラウスは明らかに怯えている。その視線は胸に向けられていた。

「来るなルーファス！ ダメだ、絶対に僕のことを抱き締めた
りするなよ！ 絶対だぞ！」

「私のが嫌いなのか？」

「苦手なんだ」

がくん！

ルーファスシヨック！

シヨックのあまり猪突猛進。

両手を広げてクラウスに飛びかかった。

「クラウスうっうっ！」

「ぎゃあああああっ！」

ボインアタック！

クラウスの顔面が縛乳に埋もれた。

「ふぐっ……やめろ……（苦しい……もう意識が……）」

ルーファスの胸の谷間でクラウスからふっと力が抜けた。

気絶したのだ。

「ク、クラウス!? どうしたのクラウス!」

とりあえず気絶したクラウスをベッドに寝かせた。

「(どうしよう……?)」

様子をうかがいながら、視線は自然と唇へと向けられていた。瑞々しい高貴な薔薇のような唇。

——人工呼吸!

「(ダメよ、そんな……緊急事態とはいえ、唇を奪うなんて……

…嗚呼、でもこの想いが止められない!)」

早まるなルーファス……!

顔と顔が重なりそうな距離まで近づいた。

ガチャ。

突然、ドアの開く音がして声飛び込んできた。

「今日もクラウス様のお部屋を……ッ!?」

三〇代くらいの侍女らしき者が部屋に入ってきた。手には掃除道具のぞうきんの掛かったバケツとホウキを持っている。

口と瞳を丸くしてルーファスは啞然としながら侍女と目を合
わせた。

言葉が出ない。

侍女はホウキの柄をビシッとルーファスに向けた。

「どなたですか!」

「あ……いえ……そのクラウスの友達です」

男女がベッドにいる状況。明らかにただの友達という感じではない。しかもじつは両方男っていう。

侍女は深く頷いた。

「クラウド様がわたくし以外の女人をご自分の部屋に招くなんて……ついにクラウド様も大人の階段を！ 嗚呼、今日はなんとおめでたい日なのでしょうか！」

なんかズレたひとだ。見知らぬひとが王様の寝室にいたら、もつと大問題になるだろう。

ルーファスはそつとクラウドの身体から離れた。

「あのお、抱き締めたらクラウドが気を失ってしまったんですけど？」

「まあ、本当に!? クラウド様、大丈夫でございますか！」
クラウドが気絶していることにやっと気づいたようだ。

侍女は豊満な胸を揺らしながらクラウドに近づき、その上半身をベッドから起き上がらせて抱き締めた。

「クラウド様、クラウド様、起きてくださいまし！」

「う、うう……」
小さくうめいたクラウドは静かに瞳を開き、侍女の胸の中にあることに気づいて、恐怖で顔を引きつらせながら飛び上がった。

「モレナ！」

「嗚呼、クラウド様、お気づきになられたのですね。わたくし嬉しくて……」

モレナは両手を広げクラウドに近づく。

「近づくな、その胸で！（やむを得ない）テレポート！」

「待つてクラウド！」

声をあげてルーファスは慌ててクラウドの袖を掴んだ。

一瞬のうちに二人がやってきたのはクラウス魔導学院の正門だった。

クラウスは汗をぐっしよりとかいて息を切らせている。

「危なかった」

「だいじょうぶクラウス？」

「君には打ち明けるよ、だから秘密の話にして欲しい」

「(えっ、ふたりだけのヒミツ？ きゃは♪)」

脳内桃色。

「じつは胸の大きな女性に抱きつかれるのが苦手なんだ」

「そ、そんな… (なんて残酷な運命なの、こんな胸、こんな胸なんてなくなってしまうばいのに！)」

ルーファスはクラウスに背を向けて自分の胸をもぎ取ろうとした。

沈痛な面持ちなクラウスはルーファスに構わず話を続ける。

「幼いころのトラウマがあって…：さきほどのモレナは僕の乳母だったんだが、何度もあの胸で窒息死させられそうになって…：見る分にはどうにか恐怖に打ち勝てるんだが、抱き締められて顔に胸を当てられると…：」

窒息でもすんじゃないかってほどクラウスは蒼い顔をした。

ルーファスは瞳をうるませた。

「そうだったの…：なんてかわいそうなクラウスなの！ だいじょうぶ、私の胸で弥してあげる！」

癒えねえーよ！

ルーファスが爆乳を揺らして飛びかかってくる。

苦しげ表情のクラウス。

「(テレポートで逃げる余力もない) ライトニング！」

激しい閃光を放って目眩みだ。

目を固く閉じて怯んだルーファス。逃げる足音が聞こえる。

目を開けられるようになったとき、もうクラウスは三〇メートル

ート(三六メートル)は離れた位置で背を向け走っていた。

「待ってクラウス！ 私を置いてどこに行く気なの！ クイツ

ク！」

猛ダッシュでルーファスが追いかける。

学院内の廊下を駆け抜ける。

途中の廊下で左右を見渡しながらかにかを捜しているようす

のルシとすれ違った。クラウスは気づいたようだが、ルーファ

スはクラウスに夢中で気づいてない。

「待って！」

ルシが声をかけたが二人は見向きもせず駆け抜けていった。

さらに途中の廊下に巨漢が立っていた。

「見つけたぞルーファス！！」

カーシャだった。ついに痺れを切らせて教室を出たらしい。

でもルーファスの目には入らなかった。

さらに途中の廊下でビビと遭遇。

「ルーちゃん捜したん……だ……待ってよ！」

やっぱり目に入らず駆け抜けていく。

そんなことをしているうちに奇妙な行列が廊下を駆け抜ける

という光景になった。

王様を追いかける女体化メガネっ子を追いかけるメガネ男子ルシ。さらにルーファスを追ってくる筋肉魔神とピンクのツインテール。混沌としている。

「クラウス待って！ 私の愛を受け止めてえ〜！」
もうルーファスは帰ってこれられない。

「妾の筋肉を見よオオオオッ！」

こっちは常人が達しない場所にイッてしまった。
ルーファスは揺れる胸を苦しげに押さえた。

「(重たくて走れない……でも負けられない!)」

いったいおまえはなにと戦ってるんだ？

速度を落としたルーファスにルシが距離を縮めてくる。

「捕まえた！」

ルシの手がルーファスの袖を掴んだ。

「俺は君のことが好きなんだ、だから逃げないでくれ！」

そこへどこからともなくふあふあつと空色ドレスが現われた。

そして、無言で持っていたバケツの中身をぶちまけたのだ。

バシヤアアッ！

緑色のドロドロヘドロのような液体を頭から被ったルーファス。と、そのついでに被害者になったルシ。

「いきなりなにをするんだ！」

声をあげたルシは、すぐさまルーファスを気遣った。

「大丈夫だったかい？ また汚れてしまったね」

指先で優しくルーファスの顔についたヘドロを拭いていたときだった。

異変だ。

ルシは微妙な異変に気づいた。

「(ん……顔つきが……)」

顔から丸みがなくなり、骨格が浮き出ていく。

大きく服を突き上げていた胸の膨らみも萎んでいく。

「ローゼンクロイツひどいじゃないか！」

と張り上げた声も低めで男らしかった。

——男だ。

ルーファスは男に戻っていた。

目の前で起きた出来事にルシは放心状態だった。

「ウツ……だろ……」

ローゼンクロイツはもう片手に持っていたバケツの中身を筋肉バカにぶちまけた。

バシャアアアツ！

「妾の筋肉を……ハッ、妾はいつたい？」

女に戻った瞬間、正気に返ったようだ。

ニッコリのビビちゃん。

「よかったねルーちゃん男に戻れて！」

「そ、そうだね……」

苦い顔をしてルーファスは小さく答えた。

壁に片手をついて憔悴しているクラウス。

廊下に両手両膝をついて項垂れるルシ。

事件の傷は深かった。

そして——。

「妾のイチゴジュースはまだか！」

「あ、アタシのもの」

パシリにされるルーファス。身体も元に戻り、すぐに日常も戻ってきた。

「（女の子のほうが優しくされる気がする）」

心に思うルーファスの視線の先には、空色ドレスの男の子がマイペースに歩いていた。

第一八話「トランスラヴ おしまい

第一九話 首ちょんぱにつく

《一》

床や棚に並べられた品々は、アンティーク屋の倉庫を思わせるが、ここはクラウス魔導学院のとある倉庫だ。

アンティークというのはあながち間違いではなく、ここには古い時代の魔導具も多く眠っている。ちょうどルーファスが棚にしまおうとしているランプは、今から三〇〇年ほど前にアラジンという召喚士「サマナー」が召喚に使用していたとされる魔導具だ。

足下に何気なく転がっている壺も蠱毒と言って呪殺の怨念を練り込むのに使用する物だ。

「ねえねえルーちゃん、見てみて！」

ルーファスの背後からビビの声がした。

振り返ると小さな箱を開けて、中身をこっちに見せているビビの姿。箱の中身はキラキラと輝く宝石が美しい指輪だった。

「ダメだよ勝手に開けちゃ！」

「いいじゃん、ちよつとつけてみよおつと」

真紅の宝石が妖しくきらめく。

「ダメだって、呪われてるかもしれないし！」

「えっ？」

もう指先にリングが通る寸前だった。

慌ててルーファスはビビの手をつかむ！

ドン！

ルーファスがビビを押し倒す形になり、ビビの手から指輪が放り出された。

ピューンつと飛んだ指輪がコロコロつと床を転がる。

そして、整理されていない魔導具の山の中に入ってしまった。

「もお、ルーちゃんが押すからだよお！」

「はいはい、すぐに探しますよ（呪われてたら大変なことになってたのに、なんで僕が悪いみたいな）」

いい加減な返事をしてルーファスは魔導具の山を覗き込んだ。粗大ゴミ置き場状態の隙間の奥のほくくつの床に、真紅の輝きが見えた。

しゃがみ込んだルーファスは隙間に片腕を差し込んで、ググツと懸命に伸した。

「届かない……たぶんあとちょっとで届きそう……なんだけど……」

腕に力が入ってプルプルと震える。

「ルーちゃんガンバレっ！」

「ビビのほうが身体小さいし届くんじゃ？」

「アタシよりルーちゃんのほうが腕長いからイケるよ！ ほら、がんばって！」

「がんばってるよ……ん、指先に当たった……あと……ちょ……っと」

さらに奥へと腕を入れようと、瓦礫の山を身体ごとグッと押し込んだとき、微かにガタツと物音がした。

「リングに指先が入ったからこのまま……」

そのときだった！

ガタガタツ、ゴゴゴゴゴゴツ！

瓦礫の山が崩れたのだ。

「ルーちゃん！」

積もっていたホコリが部屋中に舞って視界を覆い隠す。

しばらくして、ホコリの中で長身のシルエットが立ち上がった。

「ゲホツ、ゲホツ……あつたよ、指輪」

「ルーちゃんだいじょうぶ!？」

「どうにか。でもホコリが目に入って、目が開けられない」

やがてホコリの煙幕も晴れてきた。

そして、事件は起きた。

「きゃーっ！」

音量たつぷりの悲鳴をあげたビビ。その表情は凍りつき、見開かれた視線の先にあるモノを、震える腕をゆっくりと上げて指差した。

「る、るーちゃん……く、くび」

「どうかした？」

「くびが……」

「(まだめがしよぼしよぼする) あれ?」

瞳を開けたルーファスはきよんとした。

床が直角に立っている。

顔が横になっているのだ。

しかし、ルーファスの足の裏はしっかりと床について立っている。

再びビビが叫ぶ。

「首がない！」

「ええええええええええっ！！」

ゴロンと転がったルーファスの頭部が叫んだ。

その傍らには首から下が立っていて、あたふたしたようすで足踏みをしている。

いったいなにが起きたのか？

「ルーちゃんとかく首、首拾わないと！」

「え、どこ、ここどこ？」

あわてふためくルーファスは突然走り出し、その勢いで壁に激突した。

ドン！

「イタっ！」

身体とは離れた場所から声が出た。

「僕の頭！ どこ、ここどこ？」

身体がどこにいるのかもよくわからない。

切り離された頭部と身体は意識が繋がっているらしいが、見えている景色と身体の関係

が合っていないので、思うように身体が移動してくれない。

「うまく拾えないよ！」

あさつての方向でどじょうすくいのような動きをするルーファス。

「ぜんぜん拾えないから代わりに拾ってよ」

「ヤダよ、ちよっと（気持ち悪い）」

生首だ。しかも生きている。

ふらふらしていたルーファスの身体が、なにかにつまづいた。「おっと！」

すぐに足下を見たが、そこには足がなかった。慌てて自分の身体を泳ぐ視線で探し、床に落ちていた長い物体を見つけた。

剣だ。

錆びて今にも朽ち果てそうな長剣だった。その刃にこびりついたどす黒い痕。血だ、剣が吸った血だった。

まさかこれで首を落とされたのか？

しかし、こびりついている血は古そうだ。そもそも、ルーファスは一滴も血を流していない。首の断面図はまるで異空間に繋がるような深淵が広がっている。通常に切り口ではないことは明らかだ。

どうにかやっと自分の首を拾って、両手で頭を持ちながら、床の剣をまじまじと見た。

「鞘がないけど……どっかに落ちてない？」

「あったよ、これでしょ？（なんかラベルがついてる）ドゥー、ドラ？ ドラハンの剣？」

「読めてないでしょ。ちよっと見せて？」

ビビは鞘のラベルをルーファスの胸の位置——両手で抱えて

いる頭部の前に出した。

文字は公用語ではなく、魔導文字の一種だ。ここで管理されている物はこの文字でラベルなどがついている。

「なにになに……ドウラハンの剣？」

その名に聞き覚えがあった。

自分の頭を抱えながら考え込むルーファス。うーんという声が腹のあたりからする。

今日も似たような言葉を聞いた気がする。いったい、いつどこで、だれが？

たしかあれは倉庫の整理をファウストに頼まれたときだ。そこに運悪くカーシヤがやってきて、いつもどおり二人は学院内でケンカをはじめた。毎度のことなので、ルーファスはそつとその場を離れようとしたのだが、カーシヤの放った氷結魔法のツララが飛んできて、すかさずルーファスがしゃがんで避けた直後だった。

——ドウラハンの盾！

そう叫んだ。ファウストだ、ファウストがツララをガードするために唱えた防御魔法だった。

「ファウスト先生ならなにか知ってるかも」

ルーファスはつぶやいた。

ファウストはファウストは召喚士として名高いが、学院では魔導具の授業を過去に受け持っていた。なぜなら彼が魔導具マニアだからだ。ちなみに過去に——というのは、彼があまりにマニア過ぎるので、授業が予定通りに進まないことが多く、魔

導具学講師をハズされたからだ。

ドゥラハンというキーワード、魔導具マニア、ここの整理を頼んだ本人、となればファウストのところに行かないほかはない。

ビビが大きくなずいた。

「うん、だったらセンセーのところにレッツゴー！」

と明るく元気なビビちゃんだが、傍らのルーファスはどんよりと重い空気を背負って暗い顔だ。

「この姿で人前に出たくないんだけど」

「あ、そうか、キモイもんねっ！」

グサッ！

まるで心臓に杭を打つような一言。

「キモイって……なりたくてなったわけじゃないんだけど（鏡がないから自分の姿見えないけど、そんなにキモイのかな？）」

落ち込むルーファス。

「ルーちゃんごめんね、ぜんぜんキモくないよ、むしろ怖いっていうか、うゝん、ほら、そんな姿で人前に出たらみんなビツクリしちゃうよねっ！もしかしたらモンスターと間違えられた攻撃されちゃうかもっ」

「ぜんぜんフォローになってないし」

「でもだいじょうぶだよっ、仮装行列ってことにすれば！」

「たしかに……こういう手品みたことあるけど（それにきのうよりはマシかな）」

女体化事件の記憶は新しい。アレに比べたら、首がちよっとハズレちゃってるくらい——問題大アリだ。

「やっぱりムリ。ビビがファウスト先生呼んできてよ」

「えーっ、めんどくさーい」

めんどくさい、めんどくさい、めんどくさい。

ルーファスの脳裏で木霊した。

自分のピンチを『めんどくさい』の一言で片付けられてしまった。

シヨックで背中を丸め落ち込んでいたルーファスだったが、なにやら思い付いたようすで顔を上げた。正確には頭を持って腕を上げた。

「そうだ、こうやってさ、腰を曲げると老人みたいで後ろからだど、頭が見えなくても不自然じゃないっぽくない？」

まるで世紀の大発見でもしたかのような弾んだ声。

だが、ビビの反応はひやかだった。

「でも正面から見たら意味ないじゃん？」

無言のまま見つめ合う二人。まるで時間が凍りついたようだ。

………。

「ですよねーっ！」

堰を切ったようにルーファスが声をあげた。

このノリのままビビが話始める。

「ところでさー、ちよっと聞きづらかったんだけど、聞いてもいいよねっ！」

「どうぞどうぞ、どんどん聞いちゃってよ！」

「じゃあ聞いちゃうけどさ！」

と、ここまで変なテンションのノリで軽快に会話が進んでいたのだが、急にビビの顔に影が差したようなどんよりした表情で、ずくと重々しく口を開いた。

「どうしてずっと剣を振り回してるの？」

「えっ？」

「しかもどんだん大振りになってるんだけど……（怖い）」

「……え？（剣を……僕が？）」

ルーファスは片手で持っていた頭部をもう反対側の手に向けた。

ブンブンブンブン！

ドラマーかっ！

てな勢いで、片手がブンブン叩くように振られていた。しかも、その手にはしっかりと剣が握られている。そう、血塗られたドウラハンの剣だ。

「ええーっ！ いつの間に!？」

自分でもビックリだ。

まったくの無意識。

ブンブンしちゃってる意識もなかったが、剣を拾った記憶すらなかった。

「え、なに、どういうことっ!？」

目を丸くしながら、助けを求めてルーファスがビビに近づく。

「やだっ、こっちこないで！」

「逃げないで助けてよ！」

「ブンブン来ないで！」

「止まんないんだって！」

ブンブンブンブン！

自分の生首を抱えた男が、剣をブンブンさせながら、いたいけな少女を追いかけ回す図。

もう完全にB級ホラーだった。

「きゃーっ！」

ピンクのフリフリツインテールが倉庫を飛び出した。

「待ってよ！」

ブンブンがあとを追う。

逃げるフリフリ、追うブンブン。

学院をブンブン、フリフリ駆け回る。

ブンブン、フリフリ、ブンブン、フリフリ。

はいっ、みなさんもごいっしょに、ブンブン、フリフリ、ブンブン、フリフリ。

ブンブン、フリフリ、ブンブン、フリフリ！

ブンブン、フリフリ、ブンブン、フリフリ！

ブンブンブンブン、フリフリリン！

「キャーッ！」

どこまでも続くかに思われたブンブンフリフリだったが、突然の乙女の悲鳴で終止符が打たれた。

ピタッと立ち止まったルーファス。

辺りを見回すと人ばかりができていた。

放課後に残っていた学生たちについての間にか囲まれていた。

「モンスターだ！」

だれかが声をあげた。

声の主を必死に探しながら、手で持った首であちこち見渡す。「違うんです、私はこの四年トラス組のルーファス・アルハザードです！」

口では誤解を解こうとしているが、行動が伴っていない。ブンブンブン、ブンブン！

血塗られた魔剣を振り回し、今にも大量虐殺しそうな勢いだ。

「人殺し！」

だれかが叫んだ。

「だれか先生を呼んで来い！」

「みんなで退治しちゃおうぜ！」

口々に恐ろしいことを言い出す。ルーファスはゾツとした。

「(マズイ、完全に誤解されてる)」

ビュン！

風を切って光球が飛んできた。明らかに攻撃魔法だ。

「ぎゃっ！」

短く悲鳴をあげてルーファスは避けた。が、その拍子に生首が投げ出される。

ゴロン！

「イタッ、イタタ、痛い！」

顔面から床にダイブするようなもんだ。かなり痛い。

床に生首が転がるようすを見た生徒たちは、さらに怯え、中には敵対心を強める者もいた。

「くらえっ！」

炎の玉がルーファスの生首に向かって飛んできた。室内で攻撃魔法をぶっ放すなんて。明らかに悪い教師たちの影響だ。本来は校則で禁止されている。

生首には手足がないので炎の玉を避ける術がない。慌てて身体が拾いに走るが、明後日の方向に駆け出して壁に激突。

「うぎゃー！」

もう眼前まで炎が迫っていた。

「ルーちゃん危ない！」

ビビが叫びながら生首に駆け寄った。

そして、生首をシュート！

サッカー選手も顔負けのナイスシュートを放った。

「グギャゲエエエエッ！」

この世のものとは思えない絶叫をあげて生首がぶっ飛ぶ。

ボールーじゃなかった、生首の軌道を見事に描く鼻血。

そして、顔面から壁に激突。

「ブゲッ」

潰れながら床にゴトンと落ちた。

白眼を向いて鼻血を垂れ流す生首。

もう悲惨すぎる。

ビビが苦笑いをしている。

「ヤバッ……（殺っちゃったかも）」

ビビちゃんはずんぜん悪くない！

ルーファスを助けようとしただけ！

ちよつと方法が過激だっただけ！

首から下の胴体も死んだか気絶したのか、床に倒れたままビクリともしない。

苦笑いのままビビも動かない。

そこへ再び炎の玉が飛んできた。投げやがったのは同じ野郎だ。

もう今度こそ絶体絶命だ！

「ドゥラハンの盾！」

長身の影が生首の前に立ちほだかり、防御魔法で炎を防いだ。いったいこの影はだれだっ！

わかりきってますが。

《二》

ファウストだ！

「何事だ？（見たところルーファスだが……）」
ルーファスだが生首だ。

明後日の方向には胴体が倒れている。

「見世物は終わりだ」

ファウストは片腕で半円を描くように振って生徒たちを追い払う。相手がファウストということもあり、生徒は早々に散り散りに去って行く。

残されたのは二分割されているルーファスとビビ。

ファウストがビビに顔を向けるとエヘッと笑いかけてきた。

「説明したまえ」

「首ちよんばです！」

「首ちよんば……だと？（そんなことは見ればわかる）私が聞きたいのは、どうして首と胴が離れているかだ。切り口を見たところ通常ではなく、しかも生きているようだ」

ファウストは臆することなく平然と生首を拾い上げ、首から脈を測って生存を確かめた。

ほっと溜息を吐いたジビ。

「（よかった、殺つてなかった）えーつと、その剣で切られたみたいで、ちょうどファウスト先生のところに相談に行こうとしてたとこなんです」

と、血塗られた剣を指差した。

どうやらルーファスは気絶しているらしいのだが、ブンブンしたままだ。

やはり、剣は勝手に動いているらしい。

「（まったく、サボつてないか見に行くつもりが、もっと大きな問題を起こして）この剣は倉庫にあったものか？」

「はい、ド……ドラ……ドラドラの剣？」

「ドウラハンの剣だな」

すぐに訂正された。

ファウストは辺りを見回してなにかを探しているようだ。

「鞘はどこだ？」

「えっ……たしか倉庫に……」

「どうして抜いたのだ？」

「抜いたってどうか、ガレキの山が崩れて……気づいたら首ちよんぱっていか」

「瓦礫の山だと？」

「はい、ゴミみたいな塊が……（ヤバッ）」

言いかけて口を両手で塞いだ。

相手を殺しそうな勢いでファウストがガンを飛ばしている。

「……ゴミ？」

「違います！ スゴイ、スゴイ……え〜と価値のある魔導具様のガレキ……じゃなくて宝の山が！」

「もういい。つまりルーファスがいつもどおりハマをしたということなのだ（問題は……）」

考えながらファウストは生首をビビに差し出した。

「これを運びたまえ」

「え……（キモイ）」

鼻血を垂れ流して白眼まで剥いている。キモさアップ！

「私は胴体を運ぶ」

「え……ちよつと……」

嫌がりながらも渡されてしまったので、仕方なくビビは生首を両手で持った。本当にイヤなので、両腕をめいっばい前へ伸して首を遠ざけている。

血だらけ（鼻血）の生首を抱えてるなんて、明らかに殺ちゃった狂人にしか見えない。しかも、ビビは大鎌を装備として使用することもあるので、それを見たことがある者はずいぶん殺つたかと思うだろう。

ファウストは胴を背負って先を歩き出していた。

「保健室に運ぶぞ」

「は、はい！」

放課後でも生徒は多く残っており、胴体を運ぶ大男と血だらけの生首を運ぶ少女は奇異な目で見られた。二人が通り過ぎたあとにみなヒソヒソ話をはじめた。

「いくらファウスト先生でも人殺しはしないとってたのに」

「それにしても人殺してるのに堂々としすぎだよな」

「後ろの子は生首だぞ、しかも血だらけ」

そんな会話などがなされていた。

ひとよりちょっと耳のいいビビは、会話が漏れ聞こえてくると、ズキズキと胸が痛んだ。

「(注目されるのスキだけど、これはイヤ)」

しかも、通った道に血痕(鼻血)が残っている。

保健室の前までやってくると、ドアが自動的に開いた。

中に入るとだれもない。ビビはほっと溜息をついて安堵の表情を浮かべた。

ルーファスの胴体はベッドに寝かされ、頭部はその傍らに置かれた。

生首は顔面血だらけでおぞましいことになっている。

「うん、洗ってあげよう！」

ビビは生首を持って、室内に設けられた水道に向かった。

近くの戸棚にはガーゼなどが置いてある。明らかに目につく位置にある。ビビの目にも映ったはずだ。

が、生首は蛇口の真下に位置された。

ファウストは止めずに生温かい視線で見守っている。

「まさかな……」

と思った瞬間、なんとビビが蛇口をひねった。

バジャジャジャジャッ！

傾斜角九〇度の滝のごとし放水！

雑だ、洗い方が雑だ。てゅーか水攻めの拷問だ。

ルーファスがカツと眼を開いた。

「ひゃああああっ、な、ぶへっ！」

口から水をぶへっと拭きだした。

「ルーちゃんじつとしてて」

「ごぶっ、おほれる……鼻と口に水が……」

陸上でおほれるルーファス。

三途の川が見えそうになっていたところで水は止められた。

蛇口のコックには浅黒い手が添えられていた。

「本当に死ぬぞ」

「首ちよんばでも死なないんだからへーきへーき♪」

無邪気にビビは笑っていた。

「死ぬし！ ファウスト先生ありがとうございました」

ビビに向かって声を荒げ、救世主に向かってお礼を言った。

明後日の方向に顔を向けながら

血は洗い流せたが、びしょびしょだ。頭髮が思う存分水を吸

っている。

ビビはじーっとルーファスの後頭部から長く伸びている髪を

見た。そして、何気ない顔をしてキュツとつかんだ。

「遠心力で水が飛ぶかも」

「頭が飛ぶし！ その考え絶対危険だからね！ オリンピックにこんな競技あるけど違うから！」

ルーファスは早口で声を荒げた。

はじめのうちは怖いだとかキモイだとかで生首をイヤがっていたビビだが、だんだんと熟れてきておもしろがっているフシがある。

「ぎゃははははっ！」

突然ルーファスが笑い出した。ビビがなにかをしたのかと思われたが、犯人はファウストだ。真顔でルーファスの胴体をくすぐっていた。

「物理的には切り離されているが、空間は繋がっているな」

切り離されていても、胴になにかをすれば首が反応する。呼吸をしたり、血を流したりできるのも、胴と首が完全に切り離されていないことを意味している。

「ぎゃははははっ！」

またルーファスが笑い出した。

今度はビビだった。

「わぁ、おもしろい♪」

「ひひひっ、ひゃ、ひゃめて……苦しい」

ジタバタと胴体がベッドで暴れる。

ついでにブンブン！

刃が何度もベッドに打ちつけられたが、まったく切れるよう

すはない。血塗られさびついた剣では、物を切ることはできない。

ガシッ！

なんとファウストが刃を素手で受けた。

ルーファスとビビは啞然とした。

——切れてない。

やはり切れないのだ。

ファウストは冷静な顔つきだった。

「この呪われた剣は首しか斬れないのだ」

「やっぱり僕はこの剣で首をはねられたんですか？」

「そうだ。封印していた鞘から抜いたせいだな」

「（抜きたくて抜いたんじゃないんですけど）どうやったら呪いを解くことができるんですか？」

「まずは鞘を持ってこい、話はそれからだ」

「ちよつとビビお願いできる？」

顔を向けられずに話しかけられたビビはあからさまにイヤそうな顔をした。

「ええー、めんどくさあーい」

「まただ、めんどくさい。」

「お願い、一生のお願い！」

一生とは生まれて死ぬまで。現在生首で半分死んだようなものんだ。

「しかたないなあ、スイーツ一個ね」

「うわっ、がめつい！」

ビビは部屋を飛び出して行った。

残された生首は……。

「（スイーツかあ。おなかすいたなあ、この状態でなにか食べられるのかな？）」

血流などもイケるのだから、おそらく大丈夫だろう。

ファウストがルーファスをガン見している。正確にはその症状を観察していた。

「本当に斬られた者ははじめて見たが、ふむ……体調などにはなんら異変はないようだ」

「あの鞘さえあれば元に戻るですよね？」

「戻らんな」

「はあ？」

先生に向かって『はあ？』とか言ってしまった。ヤンキーのごとく『はあ？』だ。

ファウストはすました眼で生首を見た。

「鞘は剣を封印するにすぎない。次の被害者を出さないためのな」

「また切るってことですよね（僕の手から離れないのに、この状態で切ってしまった殺人鬼じゃないか）」

もう十分にブンブンしたので、目撃者にはかなりヤバイ殺人鬼モンスターだと思われただろう。

「ならどうやってたら元に戻れるんでしょうか？」

続けて尋ねた。

「それそのものは簡単だ。他人の首をはねればいい」

「……はい？（僕に殺人鬼になれってこと？）」

「風邪は他人にうつせば治るといっただろう、それと同じだ。その剣で他人の首をはねれば、その者が新たに呪われ、今のおまえと同じ状況になる。そして、おまえは元通りというわけだ」

「そんなことできるわけじゃないですか」

口ではそう言っているが、手元はブンブンヤル気だった。

もちろん口だけでなく頭でもそんなこと思っていない。思っていない——でも、身体が抑えきれない。

ベッドで寝ていた胴体がバツと立ち上がったかと思うと、剣を振りかざしてファウストに斬りかかった、

「逃げて先生！」

「フンッ！」

逃げるまでもなくファウストは片手でルーファスの胴体押し飛ばした。狂気に駆られ、凶器をブンブンするルーファスなので、肉体はひ弱なのだ。

床に叩きつけられるようにして転がる胴体。首も苦痛を浮かべている。

「先生、なにするんですか！（思いっきり腰打ちつけた、尾てい骨を打つとか……うう）」

胴体と切り離されていても、詳細な痛みが脳まで届くらしい。

「ルーファス！」

「は、はい！」

名前を怒鳴られルーファスの胴体がピタッと止まった。

「呪われているとはいえ、それに屈するとはなにごとだ。精神

を統一して魔力を制御すれば、呪いに自由を奪われることはないのだ」

「は……はい（そんなこと言われてもムリだよ）」

「その呪いはごくごく弱いものだ。なぜなら本体の呪いではないからだ」

「と、言いますと？」

ファウストは溜息を落とした。そんなことも知らないのか、仕方ない説明してやろうという顔つきだ。

「ドウラハンとは首なし騎士の妖魔だ。おまえが呪われたのは、その剣に過ぎない。ドウラハンがその剣で首を狩り続けることで、その剣事態が魔導生物のように意思を持ちはじめたのだろう。長らく封印されていたことで魔力が抜け、現在は微力の魔力しかもっていないことは、おまえでもわかるでしょう？」

「（わからないです）はい、わかります」

心で思ってもわからないだなんて言えなかった。

この世界の魔力の根源はマナと呼ばれるものである。微量の状態では目で見ることができないが、多く集まることでだれの間でも確認することができる。小さな光球としてフレア化したり、宝石や鍾乳洞のようなものとして結晶化することもある。

魔導士などは、一般人が見えないようなマナを感知、もしくは視覚として視ることができるといったように鍛錬しているのが当たり前だ。

ルーファスはドウラハンの剣に宿った呪いの根源になっているマナを視ようとした。が、そもそも現在、首が明後日の方向

を向いているため、マナを視る以前の問題だった。

しばらくすると、ビビが駆け足で保健室に戻ってきた。

「なかったよーっ！」

元気な声でご報告。

「ちゃんと探したの？」

ルーファスが不満そうに尋ねた。

「ちゃんと探したよお、一生懸命がんばったもん。疑うなら自分で探したらあ？」

ビビはぷうっと頬を膨らませた。

鞘がなければ封印ができない。封印ができないければ――。

「(どうせ僕の身体はこのままなんだけど)」

とくにルーファスには影響はないようだ。

と、思われたのだ――。

床で倒れてた胴体が勢いよく起き上がり、ブンブンしながらビビに襲い掛かったのだ。

「こないでっ！」

両手を突き出しビビはドンと胴体を跳ね飛ばした。

簡単に胴体は床に倒れて難は逃れられた。やっぱり弱い。弱いのだが、問題は徐々に凶暴化していることだ。

倒された胴体はムクツと立ち上がり再びビビに襲い掛かった。

「ルーちゃんヤダッ！」

「ヤダって言われても身体が言うこと聞かないんだよ！」

「こないでっって言ってるのにつ！」

ビビちゃんが顔を背けながらグーパンチを放った。

「ぐえっ」

見事、ルーファスの柔らかい腹部にヒット。呻きながら両手で腹を押さえて、ゆっくりと後退りながら倒れた。

バタッ。

ルーファスは目を開けたまま気絶していた。

辺りは真っ白だ。

ぼんやりとした視界。

だれかが呼ぶ声がある。

——ルー……ルー……ス……ルーファス！

だんだんと声がハッキリとしてくると共に視界も開けてきた。

「立つんだルーファス！」

その荒ぶり懇願のこもった声でルーファスはカッと眼を開けた。

「だれだよ！」

いの一番でルーファスは叫んでしまった。

目の前には眼帯出っ歯のハゲオヤジ。

「立つんだジョー！」

「いや、ジョーじゃないから（ジョーってだれだよ）」

ジョーがいったいだれなのかわからないが、気づいてみればルーファスの格好が変だった。

真っ赤なボクサーパンツに傷だらけのグローブ。格好はボクサーなのだが、身体が貧相すぎ。真っ白ボディはもやしっ子の鏡。ちよっと最近おながぶくつとしてきたのが悩みの種だったりする。

「えっ、なに、この格好で僕にどうしろと？」

「行け、ジョー！」

「だからジョーではないんですけど」

「いったいなに行けと？」

ここはリングの上だった。顔を上げると、その先には馬に乗った首なし騎士。

「ボクシングじゃないし！」

対戦相手はボクサーではない。

ドゥラハンだ！

「ん？」

ルーファスはなにかに気づいた。

ドゥラハンが抱えている生首。

「僕じゃないか！」

抱えられている生首はルーファスだ。

さらのおかしなことに自分の視線の高さだ。まるで胴体に首が乗っているような。慌てて頭を手探りで触ろうとしたが空振りするばかり。だが、視線の高さはいつもの頭の位置なのだ。

微かな声をする。

《……ルーファス……マナの流れを……のだ》

少し高圧的だが、聞き覚えがあつて安心する。ファウストの声だ。

姿は見えなくても声をする。まるで心の中に直接語りかけてくるような感覚。そして、ルーファス理解した。

「精神界だ。僕の心の世界……いや、ドゥラハンの剣と僕の精

神がせめぎ合う世界だきつと」

ファウストの声は現実世界からの声に違いない。

また声が聞こえる。

《……ようでは……落第だぞ》

途切れ途切れだが、最後のキーワードはハッキリと聞こえた。
ルーファスはだいたい理解した。

この世界に迷い込む前にファウストが言っていた。

——精神を統一して魔力を制御すれば、呪いに自由を奪われることはない。

つまりそんな簡単なこともできないなら、落第だぞ。と、いうことだと思われる。

ルーファス対「バーサス」ドゥラハン！

戦いの熱い火ぶたが今切って落とされる！

《三》

赤コーナードゥラハン！

青コーナードゥラハン！

戦いのゴングがカントと鳴り、ルーファスはそつちを振り向くと、実況のアナウンサーがいた。

「チャンピオン優勢と言われる中、挑戦者はいかに戦うのか。

見物ですねえ」

「挑戦者は今日のために必殺技の特訓を積み重ねてきたらしい

「からね」

と、アナウンサーの横には謎の解説者。

思わずルーファス。

「ただだよっ！ 必殺技なんてないしっ！（ツッコミどころ満載過ぎる。本当にここは僕とドゥラハンの剣の精神界？）」

ルーファスの精神が反映されていないとしたら、ボクサーのシチュエーションはドゥラハンの剣のせいということになる。

「（なんでボクサーなんだろ）」

悶々と疑問を抱えながら、もうすでにゴングは鳴っている。

ドゥラハンに抱えられた生首がニヤリと笑った。ルーファスの顔を持ちながら、ルーファスではない表情。すでに首は呪われた剣に囚われてしまっている。

現実世界で錆びついていた剣は、生々しく血を滴らせていた。剣は振り上げられるとともに血のりを散らし、ルーファスに向かって襲い掛かってくる。

ルーファスはグローブを構え、一瞬だけファイティングポーズを決めた。

「つて、すでにボクシングじゃないし！（そもそもボクシングできないし）」

すぐさま魔法詠唱をはじめ。

「ライトボール！」

とりあえず悪霊っぽいモノには光あれ！

「うわっ！」

声をあげたのはルーファスだ。

魔法を唱えたと同時に目の前に現われたのは、ハゲオヤジ！
「だれだよ！」

と、ツツこむしかなかった。

馬のヒヅメが聞こえる。ドウラハンはすぐそこまで迫っている。

オヤジになんて構ってられない。さらに詠唱をする。

「フラッシュュ！」

ピカーン！

ハゲオヤジの頭がまばゆい光りを放った。

チラッとハゲを視ながらルーファスはシカトを決め込んで、さらに連続して詠唱する。

「ライトボール！ ライトボール！ ライトボール！」

ハゲの僧侶が三人あらわれた。

「なんなのこの世界！」

精神界は混沌としていた。

ルーファスは眼が合った。

ニヤリと下品に笑う自分と――。

ビュユユツン！

血塗られた魔剣が風と共にルーファスのないハズの首を斬った。

「ヒイイイイッ！」

ガバツ！

叫びをあげたルーファスが冷や汗を垂らしながベッドから跳

ね起きた。

跳ねたのは生首だ。

前方に見えるのは自分の後ろ姿。胴体が勝手に部屋を駆け出していく。

部屋の隅からうめき声が聞こえる。

「……ッ、油断した」

ファウストだ。なんとファウストが床に尻餅をついて倒れているではないか？

「ルーファスすぐに追え！ おまえの胴体は凶暴化しているぞ！」

「えっ、追えって言われましても」

首だけどうしろと？

ルーファスは視線を動かしビビを探したが、部屋にいないようだ。

「あのビビは？」

「おまえの胴体が追っているのがビビだ」

「ええっ!? ど、どうしてですか？」

「胴体をくすぐっておちよったからだ。奴はかなり怒っているぞ」

「くすぐった……?？」

疑問符が浮かぶ。

くすぐったかったか？

感じない。

くすぐったさだけではなく、今胴体が廊下を走っているであ

ろう感覚も感じなかった。

「あのお、ファウスト先生」

「いいから早く追わないか」

「いや、その…：胴体の感覚を感じなくなってしまうんです
が…：」

「まったくか？」

ファウストは眉をひそめて神妙な面持ちをした。

「はい、まったく」

「危険な状態にあることは間違いない。首と胴体の繋がりが薄
くなっているのだ。つまり、早く胴体と首を一つにせねば、別
々の存在となるだろう」

「…：すぐ困ります」

「ならば早く胴体を追え」

と言われても困る。

ファウストは手のひらにおでこを乗せて頭を抱えると、その
まま前髪をかき上げて顔をあげた。

「世話の焼ける教え子だ」

グイッとファウストはルーファスの生首を抱えた。

そして、そのまま保健室を飛び出した。

廊下を駆け抜けていると、出くわした生徒がいきなり指を差
してきた。

「さっきの！」

指を差されたのは生首だ。

すぐにファウストは察した。

「胴体を見たのだな？」

「は、はい」

生徒はこくりとうなずき、ファウストはさらに尋ねる。

「どこへ向かったのだ？」

「あつちです」

生徒は階段を指差した。

そちらへ顔を向けると上のフロアから悲鳴が聞こえた。

「ビビだ！」

ルーファスが声をあげた。

すぐさま階段を駆けのぼる。

いた！

階段をのほり切って、右手の廊下に目を向けると、ビビが首なし胴体が振るう魔剣を必死に跳んで跳ねてしゃがんで避けているところだった。

ビビがこちらに顔を向けた。

「助けて！」

ファウストは魔法を唱えようとする。

「シャドウソーイング！」

足止め魔法だ。相手の影を拘束することにより本体も拘束する。

しかし、まさかの事態が起きた。

首なし胴体が魔剣を振るった。その刃が向けられたのは己の影。なんと物質である剣が影を切ったのだ。

そう、影縫いの影貼りを斬り飛ばし、拘束を解いたのだった。

ファウストが苦々しい顔をした。

「(やはりルーファスだとは思わんほうがいらしい)」

首なし胴体はルーファスの能力値を上回っている。もはやブ
ンブンではなく魔剣士なのだ。

無断のない動き。力強い剛剣の刃がファウストに襲い掛かる。
ビビよりも先に始末する相手だと認識されたのだ。

と、ファウスト対「バーサス」ドウラハンの本格的な戦いがは
じまろうとしている中、抱きかかえられたままのルーファス。

「先生ちよっと！」

叫んだルーファスの鼻先を刃が掠めた。

冷や汗たらり。

再び魔剣が斬りかかってくる。

生首を抱きかかえたままでは不利だ。

「受け取れ！」

投げた。

ファウストがビビに向かって生首を投げた。

「ぎゃああああっ！」

叫ぶルーファス。

「えっ、ちよ……ムリ！」

慌てて右往左往ステップを踏むビビ。

「……あ」

と、小さく蒸らしたビビの頭上を生首が飛んでった。

「うわああっ、だれか受け止めて！」

叫んだルーファスの目に飛び込んでくる廊下。落ちたら痛そ

うっていうか、頭蓋骨が陥没しそうだ。

もうダメだ！

っと思ったとき、どこからとも無く手が差し伸べられた。

スツと生首と廊下の間に差し伸べられた手。

ちようど通りかかった女子バレー部員だった。

そうだ、バレー部なら床スレスレのボールだって拾える。

生首に手が触れ——跳んだ！

生首がまるでバレーボールのように跳ばされた！

バレーはボールを床に落としてもイケナイ。そして、キャッチしてもイケナイのだ。つまりいつもの習性で、ボールに見立てた生首をポーンと上へ跳ばしてしまったのだ。

近くにいた別のバレー部員が空かさず動いた。ルーファスの真下だ、ここなら確実にキャッチできる。

「トス！」

ポーンと生首が打ち上げられた。

だよね、ですよね、ボールが来たたらトスするよね。だってバレー部員だもの。

となれば、オチは決まっている。

第三のバレー部員が颯爽と駆ける。

ぞしてッ！

華麗に高くジャンプしたかと思うと、反るほどに振り上げた腕を振り下ろす！

レシー——ッブ——！

「フゴオオオッ！」

無残な悲鳴をあげて生首がぶつ飛ぶ。

鼻血、鼻水が入り乱れる展開！

生首が飛んでった場所は首なし胴体だ。

魔剣が構えられる。

なんとバツターの構えだ！

カッキーン！

剣の腹でハエを叩くように生首が打ち返された。

「ヌベツ」

気を失っている生首から異世界の言語が短く発せられた。

生首が飛んでった先は壁だ。硬そうな壁だ。魔導学院の対攻

撃魔法でもそこそこ踏ん張れる壁だ。

今度こそ絶体絶命か!?

と、そこへちようど通りかかったのは、泥だらけのユニホームを着た男子生徒。

その男子生徒が生首に気づいて構えた。

両手を広げ、鬼神が立ちふさがるかのごとく気迫を発するそ

の構えは、そうだ守護神だ、砦を守るゴールキーパーだ！

彼なら受け止めてくれる。ゴールキーパーの彼なら、ここま
でたくみにパスを繋いできたボールですら、絶対に止めてくれ
るはずだ。

そう、思い起こせば長かった。

はじまりはなんだっただろうか……？

そうだ、彼女が放った——ビビが放ったシュートだった。

あの時点で思わずボール扱いされちゃって、アレやコレやあ

ったりなかったり、ここまでみんなが繋いだパスは無駄にはしない！

今こそ実を結ぶトキだ。

ゴールキーパーの額から珠の汗が流れた。

あの守護神が、この守護神が、まさかプレッシャーを感じているだとおっ!?

鬼気迫る生首。

血みどろ鼻水パニック。長髪を結うゴムひもが切れ、髪の毛がザンバラバンバンバン。その姿はまるで、ボールの軌道を炎で描いているようだ。

ゴールキーパーの下半身にグツと力がこもった。

ゴゴゴゴゴゴゴオオオッ！

ぶっ飛んできた生首が腹で抱きかかえるように受け止められた。

ゴールキーパーが苦悶の表情を浮かべている。

ガッシリと受け止めたはずだ。

しかし、戦いはまだはじまったばかりだった。

押されている。

生首を抱きかかえたまま、ジリジリとゴールキーパーが後ろへ引きずられるように押されている。

すごいパワーだ。受け止められてもなお、その勢いを殺すことなく、守護神の身体を押しているのだ。

「フレーっ、フレーっ、クラ学！」

どこからともなくチアリーダーが応援に駆けつけた。

ちなみに『クラ学』は『クラウス魔導学院』の略である。

攻防を続けている生首とゴールキーパー戦い。

ゴールキーパーが眼を剥いた瞬間、ふっと足が浮いた。

それはまるで堤防が崩れたような瞬間だった。

瞬き一つしない間にゴールキーパーが後ろへ吹っ飛ばされた。

ドゴッ！

激しく背中を壁に打ちつける音。

負けたのだ。

いや、勝ったのだ。

みんなが繋げたボールが見事ゴールを決めた瞬間だった！

うなだれるキーパーの手元からボールが力なく滑り落ちる。

ゴン。

ボールではなく生首だったので、ちよつと生々しい音が廊下に響き渡った。

……………。

熱狂から一変して静まり返った放課後の廊下。

……………。

そして、みんな正気に戻った。

おのおのにハッとした表情を浮かべる。

自分たちはいったいなにをしていたのか？

今さらバレー部員が生首を見て叫ぶ。

「きゃーっ！」

もつとも生首と触れ合っていたゴールキーパーもギョツとしている。

さっきまでの異様なテンションはなんだったのか？

解説しよう！

「このドゥラハンの生い立ちに関係がありそうだ」

と、話を切り出したのはファウストだった。

「ドゥラハンとは首なし騎士の総称で各地に存在しているのだが、このドゥラハンは本人が残した手記によると、スポーツ万能で将来を有望視されていた若者らしい。彼はどんなプロスポーツ選手にでもなれる才能を持っていた。しかし、戦争が起きてしまい彼も戦地に赴き……そんな彼の怨念が彼をドゥラハンにし、その持ち主の怨念が剣に宿りおまえたちに幻術をかけていたのだろう」

緊急スクープ！

ドゥラハンはただのスポーツ好きだった！

悲しいんだか悲しくないんだか、ドゥラハン誕生秘話を聞いたビビが、なにかを思い付いたようにポンと手を叩いた。

「じゃあ思う存分みんなでスポーツすれば呪いも解けるんじゃない？」

それはグッドアイデアだねっ！

と、廊下の片隅では血だらけで瀕死状態の生首。

どう考えたってグットなわけあるかいっ！

ノリツッコミを終えたところで、ファウストが生首を拾い上げた。

「回復魔法はまったく使えんのだが……」

さてさてどうしたもののか？

「生きてるのお？」

とビビが生首を覗き込んだ。

意識を失って痙攣している。かなりヤバそうだ。

そこへ颯爽と現われたユニホーム姿。横から身体をスッと入
れてきて、ファウストから生首を奪った。男子バスケ部だ！

バスケ部員はすぐにドリブルをしようとした。

ドゴ。

生々しい打撃音。

予想通り弾まない。

ボールじゃないもん、生首だもん！

落としたボールを拾い上げ、ピポットピポットピポット――
では前に進めない。片足を軸にその場をグルグル回るだけだ。

バスケ部員はパスの構えをした。

しかし、パスを受ける者はいないようだ。

ファウストがツカツカと歩いてバスケ部員から生首を奪おう
とした。

「この程度の魔力に当てられて惑わされるとは、ウチの生徒の
質も落ちたものだ」

スツと手を伸した。

すると、ボールもスツと引かれた。

ファウストは相手を睨み、サツと手を出す。

するとサツと引かれた。

素早くササツと手を出すとササツと引かれ、サササツと出す
とサササツと引かれた。

イラッとした表情でファウストが右往左往に腕を動かし奪おうと躍起になる。

それを針の孔に糸を通すがごとく、そして細やかに縫うかのごとく、ボールは逃げ回る。

ダメだ、ボールが奪えない。

間違えた、生首だ。

しかし、バスケット部員はボールだと思って死守しているのだ。

敵にボールは渡さない。

かといって、パスする味方もない。

バスケット部員、絶体絶命のピンチ！

果たしてこの難局をバスケット部員はいかにして乗り切るのか！

「フレ、フレ、クラ学！」

そして、チャリダーはまた幻術に取り憑かれていた。

《四》

「フレ、フレ、クラガク！」

チャリダーに混じってビビも応援団に加わっていた。しかも、どっから手に入れたのか、ポンポンを両手に持ってフリフリしている。

応援団に加わっているのはビビだけかと思ったら、ぞくぞくと生徒たちがどこから押し寄せるようにやってきて、大声援を送りはじめたではないか!?

大波のように声援があたりに木霊する。

「立つんだ、立つんだジョーッ！」

「ジョーじゃないし！」

ツッコミながらルーファスは目を覚ました。

バスケット部に抱えられたまま、あたりを見回すとコワイ顔をしたファウストと眼が合った。

「ルーファウス！」

「(えっ、なんでいきなり僕、怒鳴られてるの?)」

八つ当たりです。

依然としてファウストはボールを奪うことができずにいた。

「ええい、こうなれば仕方あるまい！」

ファウストの身体を包み込むような黒いオーラ。魔力はマナフレアのように。光球として視覚化することもあるが、このようにユラユラと煙立つこともある。

「奪えぬなら燃やし尽くすのみ。シャドウフレ——」

思いつきり攻撃魔法！

——を放つ寸前、廊下の角からカーシャがあらわれた。

二人の教師の目が合った瞬間、火花がバチバチと飛び散った。

「ん、ファウストではないか？ 先に言っておくが、妾のサイフには小銭しか入っていないからな」

「あなたたつてひとは、そうやっていつまで借金を踏み倒す気なのですか？」

カーシャはファウストに5000ラウルの借金がある。

契約書はこれだ！

ファウストが片手で垂らすように広げた羊皮紙が揺れる。風もないのにバサバサと揺れ、まるで地響きのような唸り声がある。どこからともなく聞こえる。

悪魔の契約書。

契約書の中から悪魔が呻き声を上げて飛び出してきた。

悪魔と言ってもその姿は仔悪魔ビビちゃんとは似ても似つかない。フライパンでましたみたいな潰れた醜悪な顔。ちよつと茹ですぎましたみたいなお赤黒い肌。二本の角は思わず両手でつかんで、操縦桿ごっこをしたくなる！

とにかくっ、とつてもコワイ悪魔なのだ。

「今日という今日は許しませんよ」

ファウストはボール奪えないことで、完全にカーシャにも八つ当たり。

ポイントと生首が捨てられた。

「わああっ先生！」

叫ぶ生首にカーシャは目をやった。

「ルーファス……か？（ファウストよりあっちのほうが楽しそうなのだが）」

そんな都合には合わせてくれない。

悪魔が鋭い爪を振り上げて襲い掛かってきた。

クラウス魔導学院恒例行事のカーシャとファウストの小競り合い。生徒たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていく。どうやらドウラハンの幻術も溶けたようだ。

で、肝心のドウラハンの剣と首なし胴体は？

なんて探してる余裕などルーファスにはなかった。

放物線はすでに頂点を折り返し、顔面から床に直面しようとしていた。

「助けて！」

ブフォオオオオオオオオツ！

突如吹き荒れた狂風。暴走教師のどっちかの放った魔法の余波が風を巻き起こし、激突寸前だった生首を吹き飛ばした。

どうにか床直撃の危機は回避されたが、別の問題が浮き彫りになってきた。

もうすぐこの場は戦場となるだろう。

ルーファスは自らの意思で逃げるできない！

今の突風だってヘタをすればヤバかった。

自由落下で激突場所に到達しようとしている生首に、さらなる危機が迫っていた。

大きくのを外したツララがこっちに飛んでくる。

避けることは不能！

ルーファスは口いっぱい空気を吸いこんでほっぺを膨らませた。

「ヨガファイア！」

ブフォオオオツ！

口から火を吐いた生首。もう曲芸の域に達している。

ツララの矢は炎によって溶かされたのだが――。

「あちいつ、ちいつ、ひゃあつ前髪に！」
引火。

そして、ドゴツと顔面から床に激突した。

「……………（イタイ、もうヤダ）」

特有の焦げ臭さが鼻をグギユ〜とさせた。

「ルーちゃんだいじよぶ!?」

今までどこかに消えていたビビが駆け寄ってきた。

生首を拾い上げて顔を自分に向けて、プツとビビは噴き出した。

「（前歯が抜けてる）」

「どうかした？」

「ぷっ……んぷ……な、なんでもないよ」

「そう？」

不審な目でじとーっと相手を見つめながらも、本人は前歯が逃走したことに気づいていないようだ。

とりあえずルーファスは別の話を切り出す。

「ところで今までどこに行ってたのさ？（ビビさえいれば床に激突せずに済んだかもしれないのに）」

そして、歯も抜けずに済んだ。

「それが……みんなで甲子園を目指してたんだけど……シヨツクなことに野球部員がひとりもいなくなつて」

なんの話だよ！

とりあえずドウラハンの剣のせいでみんなが混乱していることは間違いない。

ドカーン！

ゴゴゴゴゴッ！

近くでなにやら騒音がする。そういえばここは戦場だった。

「とにかくここを離れよう」

ルーファスが提案するとビビはうなずいた。

「うん」

放課後の学院には普段から多くの生徒が残っているが、今日はとくに生徒が多い。

その多くの生徒が体操着姿だった。

ルーファスとビビはドウラハンの剣を探して、メインスタジアムまで着ていた。

多くの在校生および関係者がいるクラウス魔導学院は、それひとつで都市として完結している。グラウンドもスポーツごとに分れていたり、プロスポーツも行われるスタジアムも有している。

メインスタジアムは通称ビッグエッグ。その名のとおり、エアドーム式全天候型スタジアムであり、つまり屋根付きドームである。

明日の大運動会のメイン会場でもある。

秋分の日に合わせて毎年開催されるクラウス魔導学院秋の大運動会。ちなみに学生の公募で決まった今年のスローガンは『』である。

スタジアムのグラウンドでは競技の準備や予行練習が行われている。

体操着姿の生徒が多い中、空色ドレスがふあふあと歩いてい

るのが目についた。

「ローゼンクロイツ！」

ルーファスが声をかけた。

が、ローゼンクロイツはまったく気づかないようで、ふあふあ
あと歩き続け雲をつかむような動作をしている。

「ローゼンクロイツ！」

また声をかけたが、やっぱり気づいてもらえない。

「ちょっと近づいてくれる？」

頼まれたビビはローゼンクロイツに近づきながら口を開けた。

「ローゼン！」

やっぱり気づかない。続け様に呼びまくる。

「ローゼンクロイツ！ ロックン！ ローケン！」

「ん？（ふにゃ）」

やっと振り向いた。

そして、一瞥してすぐに顔を空に向けた。

「なんだルーファスカ（ふあふあ）」

「呼んだのアタシだし！」

ビビはスルー。抱えているルーファスの生首にも気づいたら
しいが、驚かずに素っ気ない態度。

自分がこんな目に遭っているのに素っ気なくされて、ルーフ
アスちよっぴり寂しげ。

「いやいやいや、僕のこんな姿見て驚かない？ ちょっとは驚
こうよ」

「驚いたよ（ふあふあ）」

表情一つ変えずの一言。まったく驚いているように見えない。そして、続け様に一言。

「さっきはね（ふにふに）」

さっきとな？

首がないので、首を傾げているつもりかルーファス。

「過去形？」

「胴体が水泳してるのを見たよ、服を着たまま（ふにふに）。

普通、服は脱ぐよね、本当に驚いたよ（ふにふに）」

驚くポイントがズレとる！

そりゃ、服を着たまま水泳をしているひとがいたら驚く。なにごとかと思うだろう。でも、今はそこより重要なチャームポイントがあったはずだ。首がないっていう。

ビビが身を乗り出す。

「どこで見たの？」

「あっち（ふに）」

背を向けたローゼンクロイツにビビとルーファスは注目した。普通は指を差している方向を注目するだろう。けれど、今は背中がポイントなのだ。

ルーファスはそれを見ながら尋ねる。

「背中についてるそれどうしたの？」

「ん？（ふにゃ）」

ローゼンクロイツは肩越しに自分の背中を覗き込んだ。

「よく見えないな（ふにふに）」

ローゼンクロイツ視線では、なんだか棒に先端のようなもの

が見える。

よく見ようとローゼンクロイツは首を伸した。

そして、自分の背中を追って犬のようにその場でグルグル回りはじめた。

グルグル、グルグルグル、グルグルグルグル……。

どんどんと回転スピードが増していく。

グルルルルルルルル！

地面に穴を開けるドリルのように回りはじめた。

ビビが止めようと近づく。

「ローケン……きゃっ！」

突風で身体が押し戻され、砂煙に目つぶしをされた。

さらに回転は早くなり、やがてそれはトルネードを起こし、風が吹き荒れ、豪雨を撒き散らし、雷鳴を轟かせた。

明日の準備をしていた生徒たちが次々と吹っ飛ばされていく。

クラウド魔導学院に発令されたトルネード警報は、やがて王都全土にまで広がった。

ああ、このままでは明日の大運動会は中止だ。

みんなこの日のために汗水垂らしてがんばってきたというのに。天才だけに天災のローゼンクロイツのせいで中止になるとは、だれが予想しただろうか。天災とはそういうものだ。

嵐の吹き荒れるびしょびしょのグラウンドで、だれかが四つん這いになってうなだれていた。

うなだれすぎて首がない。

いや、首がないのは彼がドウラハンだからだ。

彼は泣いていた。首はないけど、まるでその姿は悲しさに打ちひしがれているようだった。濡れたグラウンドは彼の流した涙のようだった。

明日の大運動会が中止になる！

スポーツ大好きドウラハンにとって、どれがどんなに悲しいことか！

そうだすべての元凶はローゼンクロイツだ。ヤツのせいだ。明日の大運動会は……ヤツさえ、ヤツさえいなければ……とドウラハンの剣が思ったか別として、首なし胴体がローゼンクロイツに果敢にも斬りかかった。

嵐が止んだ。

背中を手を伸したローゼンクロイツ。

ガシイイン！

振り下ろされた刃が受け止められた。受け止めたのはローゼンクロイツの背中にひつついていた鞘だ。ローゼンクロイツの背中には鞘が張り付いていたのだ。

そう、その鞘こそドウラハンの剣の鞘に間違いない！

片手に持った鞘で刃を受けているローゼンクロイツ。その表情はいつもと変わらず無表情。

攻撃を仕掛けている首なし胴体は剣を持つ腕から全身を震わせている。

一見して物理的な戦い見えるが、これは魔力による攻防だ。防御は物理的な強度に魔力がプラスされ、攻撃力もそれに同じ。ローゼンクロイツのエメラルドグリーンの瞳に五芒星が浮か

びあがる。

鞘が大きく振られ、払われた剣が首なし胴体の手から離れた。回転しながら後方に飛んでいくドウラハンの剣。

そして、どこからともなく流れてきた軽快な音楽。なんだか走り出したくなるような音楽だ。

「よい、ドン！」

と、だれかのかけ声と共にピストルが撃たれ、走者が一斉に走り出した。

走り出した？

わけのわからないうちにはじまった徒競走。おそらくドウラハンの見せる幻影に生徒たちが魅せられたのだ。

きよとんとするビビとルーファス。

そこへローゼンクロイツがふあふあとやってきた。

「ドウラハンは？」

尋ねたルーファスにローゼンクロイツが答える。

「はい（ふに）」

と、差し出した鞘。

これが答え？

ルーファスは受け取れないのでビビが受け取った。

「なあにコレ？」

「早く走りはじめないとビリだよ（ふあふあ）」

走る？

ビリ？

徒競走？

いいえ、バトンリレーです。

トラックを走る生徒たちに混じって首なし胴体が猛スピードで走っていた。向かうゴールにはドウラハンの剣が落ちている。その手から離れてもなお、胴体は魔剣に操られているのだ。

「ビビ早く剣を！ この鞘で封印しないと被害が！」
ルーファスが叫ぶ。

もちろん走らされるのはビビ。

「めんどくさあーい」

「そんなこと言わないで！」

泣くように叫ぶルーファス。

そこへローゼンクロイツが口を挟む。

「まずは剣を封印して呪いを弱めることだね（ふにふに）。そうすれば身体が勝手に操られることもないだろうから（ふに）」

「そこで妾の出番だ！」

ババーンと爆乳を揺らしながら突然あらわれたカーシャ。

「この妾の開発した何でもくつつける接着剤で首と胴をくつつけて万事解決だ、ふふ」

胸の谷間に手を突っ込んで接着剤が取り出された。

ルーファスは驚いたようだ。

「カーシャ？ うん、助かったよ（このままだったでしょうかと）
かと思ってた）」

「という接着剤を今なら格安の5000ラウルで売ってやろう」

商売か！

しかも50000ラウルってどこかで聞き覚えが……？

ビビが尋ねる。

「それでファウスト先生に借金返すお？」

「いや、ボーリング大会の打ち上げの飲み代に使おうと思っておるのだ（ご近所さん対抗と言っても一切、手は抜かん。優勝間違いなし、ふふっ）」

返さないのかよ！ 飲み代かよ！ しかもご近所付き合いをしてるなんて意外だ！

「50000ラウルは高いよ」

渋そうな顔でルーファスがぼやく。

意地悪るそんな笑みを浮かべたカーシャ、接着剤を高い高いする。

「ほれほれ、これが欲しいのであろう？ 今なら超特価の5000ラウルから、さらに値上がりして8000、いや10000ラウルでどうだ？」

値上がってるし！

ピンチのルーファスの足下を見るなんてヒドイ！

今は足もないけど！

こんなやりとりで時間を浪費して消費している間に、ドウラハンは今!?

前方にいたハズだったのに、いつの間にか後方だ！

しかも剣を手にはしている！

ブンブンしている！

バトンリレーなのに、バトンを渡せず走り続けているのだ。
ブンブンブンブン！

地鳴りを鳴らすような走りで迫ってくる。

ビビは瞳を丸くして逃げ腰になった。

「いや、来ないでっばー！」

生首を盾にしてガードする。

が、盾はまったくの役立たず。声をあげて戸惑うばかり。

「うわっ、こっちにくるよ！」

首なし胴体は剣を槍のように突き出し突進してくる。それは攻撃というより、バトンを渡す体勢だった。

そして、逃げるビビも後ろを振り向きながら走っているの、まるでバトンを受け取るような体勢。

そう、これはまさしくバトンリレー！

ひとからひとへ、バトンに思いを乗せて運ぶ。

いつの間にかスタジアムを埋め尽くす観客たち。

声援が飛び交い、合唱となり、感動が渦巻きはじめた。

バトンは走者だけの思いを乗せてるんじゃない。ここにいる全員の思いを乗せているのだ！

もう少し、もう少しでバトンの先がビビの手に届く。

って、バトンの先って切っ先だし！

「受け取れるわけじゃないじゃん！」

大声でビビがツッコミ手をさっと引いた瞬間、首なしの心が折れた。

ドゥラハンの剣が手から滑り落ちる。

スタジアムに響き渡る悲鳴の怒号。

首なしは気づいた。まだまだ、まだ終わっちゃいない。バント
拾い上げ、もう一度――。

と、腰をかがめて剣を拾おうとして、壮大に素っ転んだ！

ビビの背中にダイビング！

まるでスローモーション。

走馬燈のように蘇る記憶。

――立て、立つんだジョー！

「「ジョーじゃないし！」」

ルーファス&ビビのダブルツッコミが炸裂した瞬間、ドカン
と一発大転倒。ルーファスとビビを巻き込んで、大車輪のよう
に地面を転がり回った。

グルグル転がる生首。

「ぎゃああああうっ！（目が回るううううっ）」

地面に放り出されたように倒れ込んだビビが、眉尻を下げて
ゆっくり立ち上がった。

「いったゝい。ひざすりむいたあー」

うるうる瞳のビビちゃん。

胴体と生首は？

「あ、間違えた」

だれかがボソツとつぶやいた。

声のしたほうに目を向けると、カーシャの傍らでルーファス
が立ち上がるうとしていた。

ルーファスのシルエット。

そこにはなんと首がある！

カーシヤが手に持っているのはアノ接着剤。

ふあふあしているローゼンクロイツが、何気なくドウラハンの剣を鞘に収めていた。

ついに一件落着か!?

ルーファスの首も元通りに、元通り……に？

ビビが苦笑いをした。

「ルーちゃん……」

そして、あからさまにイヤそうな顔をした。

「キツモイ！」

新たな変態魔獣誕生の瞬間だった。

首が逆さま！

顔が背中から見える。

「キモイとか言わないですよ。どうしてくれるんだよカーシヤ！」

涙目でカーシヤに詰めよつもりが、逆方向に爆走。本人的にはカーシヤに向かっているつもり。

どてっ。

身体のバランスが取れずにコケた。

立ち上がろうとジタバツするルーファスの顔を、真上からローゼンクロイツが覗き込んだ。

「切り離すものが必要なら貸すよ？」

差し出されたのは鞘に収まっているドウラハンの剣。

恐怖に歪んだ表情で眼を剥いたルーファス。

無表情な目をして、ローゼンクロイツは口もとに不気味な笑みを浮かべた。

果たしてルーファスのその運命はッ!?